狐塚古墳

Kitsunezuka Tumulus

浜松市教育委員会

2015年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March,2015

狐 塚 古 墳

KITSUNEZUKA TUMULUS

Hamamatsu Municipal Board of Education

2015

1　狐塚古墳 遠景（北から）

2　発掘作業風景（南東から）

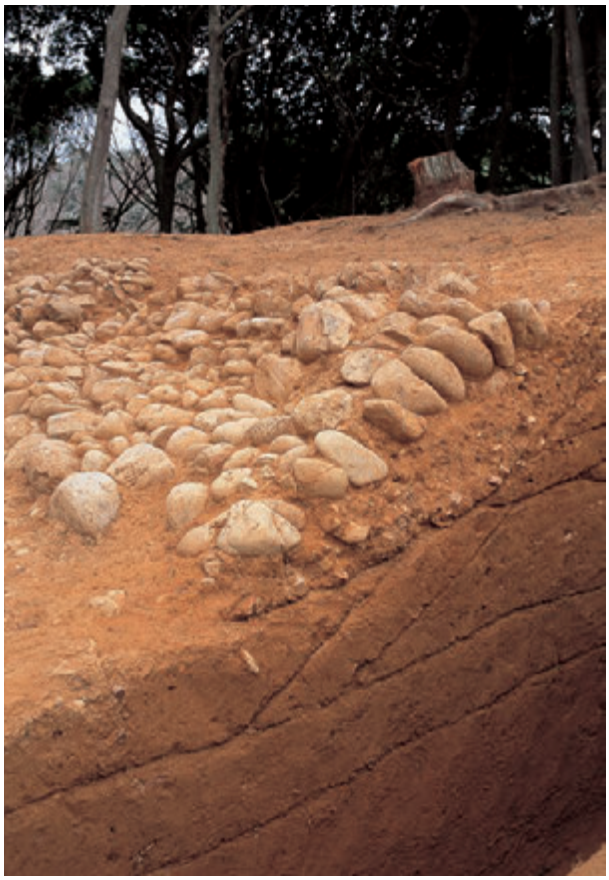
巻頭図版　2

1　東側上段葺石検出状況（北西から）

2　北側上段葺石検出状況（東から）

1　東西トレンチ上段葺石断ち割り状況（東から）

2　東西トレンチ墳丘盛土の状況（西から）



3　南北トレンチ墳丘盛土の状況（北西から）

4　南北トレンチ上段葺石断ち割り状況（南から）

1　狐塚古墳 出土埴輪

2　狐塚古墳 出土短甲

例　　言

1　本書は静岡県浜松市北区細江町 1196 番 1 外において実施した狐塚古墳の発掘調査にかかわる報告である。

2　当発掘調査は藤野建設株式会社が行った土取り工事に先立ち実施した。発掘調査は、予備調査、本発掘調査ともに藤野建設株式会社の依頼を受けて浜松市教育委員会が実施した。

3　発掘調査は、平成 23 年（2011 年）1 月 19 日から開始し、平成 23 年（2011 年）3 月 30 日までの間に実施した。調査面積は 260 ㎡である。

4　現地発掘調査は鈴木一有（浜松市文化財課）が担当し、和田達也、原田和子（浜松市文化財課）が補助した。

5　整理作業は鈴木一有が担当し、和田達也、鈴井けい子、坪井里恵（浜松市文化財課）の補助を得た。

6　本書の執筆は鈴木と和田が担当し、鈴木が編集した。第 1 章 3 を和田が担当した他は、すべて鈴木が執筆した。

7　本書に関わる写真撮影は鈴木が行った。

8　調査の記録、出土遺物は浜松市文化財課が保管している。

凡　例

1　本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海抜高である。

2　遺物番号は埴輪と副葬品に分けて、それぞれ連番を付した。

3　遺物の色調は『標準土色帳』（農林水産省水産技術会議事務局監修）に準拠した。

4　本書で報告する出土品の分別と収蔵先は、以下の通りである。

月岡資料（昭和 30 年代頃か、月岡準三氏の採集品、埴輪・短甲など）：浜松市博物館

細江町資料（1975 年以前の採集品、旧細江町保管、鉄器・砥石）：浜松市博物館

1975 年出土資料（埴輪）：浜松市文化財課

2011 年出土資料（埴輪）：浜松市文化財課

5　本書の作成にあたり、以下の方々のご協力、ご教示を得た。その名を記して謝意を表したい。

賀来孝代、阪口英毅、十河良和、高橋克壽、日高慎、向坂鋼二

狐　塚　古　墳

目　　次

巻頭図版
例　　言

第１章　序　論 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1
2　発掘調査の経過 …… 2
3　狐塚古墳をめぐる環境 …… 3

第２章　検出遺構 …… 11

1　調査前の状況と検出遺構の概要 …… 11
2　墳丘と葺石 …… 14
3　埴輪の検出状況 …… 16
4　墳丘の構造と復元 …… 20

第３章　出土遺物 …… 23

1　出土遺物の概要 …… 23
2　埴　輪 …… 24
3　副葬品 …… 47

第４章　後　論 …… 55

1　狐塚古墳の埴輪と製作集団 …… 55
2　狐塚古墳出土短甲をめぐる問題 …… 60
3　狐塚古墳築造の歴史的意義 …… 64

第５章　総　括 …… 71

図　　版

図　版　目　次

巻頭図版

1　1　狐塚古墳 遠景（北から）
　　2　発掘作業風景（南東から）
2　1　東側上段葺石検出状況（北西から）
　　2　北側上段葺石検出状況（東から）
3　1　東西トレンチ上段葺石断ち割り状況（東から）
　　2　東西トレンチ墳丘盛土の状況（西から）
　　3　南北トレンチ墳丘盛土の状況（北西から）
　　4　南北トレンチ上段葺石断ち割り状況（南から）
4　1　狐塚古墳 出土埴輪
　　2　狐塚古墳 出土短甲

図　版

1　狐塚古墳 全景（北東から）
2　円筒埴輪出土状況（南東から）
3　1　狐塚古墳 遠景（西から）
　　2　狐塚古墳 遠景（北から）
4　1　調査前墳丘残存状況（北西から）
　　2　調査前墳丘残存状況（北東から）
5　1　１トレンチ調査状況（東から）
　　2　２トレンチ調査状況（東から）
　　3　３トレンチ調査状況（北東から）
　　4　４トレンチ調査状況（東から）
6　1　完掘状況（北東から）
　　2　東側墳丘残存状況（東から）
7　1　東側上段葺石検出状況（北東から）
　　2　葺石詳細（H5 付近、北東から）
　　3　葺石詳細（H8 付近、北東から）
8　1　北側上段葺石検出状況（東から）
　　2　葺石詳細（H16 付近、北東から）
　　3　葺石詳細（H18 付近、北西から）
9　1　北側埴輪列検出状況（北東から）
　　2　埴輪検出状況（H16、北東から）
　　3　埴輪検出状況（H18、北東から）
10　1　東側下段葺石検出状況（北東から）
　　2　東側下段葺石詳細（南東から）
　　3　東側下段葺石詳細（北東から）

11　1　北側下段葺石検出状況（北から）
　　2　北側下段葺石詳細（東から）
　　3　北側下段葺石詳細（北西から）
12　1　墳丘断ち割り状況（北東から）
　　2　北側上段葺石断ち割り状況（西から）
13　1　東西トレンチ墳丘断ち割り詳細（東から）
　　2　東西トレンチ上段葺石断ち割り状況（東から）
　　3　東西トレンチ墳丘盛土の状態（西から）
14　1　南北トレンチ墳丘断ち割り詳細（北から）
　　2　南北トレンチ墳丘盛土の状態（南から）
　　3　南北トレンチ上段葺石断ち割り状況（北西から）
15　1　1975 年墳丘残存状況（西から）
　　2　1975 年遺物採集風景（西から）
16　1　1975 年墳丘残存状況（北西から）
　　2　1975 年崩落葺石残存状況（北西から）
17　主要埴輪
18　1　主要円筒埴輪
　　2　円筒埴輪 Ⅰ群（H18）
　　3　円筒埴輪 Ⅱ群（H20）
19　中段平坦面樹立埴輪（54 ～ 57：Ⅰ群、78・79・82・83：Ⅱ群）
20　円筒埴輪 Ⅰ群
21　1　円筒埴輪 Ⅱ群
　　2　円筒埴輪底部
22　1　円筒埴輪（貼付突帯口縁）
　　2　朝顔形埴輪
23　円筒埴輪詳細（29・37・50・51：Ⅰ群、60・61・66・75：Ⅱ群）
24　1　形象埴輪集合
　　2　家形埴輪
25　蓋形埴輪
26　1　甲冑形埴輪
　　2　盾形埴輪
　　3　靫形埴輪
27　1　長方板革綴短甲展開状況
　　2　長方板革綴短甲 左前胴・後胴：堅上第１段・第２段
28　長方板革綴短甲 堅上第３段、長側第１段・第２段
29　1　長方板革綴短甲 左胴：引合板・長側第３段・第４段
　　2　長方板革綴短甲 後胴・右前胴：長側第３段・第４段・引合板
30　1　長方板革綴短甲細部
　　2　刀剣類
　　3　鉄 鏃
　　4　砥 石

挿　図　目　次

Fig.1　狐塚古墳の位置 ……1
Fig.2　調査風景 ……2
Fig.3　整理作業風景 ……2
Fig.4　都田川流域の遺跡分布 ……4
Fig.5　都田川流域における首長墓の推移と遺跡の動向 ……5
Fig.6　都田川流域の首長墓 ……6
Fig.7　北島１号墳の概要 ……7
Fig.8　狐塚古墳の位置 ……8
Fig.9　狐塚古墳の周辺地形図 ……9
Fig.10　調査前の狐塚古墳 ……11
Fig.11　トレンチ詳細図 ……13
Fig.12　墳丘検出状況 ……15
Fig.13　葺石・円筒埴輪列の詳細 ……17
Fig.14　埴輪出土状態 ……18
Fig.15　埴輪出土位置図 ……19
Fig.16　墳丘の構築過程 ……20
Fig.17　墳丘土層断面図 ……21
Fig.18　墳丘復元図 ……22
Fig.19　細江町史所収の図版 ……23
Fig.20　円筒埴輪の群別と部分名称 ……24
Fig.21　円筒埴輪のハケメ ……25
Fig.22　円筒埴輪Ⅰ群実測図（1）……25
Fig.23　円筒埴輪Ⅰ群実測図（2）……26
Fig.24　円筒埴輪Ⅰ群実測図（3）……27
Fig.25　円筒埴輪Ⅰ群実測図（4）……28
Fig.26　円筒埴輪Ⅱ群実測図（1）……29
Fig.27　円筒埴輪Ⅱ群実測図（2）……30
Fig.28　円筒埴輪底部実測図 ……31
Fig.29　貼付突帯口縁円筒埴輪実測図 ……32
Fig.30　朝顔形埴輪実測図 ……33
Fig.31　家形埴輪の部分名称 ……34
Fig.32　家形埴輪実測図（1）……35
Fig.33　家形埴輪実測図（2）……36
Fig.34　家形埴輪詳細 ……36
Fig.35　蓋形埴輪の部分名称 ……37
Fig.36　蓋形埴輪実測図（1）……38
Fig.37　蓋形埴輪実測図（2）……39
Fig.38　甲冑形埴輪実測図 ……40
Fig.39　盾形埴輪詳細 ……41
Fig.40　盾形埴輪実測図 ……41
Fig.41　靫形埴輪実測図 ……42
Fig.42　その他の形象埴輪実測図 ……43
Fig.43　かわらけ実測図 ……43
Fig.44　長方板革綴短甲展開模式図 ……47
Fig.45　長方板革綴短甲実測図（1）……48
Fig.46　長方板革綴短甲実測図（2）……49
Fig.47　長方板革綴短甲実測図（3）……50
Fig.48　長方板革綴短甲実測図（4）……51
Fig.49　長方板革綴短甲実測図（5）……51
Fig.50　長方板革綴短甲立面合成図 ……52
Fig.51　長方板革綴短甲展開図 ……52
Fig.52　鉄鏃等実測図 ……53
Fig.53　刀剣実測図 ……53
Fig.54　砥石実測図 ……54
Fig.55　円筒埴輪群別模式図 ……55
Fig.56　蓋形埴輪復元模式図 ……56
Fig.57　狐塚古墳埴輪製作工人の構成 ……57
Fig.58　堂山古墳埴輪製作工人の構成 ……58
Fig.59　古墳時代中期の段階区分 ……59
Fig.60　長方板革綴短甲の細分 ……60
Fig.61　甲冑組合せ類型の比率 ……62
Fig.62　遠江における首長墓の変遷 ……64
Fig.63　堂山古墳群の詳細 ……67
Fig.64　堂山古墳と中型方墳 ……68
Fig.65　五ヶ山 B2 号墳の副葬品 ……69
Fig.66　潟湖をめぐる古墳の立地 ……70

表　目　次

Tab.1　円筒埴輪列の群別 ……31
Tab.2 ～ 4　出土埴輪観察表（1）～（3）…… 44 ～ 46
Tab.5　長方板革綴短甲の地板構成 ……61
Tab.6　遠江における甲冑出土古墳 ……63
Tab.7　遠江における方墳 ……66

第１章　序　論

１　調査に至る経緯

狐塚古墳の概要　狐塚古墳は、静岡県浜松市北区細江町老ヶ谷に所在する方墳である。1986 年に刊行された『細江町史』資料編六（細江町 1986）には、直径 13 ｍの円墳と紹介され、浜名湖北岸域における中期中葉の埴輪をそなえる甲冑出土古墳として広く知られていた。

この古墳にかかわる調査歴は比較的長期間に及ぶ。昭和 10 ～ 30 年代、遠州地域で考古資料の収集を精力的に行った月岡準三氏は、狐塚古墳にも踏査の足を伸ばし、埴輪や鉄器を採集した。以下、月岡氏によって採集された遺物群を「月岡資料」と呼ぶ。月岡資料は後に浜松市博物館の所蔵になり、現在に至る。狐塚古墳から出土した月岡資料については、『細江町史』及び『静岡県史』（静岡県 1992）に写真や実測図が掲載され、情報が共有化されている。

狐塚古墳の現地については月岡氏の採集後も良好な状態で保存されていたとみられるが、1975 年（昭和 50 年）に大規模な土取り工事が行われ、墳丘の３分の２ほどが破壊される事態に陥った。細江町教育委員会（当時）は工事によって破壊された部分の精査に努め、現地に散乱する埴輪や鉄器などを回収した。この時に採集された遺物群を「1975 年出土資料」と呼ぶ。1975 年出土資料は、細江町教育委員会が保管していたが、その詳細は整理されないままの状態であった。

残った墳丘については、その後の開発業者と町教育委員会の協議によって現状を維持することが合意され、古墳は現地に保存された。その後、行政区分は 2005 年（平成 17 年）の広域合併を経て、引佐郡細江町から浜松市北区細江町に移り変わり、出土品の管理や開発調整などの文化財保護業務も細江町教育委員会から浜松市文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関）が引き継いだ。

発掘調査の実施　1975 年の工事の後、一旦は保存が合意された当地であったが、2010 年（平成 22 年）、同じ事業者によって再び丘陵全体の土取り工事計画が浮上した。浜松市文化財課は、古墳の現地保存に向けて調整を図ったが、現状保存は困難との結論に到り、試掘確認調査を経て開発に伴う古墳全体の本発掘調査を実施することになった。

現地調査は 2011 年（平成 23 年）1 月 19 日から 3 月 30 日にかけて実施した。調査面積は 260 ㎡である。範囲確認調査を含め、2011 年の発掘調査で出土した遺物を「2011 年出土資料」と呼ぶ。

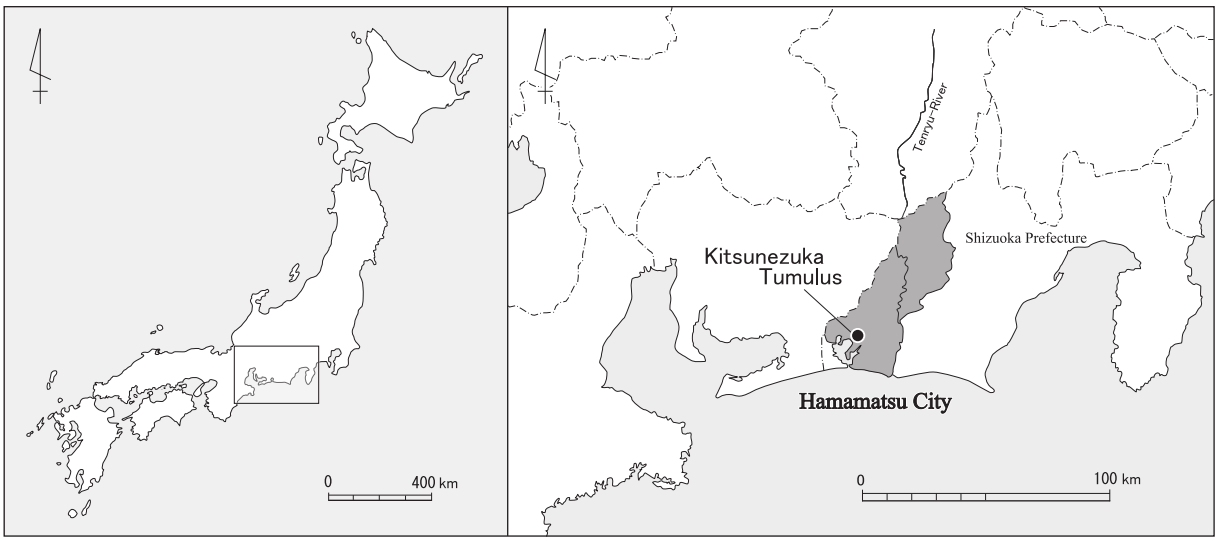


Fig.1　狐塚古墳の位置

２　発掘調査の経過

現地調査　試掘確認調査、および本発掘調査は通常業務の合間を縫って、2011 年（平成 23 年）1 月 19 ～ 26 日、2 月 4 日～ 2 月 23 日、3 月 14 日～ 3 月 30 日にかけて断続的に実施した。1 月 19 日には現地の伐採を開始し、調査前の墳丘を測量した。1 月 21 日には 1 ～ 4 のトレンチを設定し、本格的な調査を開始した。この後、数日間のトレンチ調査によって、葺石や埴輪を確認し、狐塚古墳は方墳であることを把握した。1 月 26 日には調査区を拡張し、東側の墳裾を面的に確認した。

若干の中断時期を挟んで 2 月 4 日には調査を再開し、2 月 14 日には 1 トレンチを上段まで拡張、中段平坦面と上段墳丘斜面を確認した。2 月 16 日には 1 ～ 3 トレンチも上段側に拡張し、上段斜面の葺石が良好な状態で遺存していること、中段平坦面には樹立状態を保った円筒埴輪列が残存していることが判明した。2 月 23 日には現況での墳丘測量を実施して、検出した葺石の状態を実測した。この時点で狐塚古墳の規模が検討できる材料が得られ、一辺 22 mの方墳ということが確定した。

再度の中断期間を挟んで、3 月 14 日に調査を再開した。ここからは、重機を活用して墳丘外側に堆積している表土を撤去した。3 月 18 日には墳丘斜面を完掘し、樹立状態が保たれている埴輪のすべてを確認した。3 月 22 日には全体の写真撮影を実施し、その後、墳丘斜面の葺石の実測、埴輪出土状態の図化に移行した。3 月 23 日には樹立状態の埴輪を取り上げ、墳丘の断ち割り調査を開始した。3 月 25 日には墳丘断面の実測を行い、葺石の実測作業を残すのみとなった。その後も遺存状態が良好な葺石の図化に手間取ったが、3 月 30 日には無事に全ての現地作業を終了した。この日のうちに機材なども片付け、現地を完全に撤収した。

現地説明会　現地調査が終了した 4 月 17 日、関係者の理解を得て、現地説明会を開催した。近在地に見学者のための駐車場が確保できなかったため、浜松市北区役所に駐車場を設定し、そこから往復 4km ほどの道のりの歩いてめぐる行程を企画した。当日は天候にも恵まれ、ウォーキングツアーとして好評を博し、市民 208 名の参加を得た。

整理作業　狐塚古墳出土品の整理作業は調査終了後から断続的に実施した。整理作業の過程で 1975 年出土資料の存在が明らかになり、月岡資料も合わせて総合的に検討する方針とした。整理作業は 2011 年度（平成 23 年度）から 2014 年度（平成 26 年度）にかけて、浜松市埋蔵文化財調査事務所（浜松市西区神原町、2013 年 6 月から浜松市北区引佐町に移動）において実施した。

調査参加者
現地調査　渡邊時次、石山勝弘、大城光明、須部公明、外波山泉
整理作業　林至美、北野恵子、峯野洋子、中村玲子

Fig.2　調査風景

Fig.3　整理作業風景

３　狐塚古墳をめぐる環境

（１）立地環境

狐塚古墳は、静岡県浜松市北区細江町老ヶ谷に所在し、三方原台地の北西縁部にあたる。三方原台地の北側には北部山地の山々が迫り、台地と山地の間を都田川が浜名湖に向かい西へ流れ、浜名湖の支湖である引佐細江に注いでいる。都田川本流域には小規模な平地が形成され、この小規模な平地には、都田町瀬戸付近において三方原台地が北側へ張り出し、平地の狭窄部が認められる。狭窄部を境として、下流域の平地（中川平野）と上流域の平地（都田盆地）の２つの空間に分けられる。また、都田川の支流である井伊谷川の中流域にも山地により中川平野と空間を分けられた平地（井伊谷盆地）がみられる。浜名湖に面した沿岸部にも小規模な平地が形成されている。

都田川流域とその周辺は、中川平野と都田盆地、井伊谷盆地、浜名湖沿岸部の平地の４つの小地域に分けることができる。狐塚古墳の立地は引佐細江地域において最も大きな平地である中川平野を見渡すことのできる丘陵上ではなく、沿岸部の平地と浜名湖の支湖を臨む丘陵上に位置する点が特徴といえる。

（２）歴史的環境

旧石器・縄文時代　都田川流域における旧石器時代の遺跡は、都田川中流域や支流である井伊谷川の中流域で確認されている。都田川下流域において人々の営みが明確になるのは、縄文時代になってからで、代表的な遺跡として、岡の平遺跡がある。岡の平遺跡では、縄文時代後期と想定される石棒祭祀遺構が検出されている。また、縄文時代晩期後半の土器が豊富に出土した。

弥生時代　都田川下流域では弥生時代の遺跡が豊富にみられ、平野部への人々の進出が活性化したことがうかがえる。岡の平遺跡（前期、中期後葉～後期）、井通遺跡（中期後葉）、祝田遺跡（後期前半）が代表的な遺跡として挙げられる。それぞれの遺跡において、中川平野における拠点集落と位置づけられる時期があり、集落の動向がうかがえる。

また、都田川流域では、９点の銅鐸が出土し、全国的に注目される地域である。なかでも都田川下流部の南岸にある「滝峯の谷」では、弥生時代後期前半に位置づけられる突線鈕２～３式の銅鐸が６点出土している。「滝峯の谷」の入口には弥生時代を通じて繁栄した岡の平遺跡があり、銅鐸の埋納との関連が想定される。都田川中流域では椿野遺跡が繁栄し、都田盆地の拠点集落に位置づけられる。井伊谷川流域における弥生時代の様相は明確ではないものの、北神宮寺遺跡において、弥生時代中期末葉の住居跡や周溝墓が確認されている。都田川流域における弥生時代は、「滝峯の谷」における銅鐸の集中的な出土や集落の動態から、中川平野を中心に繁栄していたと捉えられよう。

古墳時代　都田川流域における弥生時代の拠点は、岡の平遺跡や祝田遺跡などをはじめとした遺跡が展開する中川平野であったが、古墳時代前期には、都田川流域の拠点が井伊谷盆地へ移転したことが首長墓の動向からうかがえる。都田川流域における最初の首長墓は、前期前半（４世紀前葉）に築造された北岡大塚古墳である。北岡大塚古墳は井伊谷盆地北東部の丘陵上に築造された前方後方墳で、全長は 49.5 ｍである。その後、井伊谷盆地東部の丘陵上に馬場平古墳が造営される。馬場平古墳は全長 47.5 ｍを測る前方後円墳で、埋葬施設からは画文帯神獣鏡や銅鏃をはじめとした副葬品が出土した。馬場平古墳の築造時期は副葬品の特徴から前期末葉と想定される。馬場平古墳の南側には、同時期に築造された馬場平３号墳があり、前方後円墳の可能性も指摘されているが、不明な点が多い。北岡大塚古墳、馬場平古墳と連続して全長 50 ｍ級の古墳が井伊谷盆地を臨む丘陵上に築造されており、都田川流域の他地域に比べて、造墓活動の盛行は明らかである。

井伊谷盆地における古墳時代前期の集落遺跡は、矢畑遺跡や北神宮寺遺跡において検出されている。とくに、北神宮寺遺跡では、広範囲かつ密集した状態で住居跡や周溝墓が確認されており、井伊谷盆地において拠点となり得る集落と評価できる。北神宮寺遺跡は、北岡大塚古墳や馬場平古墳が造営された時期に営まれた集落といえ、古墳と集落の関係性が注目される。また、都田川下流域の川久保船渡遺跡や都田川中上流域の都田町本村遺跡においても古墳時代前期の遺跡が確認されているものの、都田川本流域における集落の様相は不明な点が多い。

つぎに、古墳時代中期から古墳時代後期前半の様相をみていきたい。古墳時代前期において、都田川流域の政治的拠点となった井伊谷盆地では、引き続き、谷津古墳が盆地南東部の丘陵上に築造される。谷津古墳は古墳時代中期前葉に築造されたと想定される円墳で、直径は 36 mである。古墳時代前期に築造された北岡大塚古墳や馬場平古墳に比べると、円墳であることや小規模な古墳であることから、井伊谷盆地において、政治的拠点を維持してきた勢力の衰退が想定される。このころ、井伊谷盆地の北西丘陵部では、露頭した巨石を依り代として、手捏ね土器や滑石製の玉類、鉄製の農具・武器を用いた大規模な祭祀が執り行われた天白磐座遺跡がある。天白磐座遺跡の近傍には古墳時代前期に盛行した北神宮寺遺跡が所在するが、天白磐座遺跡において祭祀が執り行われた古墳時代中期には衰退している。祭祀の時期や規模を鑑みると、谷津古墳の被葬者が祭祀の執行者と捉えられるが、井伊谷盆地において古墳時代中期に地域の拠点となり得る集落は確認できておらず、不明な点が多い。なお、井伊谷盆地では、谷津古墳を最後に首長墓となりうる大型の古墳は築造されていない。

いっぽう、中川平野では都田川を臨む三方原台地の北縁部に陣座ヶ谷古墳が築造される。陣座ヶ谷古墳は、古墳時代中期後葉に築造された全長 55 mの前方後円墳であり、都田川流域の首長墓として埴輪を初めて採用している点や中川平野を臨む立地に築造されたことが注目される。しかし、陣

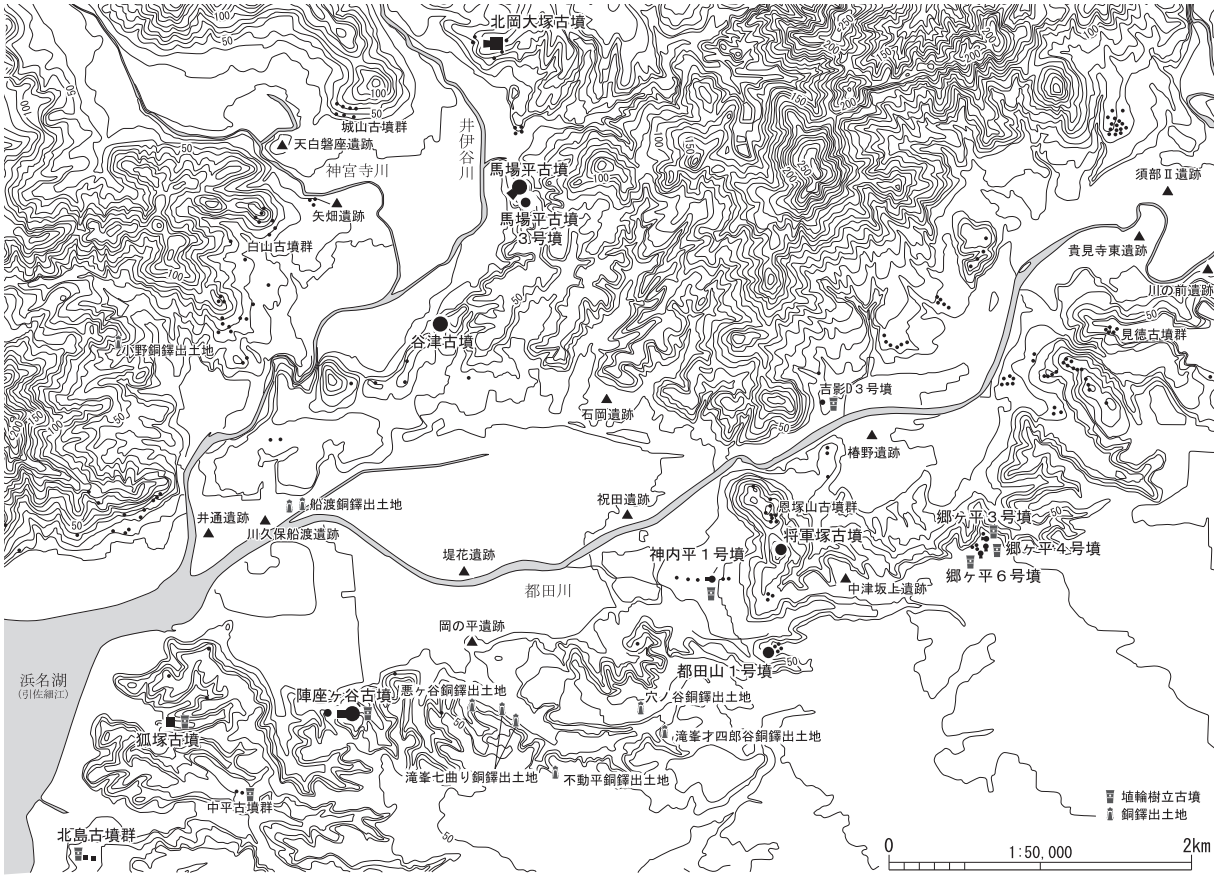


Fig.4　都田川流域の遺跡分布

座ヶ谷古墳の築造以降、都田川流域を治めたと捉えられる 50 m級の首長墓は築かれていない。かわりに、古墳時代中期後葉から後期前半にかけて小地域ごとに有力者によるとみられる造墓活動が活性化する。20 m級の前方後円墳と埴輪の組み合わせが都田川流域の小地域を治めた首長墓の形態として一般化する。中川平野を臨む丘陵上には神内平１号墳が築造され、豊富な円筒埴輪や形象埴輪が出土している。

中川平野における古墳時代中期の遺跡として岡の平遺跡、川久保船渡遺跡、祝田遺跡、石岡遺跡が挙げられる。岡の平遺跡では、縄文時代後期の石棒祭祀遺構を再利用して、その周辺で手捏ね土器を用いた祭祀が執り行われた点が注目される。都田川北岸の河岸段丘上には石岡遺跡が営まれた。石岡遺跡では古墳時代中期の集落が検出され、土師器坩とガラス玉を用いた祭祀が執り行われている。また、中川平野と都田盆地の境界部分にあたる台地上には、土製模造品を用いた祭祀が行われた坂上遺跡がある。人形のほか機織具の模造品がみられ、渡来系文物である機織りに関するものが祭祀に用いられている点が注目できる。

都田盆地では、中期後葉に郷ヶ平３号墳が築造される。郷ヶ平３号墳には淡輪系埴輪が採用され、県内で唯一全形をうかがい知ることができる馬形埴輪をはじめ、弾琴人物埴輪など豊富な形象埴輪が出土し、注目される。つづいて、近接した地点に郷ヶ平６号墳が築造される。瑟を捧げ持つ女子埴輪の出土で知られた古墳である。2013 年の発掘調査により、全長 20 m程度の前方後円墳であることが明らかになった。豊富な形象埴輪が出土し、なかでも雄雌の鹿形埴輪が出土した点が特筆される。郷ヶ平古墳群では３号墳の築造以降、６号墳、４号墳と古墳時代後期前半にかけて埴輪を有する 20 m級の前方後円墳が継続的に築かれたことが明らかになった。墳丘規模や埴輪の樹立など類似性が認められ、３世代にわたる古墳の造営がうかがえる。都田川の対岸の段丘上には古墳時代後

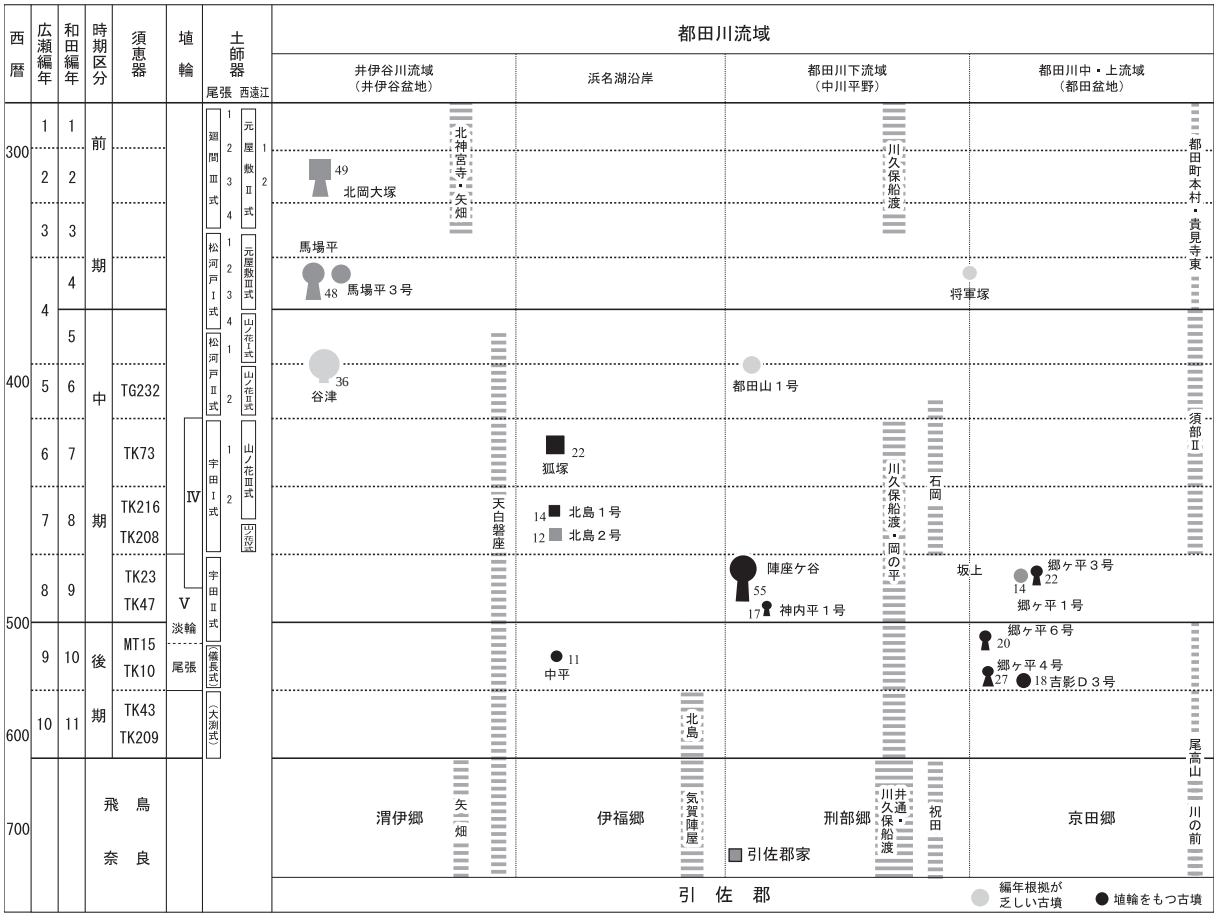


Fig.5　都田川流域における首長墓の推移と遺跡の動向

期前半に、都田川水系最古と捉えられる両袖式横穴式石室を内蔵し、尾張系埴輪や渡来系の馬具がみられる吉影Ｄ３号墳が築造されている。また、都田盆地における古墳時代中期の集落として須部Ⅱ遺跡が挙げられる。須部Ⅱ遺跡では、古墳時代中期に位置づけられる豊富な土師器とともに渡来系遺物である鋳造鉄斧や曲刃鎌が出土している。

都田盆地では、古墳時代中期に渡来系文物をはじめとした新来の文物が、他の都田川流域の小地域に比べて豊富に出土しており、都田盆地を治めた首長の先進的な性格がうかがえる。

浜名湖沿岸部では、古墳時代中期に狐塚古墳の築造を皮切りに方墳が立て続けに築造される。最初に築かれた狐塚古墳は一辺22ｍを測る方墳である。天竜川以西の遠江において初めて埴輪が採用された点や長方板革綴短甲が副葬されていた点が特筆される。その後、狐塚古墳の南にある浜名湖を臨む丘陵上に、２基の方墳が築造される。北島１号墳は一辺約14ｍの方墳で葺石が施され、埴輪が樹立される。北島２号墳は一辺約12ｍの方墳で葺石がみられるが、埴輪は出土していない。墳形や埴輪・立地条件の特徴から、狐塚古墳と北島１・２号墳の類似性がうかがえ、北島１・２号墳の造営者は狐塚古墳の後継者と捉えてもよいだろう。これらの方墳は、時代の経過とともに墳丘規模の小型化や樹立される埴輪の種類の減少など、衰退していく傾向が読み取れる。古墳時代中期のうちに浜名湖沿岸部における方墳の造営が停止したと捉えられる。なお、都田川流域において方墳が築造された地域は、浜名湖沿岸部のみであり、他地域とは性格の異なった被葬者集団の存在が想定される。狐塚古墳に始まる方墳の築造終焉以降、浜名湖沿岸地域では古墳時代後期前半に尾張系埴輪を有する中平古墳が築造される。

古墳時代後期後半になると、都田川と井伊谷川の合流点付近に位置する井通遺跡において集落の形成がみられる。飛鳥時代に位置づけられる把手付の中空円面硯が出土し、奈良時代に向けて郡家関連遺跡への芽生えがうかがえる。また、都田盆地に所在する川の前遺跡では、７世紀後葉に整備

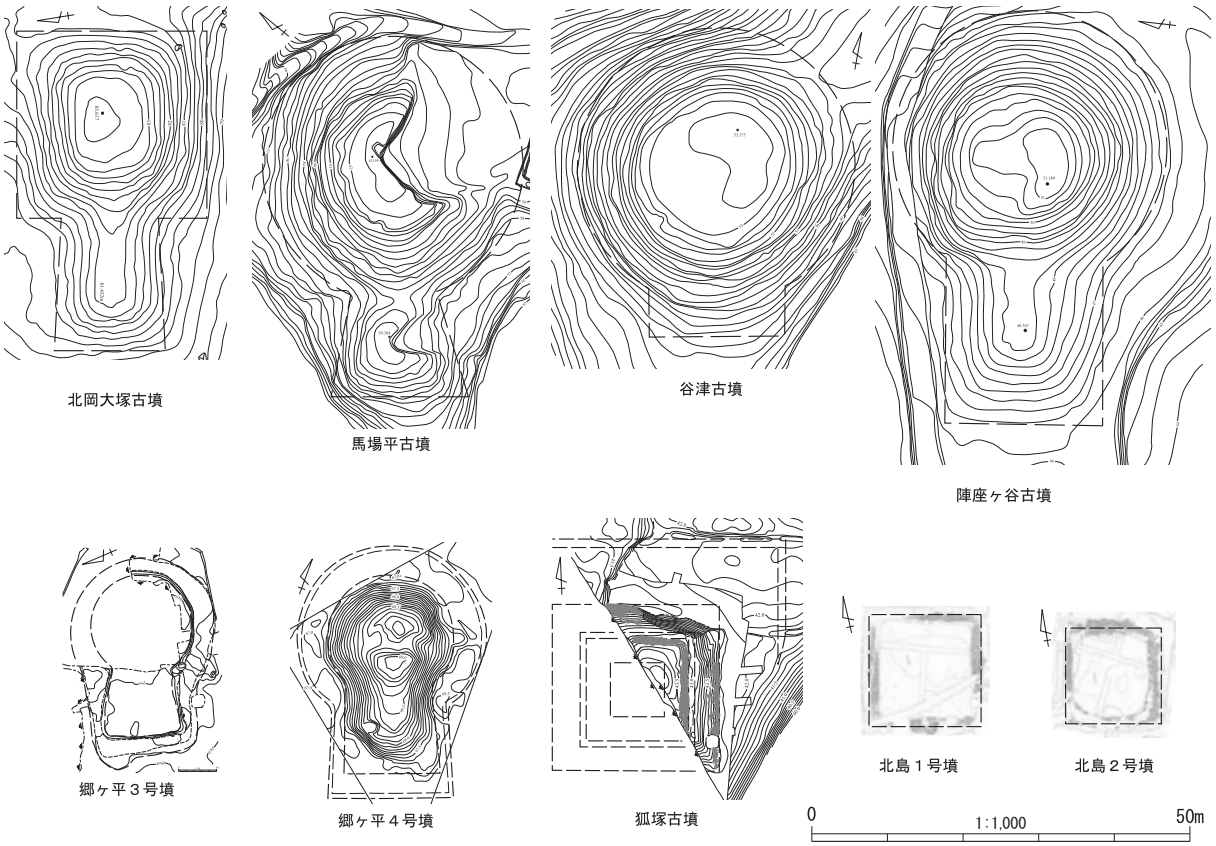


Fig.6　都田川流域の首長墓

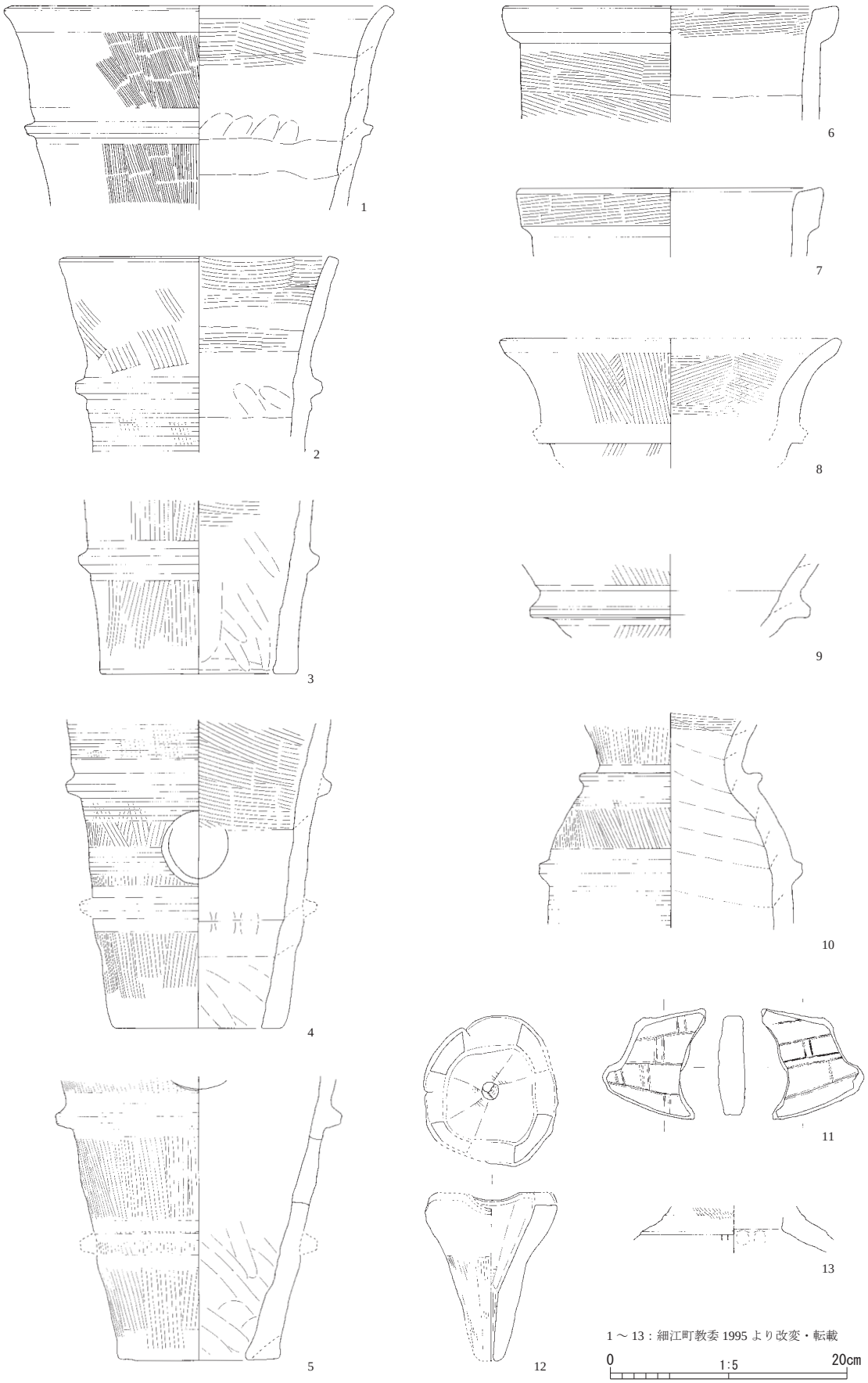


Fig.7　北島１号墳の概要

Fig.8　狐塚古墳の位置

されたと捉えられる、東西方向に直線的に伸びる石敷きの道路遺構が検出されている。古墳時代後期前半で埴輪を用いた古墳の造営はが終焉を迎え、各小地域において横穴式石室を内蔵した円墳が群集して築かれるようになる。

奈良時代　都田川流域は律令体制下、遠江国引佐郡に含まれていた。引佐郡には「京田」、「刑部」、「渭伊」、「伊福」の４つの「郷」に分けられていたことが『和名類聚抄』から知られる。律令期における引佐郡の中心は、「刑部郷（中川平野）」に求められる。都田川と井伊谷川の合流点付近に位置する井通遺跡が郡津と捉えられ、その周辺に郡家が展開していたとみられる。また、「京田郷（都田盆地）」では墨書土器が出土している川の前遺跡が律令期における京田郷の中心地域のひとつであったとみられる。「渭伊郷（井伊谷盆地）」では、矢畑遺跡において少量の墨書土器が出土しており、渭伊郷の中心地域のひとつであったとみられる。狐塚古墳が所在する「伊福郷（引佐郡の浜名湖沿岸部）」の様相は不明な点が多いが、気賀陣屋遺跡や北島遺跡などに集落の展開が認められる。

都田川流域における律令期の遺跡では、墨書土器の出土が数多く認められる。また、陶馬を用いた祭祀・儀礼も墨書土器と同じように広範囲にみられる。文字の普及を物語る墨書土器や陶馬を用いた祭祀を行った遺跡を各小地域において中心となる遺跡とみることが可能である。いっぽうで、墨書土器や陶馬の出土が確認された遺跡は、傑出した遺構・遺物を有する遺跡に限られないことから、都田川流域には８世紀代に広く律令制に準じた文化が定着していたと捉えられよう。

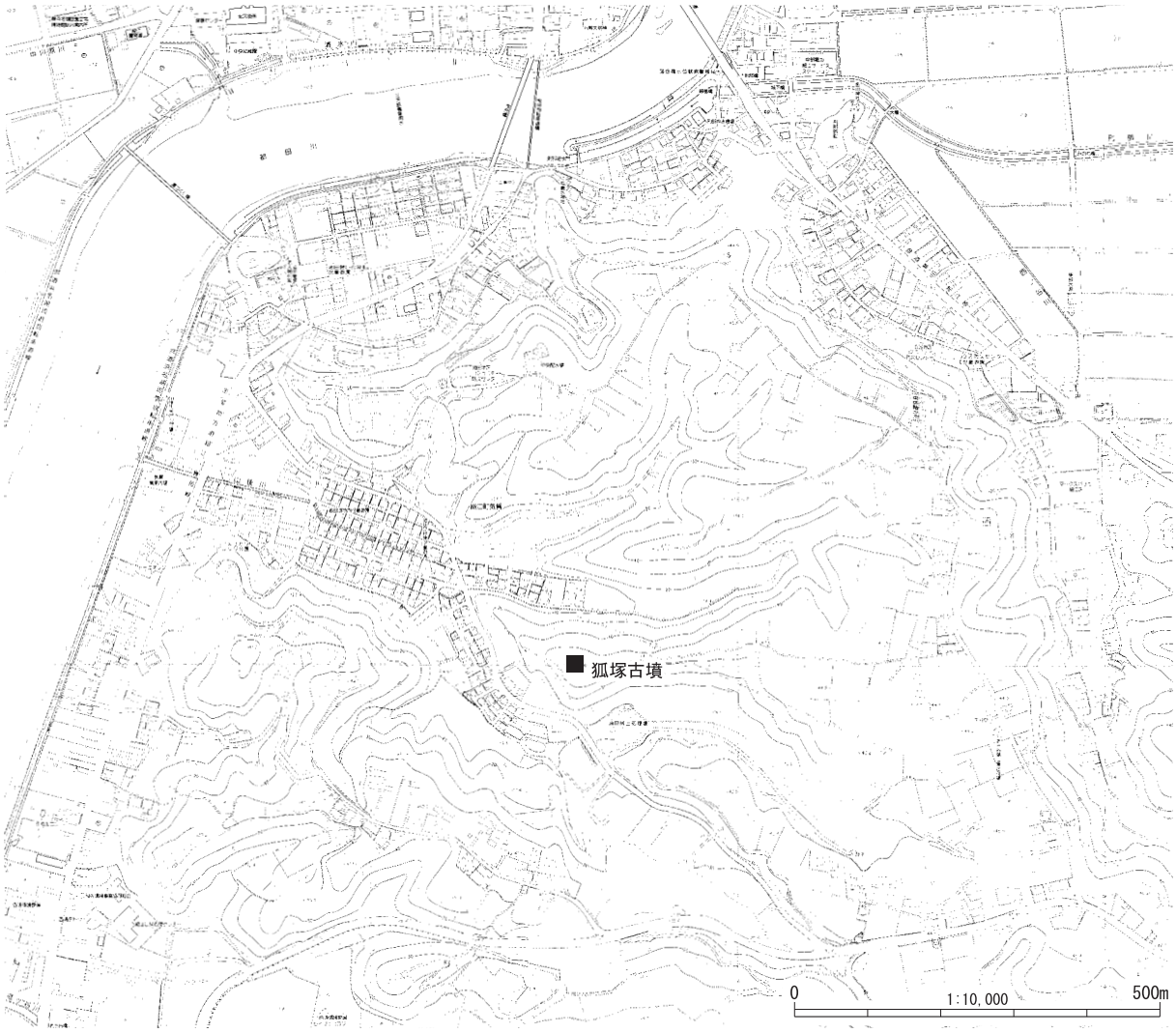


Fig.9　狐塚古墳の周辺地形図

（3）狐塚古墳をめぐる調査履歴

狐塚古墳では、月岡氏による遺物の採集が行われ、1975 年には採土工事に伴い測量調査と遺物の採集が細江町教育委員会により行われている。1975 年の調査終了後にまとめられた「引佐郡細江町狐塚古墳測量調査概報」を再編集し、1975 年調査時における狐塚古墳の評価を示しておく。

墳　丘　採土によって墳丘の東側約４分の１程度が残存するのみである。墳丘残存部の西側は墳頂より垂直に 6 m、地山の礫層深く掘り込まれている。そのため、破壊前の古墳の規模や形状を明確にすることは不可能である。しかし、破壊以前を知っている人達は、「前方後円墳」･「造りだしのある円墳」等と語り、「円墳」であったとも言われている。

下刈りした墳丘上には、地山の礫層中に含まれていると同質の礫（長径 20㎝ 程度）によって、部分的に葺石が見られた。中央部（残部墳丘西端）に近い部分では過去に盗掘を受けたのか、墳丘に若干の起伏がみられた。残存部の最大巾は南北方向で約 27 m、高さが約 2 mある。重機で切断された西側の断面では赤褐色の地山の上に、礫をほとんど含まない黄褐色土が被覆していた。しかし、築造当時の地表面と考えられる面は断面上では観察することができなかった。

古墳の中心部がすでに消滅しており、埋葬施設と想定できる遺構も断面では全く見ることができない。付近に石室として使用するような石材も散乱していないので、木棺直葬の可能性が高く、あっても若干の粘土等を使用した埋葬施設であったと想定される。

墳丘の北から東にかけては、かなりの急な傾斜をなし、その斜面に沿って円礫による葺石が施されている個所がみられた。場所によっては石垣のように積まれているが、表土を全面的に排除していないため、葺き方を把握するには至っていない。また、墳丘北側では古墳の裾をめぐるように周溝状の凹地が西から東に向かって延びていた。その性格を確認する調査をしたところ、溝のほうが新しく、北側で墳丘端を削っていると思われた。さらに、東側では墳丘を離れ、古墳とは反対方向へ曲がっているようにみうけられた。かつて、北側は畑として利用され、その境界がこの溝付近であったという地主の説明を考慮に入れると、周溝と考えるより、畑の排水溝と見る方がよいのではないだろうか。しかし、今回は発掘調査をして確認したわけではないので、今後、本格的な調査による精査が期待されるところである。

採集遺物　出土品は墳丘破壊の際に重機によって南側崖下へ落とされた土中と、北西部の採土地へ押し出された土の２地点を中心に採集された。すべて赤褐色の土師質埴輪の破片で、円筒埴輪が主体である。形象埴輪も若干含まれており、人物の腕かと思われる破片も混ざっていた。また、墳丘の断面にも埴輪片が１片観察できる。しかし、円筒埴輪列の位置と断定することはできない。その他過去には鉄製品（刀・剣・短甲）も出土していると言われる。

小　結　都田川の南岸に沿った三方原台地に続く台地・丘陵には郷ヶ平古墳群（都田町）・神内平１号墳（細江町）・陣座ヶ谷古墳（県指定史跡）・現在は畑地となっている中平古墳などが東西に並んでいるのが目立つ。これらの古墳は前方後円墳または造り出しをもつ円墳（神内平）である。さらに埴輪が出土しており、狐塚古墳との共通性もかなり濃いと思われる。狐塚古墳では硬質埴輪を伴っていない点が異質であるが、これらの点を考えても、狐塚古墳が前記の３古墳と類似する形態であった可能性は強い。出土遺物・葺石施設・埴輪の存在・古墳の立地等、総合的に考えて、築造年代を５世紀末と推定できないだろうか。

狐塚古墳は、おそらく全長 30 mを超える規模を有し、都田川流域では有数の古墳といえる。これら、都田川流域に展開した弥生時代の銅鐸文化から古墳時代の農村落を背景とする原始・古代の地方文化を復元していく上で、かなり重要な意味を持っていると思われる。

第２章　検出遺構

１　調査前の状況と検出遺構の概要

（１）調査前の地形

発掘調査前における狐塚古墳は、深い森に覆われていて詳細をうかがうことが難しい状態であった。樹木の伐採によって視界が開け、現況地形を測量したところ、東側側辺が直線を描くことが判明し、方墳であると捉えられるようになった。発掘調査前における高まりの規模は、南北 19 m、高さ 1.7 mほどである。北側斜面については地形の改変が顕著で、本来の墳裾を明確にすることが難しい。大きく墳丘が抉り取られた北側斜面には長軸 10cm から 20cm ほどの円礫が部分的に集中している箇所があり、葺石が転落し集積したものと捉えられた。墳丘の外側も開墾などによる地形の改変があり、古墳に伴う遺構は観察できていない。

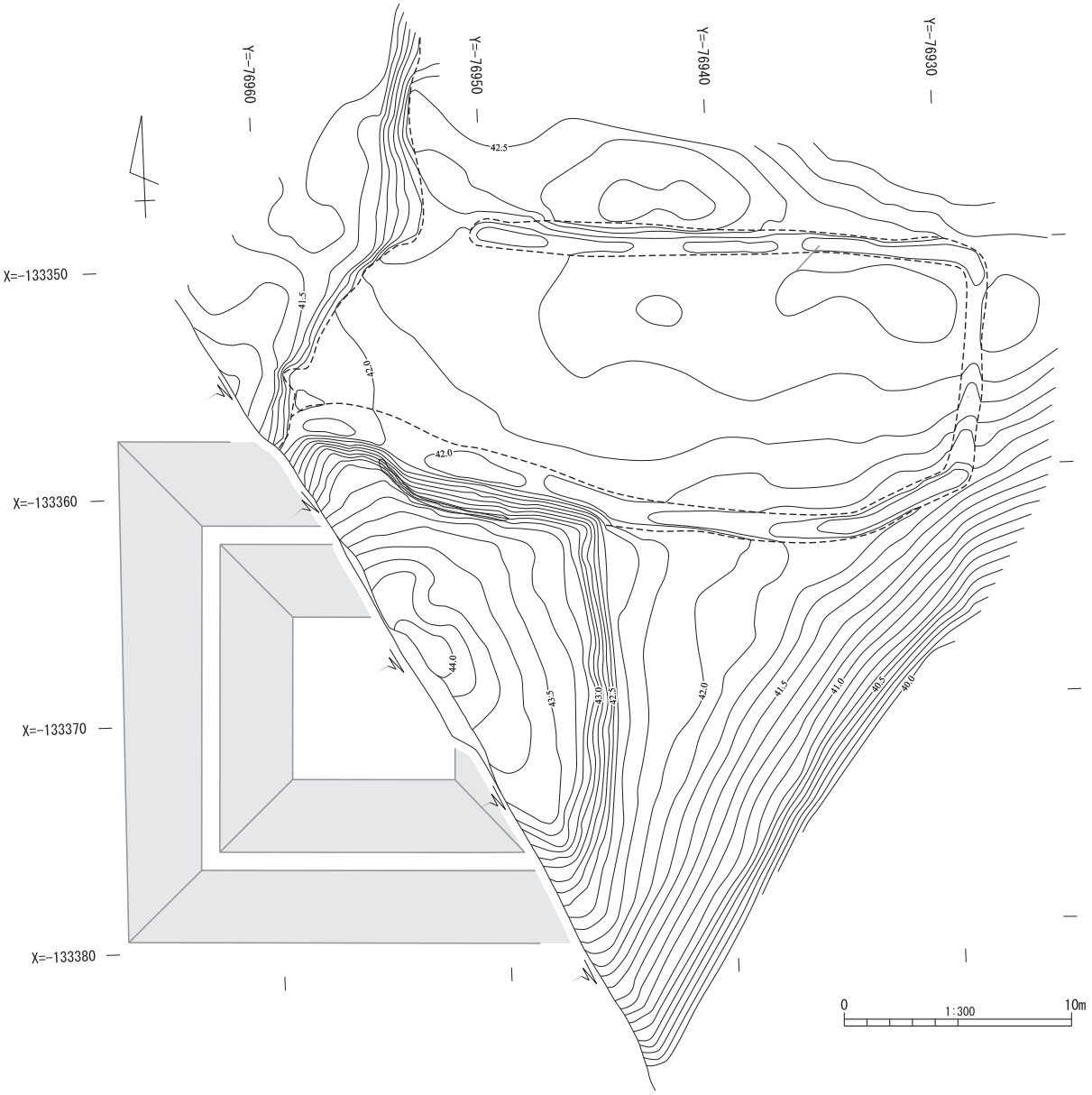


Fig.10　調査前の狐塚古墳

（2）検出遺構の概要

古墳の概要　発掘調査の結果、狐塚古墳は5世紀前葉に築かれた一辺22ｍの二段築成の方墳で、葺石と埴輪をそなえることが判明した。墳丘の3分の1ほどが遺存しているとみられるが、埋葬施設は既に失われていた。

古墳の表面には拳大から人頭大の石を敷き並べた葺石が、上段、下段ともに認められた。とくに上段の葺石は残存状態が良好で、調査したほぼ全面において確認できている。下段の葺石についても、墳丘北東隅が後世の撹乱によって失われているものの、北西部、東南部においては基底部分を中心に確認することができた。葺石は川原石（円礫）を使用し、やや大振りの石を基底石もしくは区画帯として並べた後、その間を小振りの石で充填している工法が観察できる。

上段と下段の斜面の間には幅0.8ｍほどの平坦面が巡っており、ここに立ち並べていた円筒埴輪列を検出した。円筒埴輪は築造当初の位置をとどめるものが14点分認められ、埴輪を樹立した状況が確認できた。

さらに、墳丘断面の観察を行い、下段墳丘は地山を削り出して成形し、上段墳丘は盛土によって形づくられていることも判明した（Fig.17）。周溝は北側に巡っていたことが確実であるが、後世の破壊が顕著で、その詳細は明確でない。現況の地形が古墳築造当初の形態を反映しているとみてよければ、周溝の幅は9ｍほどである可能性がある。

トレンチ調査　墳丘の平面的な調査を始める前に4本のトレンチを設定し、墳丘の残存状況を確認した（Fig.11）。トレンチ調査における掘削は墳丘表面までとしたが、すべてのトレンチにおいて比較的良好に葺石を確認した。トレンチ調査は当初、墳裾の確定に主眼を置いたが、順次墳丘上半部に調査区を拡張し、平坦面および墳丘上段の葺石を検出した。このトレンチ調査の結果を受け、発掘調査を、古墳の平面すべてを明らかにする方針に転換した。

比較的遺存状態が良好とみられた墳丘東側斜面も、流入土とみられる土層が厚く堆積していた。墳丘上半部から流出し下半部に堆積した土砂は、中段平坦面において50～80㎝におよぶ。上段墳丘の崩落土量は、比較的多いものと捉えられる。

墳丘流土からは埴輪が出土したが、その多くは葺石直上に堆積した初期崩落土層中に含まれていた。墳丘北側斜面において露出していた円礫についても、墳丘上段におかれていた葺石が崩落、再堆積したものであることが3トレンチの調査によって確認できた。

古墳南東隅の解釈　トレンチ調査の後に行った平面調査によって、狐塚古墳の北辺と東辺の詳細が明らかになった。とくに東辺はほぼ全体が確認でき、古墳の規模をうかがう上で重要な情報が得られた。古墳の規模にかかわる基本的な情報であるので、以下に解釈の根拠を示しておく。

古墳の北東隅については、撹乱によって失われているものの、下段裾の北辺と東辺の延長線上の交点に求めることができる。一方、古墳の南東隅については、明確な痕跡を見出していない。東辺の下段にしかれた葺石はやや粗雑で遺存状態も良好とはいえないが、残存している地形の境界付近まで確認できた。周辺の地形をみると、遺存している現況地形の範囲内に南東隅を想定しなければ、下段の基底部は設定不可能である。このことから、発掘調査で確認できた東辺下段葺石の最南端付近が古墳の南東隅にあたることが判明する。さらに、中段平坦面に並べられた円筒埴輪列は後述するように、1.2ｍほどの間隔をもって樹立されている。原位置が確認できたH1の南側にもう一本分の円筒埴輪が立てられたと想定できるが、この埴輪が中段平坦面の南東隅に置かれた基点にあたると考えられる。想定できる中段平坦面の南東隅から稜線を下段墳丘に延長すると、下段墳丘の南東隅の位置がほぼ特定できる。これらの情報を総合的に捉えると、狐塚古墳の東辺下段の長さは22.0ｍであるといえるだろう（Fig.18）。

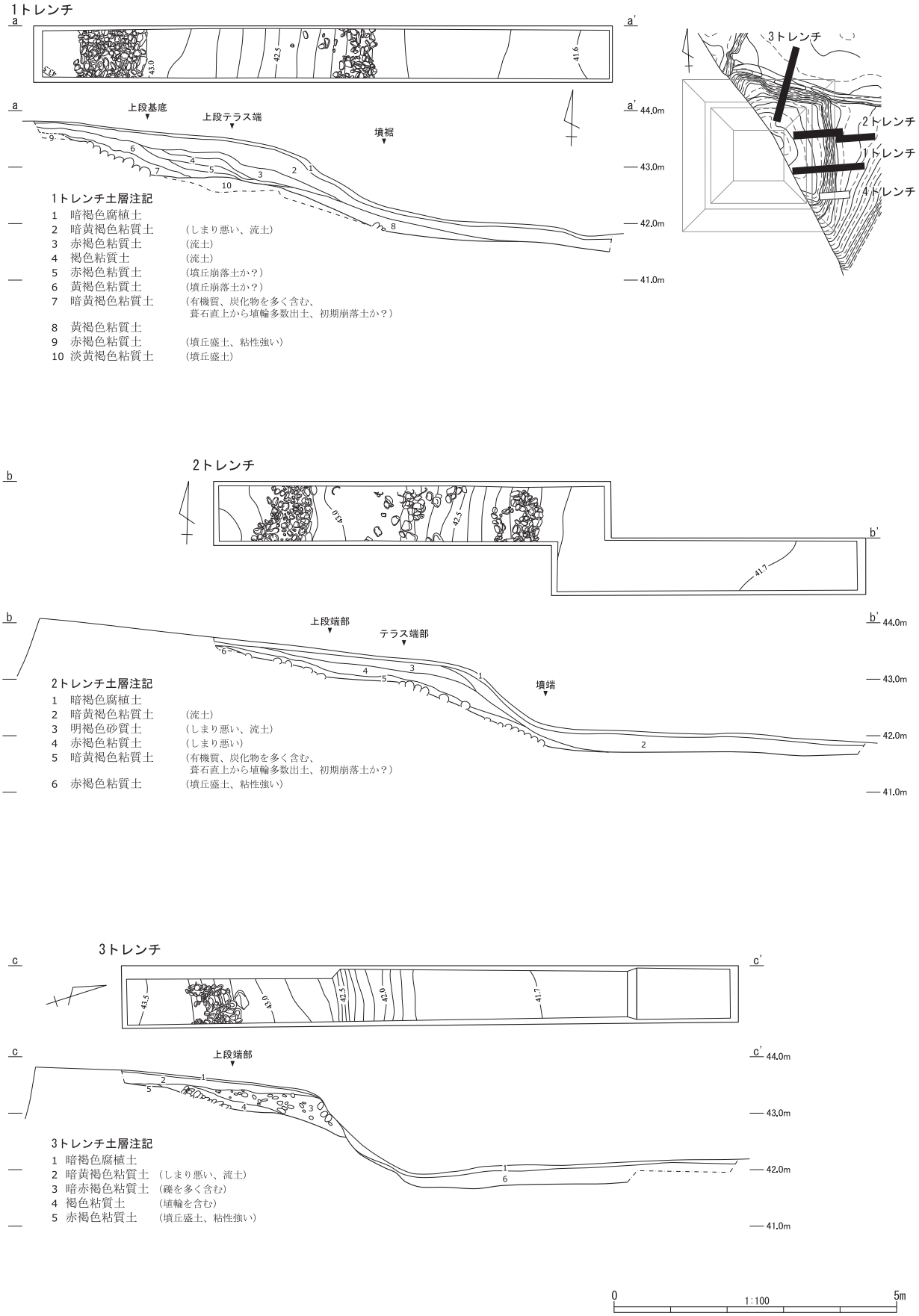


Fig.11　トレンチ詳細図

２　墳丘と葺石

（１）墳丘の状況

墳　丘　狐塚古墳は上下二段に築成された方墳で、2011 年の発掘調査では、全体の３の１ほどの詳細が明らかになった。墳丘はほぼ東西南北の方位に合わせて築造されている。北東側には撹乱が及んでいるが、規模はほぼ確定できる。南東隅がかろうじて調査区内におさまるとみられことから、狐塚古墳は南北一辺 22.0 ｍの規模であることが判明した。東西の規模は必ずしも明確でないが、正方形を呈すると捉えても矛盾はない。墳裾の標高は東側 41.9 ｍ、北側で 41.7 ｍ、残存している墳頂部の標高は 43.8 ｍである。北側墳裾の標高 41.7 ｍを基準にすると、残存している墳丘の高さは 2.1 ｍである。墳丘下段と上段の間をめぐる中段平坦面の標高は 42.9 ｍ～ 43.0 ｍであるので、下段の高さは 1.3 ｍ、上段の残存している墳丘の高さは 0.8 ｍほどである。上段の墳頂部は崩落していると捉えられ、本来は下段と同様に 1.3 ｍほどの高さがあったとみられる。後述するように下段は地山の削り出し、上段は盛り土によって形成されている。

中段平坦面　下段と上段の間には中段平坦面がめぐっている状況が確認できた。平坦面の幅は 0.8 ｍ前後とみられる。平坦面のほぼ中央には円筒埴輪列が認められる。円筒埴輪は、後述するように、中心間で 1.1 ｍ～ 1.2 ｍ間隔で並べられている。

周　溝　墳丘の外側には地山を掘り込んだ平坦面が認められた。周溝の外縁の立ち上がりは充分な調査ができなかったが、地形から判断すると、北側で幅 9 ｍほどの広さがあったとみられる。周溝は自然地形に制約されて墳丘周囲を全周しないとみられる。調査で明確になった東側では、周溝が途切れ、自然地形の斜面に移行すると捉えられる。

（２）葺石の特徴

概　要　古墳の表面には拳大から人頭大の石を敷き並べた葺石が、上段、下段ともに認められた。とくに上段の葺石は残存状態が良好で、調査したほぼ全面において確認できている。下段の葺石についても、墳丘北東隅が後世の開発によって失われているものの、北西部、南東部においては基底部分を中心に確認することができた。葺石は川原石（円礫）を使用し、やや大振りの石を基底石もしくは区画石列として並べた後、その間を小振りの石で充填している工法が観察できる。葺石は下段、上段ともにその下部と基底部を中心に遺存していた。上部斜面の葺石は墳丘の崩落と共に失われ、石材の多くは転落したものと捉えられる。

使用石材　葺石に使用されている石材は、長軸 20㎝ 前後の円礫である。同形の円礫は地山の中の礫層に含まれており、近隣地からの調達も容易であったと捉えられる。葺石石材は内面に長軸を合わせて配列されている（PL.12）。葺石斜面には、縦方向に大き目の石材をもちいた区画石列が認められる。区画石列に用いられた石材の大きさは、表面で長軸 20㎝ ～ 30㎝ 程度である。基底石は区画石列と同様か、さらに大きめの石材が選択されている。

区画石列　墳丘斜面の葺石には区画石列が確認できた。区画石列はとくに上段斜面において明瞭であったが、下段斜面でも北側において確認できる。東側下段斜面の葺石は遺存状態が良くないことから判断すると、本来はすべての斜面に区画石列が用いられていたと想定できる。区画石列の間隔は 1.2 ｍ程度を標準にするが、埴輪の間隔ほどには統一されていない。

基底石　葺石の基底石は、長軸 30㎝ ～ 40㎝ ほどの大型の石材が用いられている。北側下段では、基底石の長軸が古墳の基底線と直交するように配置されているが、墳丘上段については、基底線と長軸が並行するように置かれている。

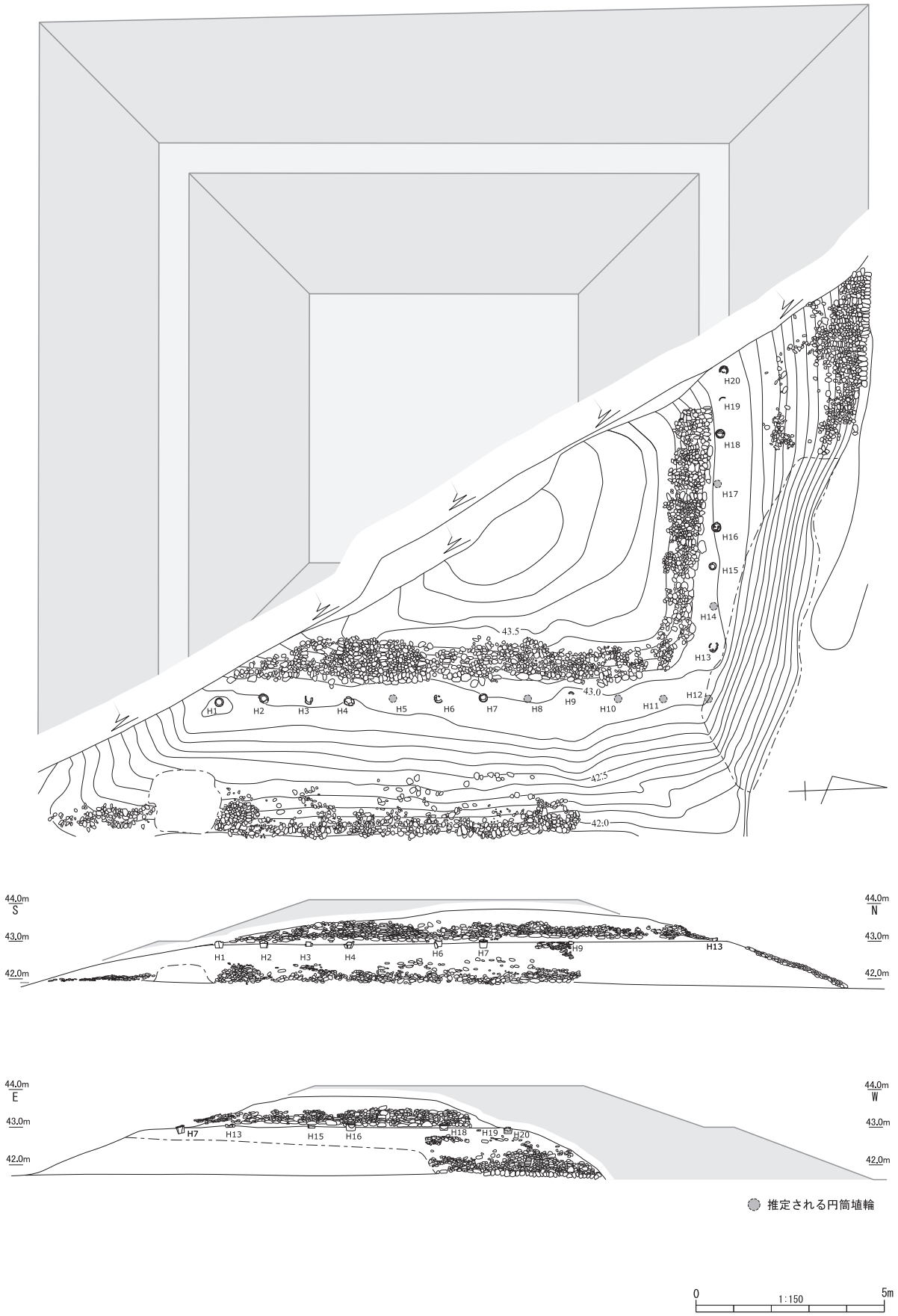


Fig.12　墳丘検出状況

３　埴輪の検出状況

（１）墳丘上面における埴輪の出土状況

埴輪片の出土傾向　2011 年の発掘調査では、葺石検出面より上層の流土中において埴輪片が出土した。出土した埴輪片の総量は、収蔵用コンテナに換算して 10 箱分に相当する。墳丘下段では、裾部を中心に円筒埴輪の小破片が出土した。一方、中段平坦面から上段斜面にかけては、円筒埴輪とともに形象埴輪もみられる。とくに北側斜面の H17 ～ H20 付近においては、蓋形埴輪片をはじめとした形象埴輪片が比較的まとまって出土している。形象埴輪は墳頂部に樹立されていたものが崩落して、墳丘上半部の流土中に埋没したと捉えられよう。

1975 年出土資料の特徴　なお、1975 年出土資料に形象埴輪が比較的多く含まれることは注目できる。1975 年に採集された埴輪は遺物収蔵コンテナ２箱分ほどの量であるが、形象埴輪については、今回の発掘調査で出土した破片数にほぼ匹敵する数の個体が抽出できた。1975 年の調査時には墳頂平坦面が大きく削平されていることと関連しているとみられよう。とくに家形埴輪や甲冑形埴輪は、1975 年出土資料が占める割合が高い。出土年の差異は出土位置の違いを示しているものと捉えられ、墳頂平坦面における形象埴輪の樹立位置を反映している可能性が考えられるだろう。

（２）円筒埴輪列

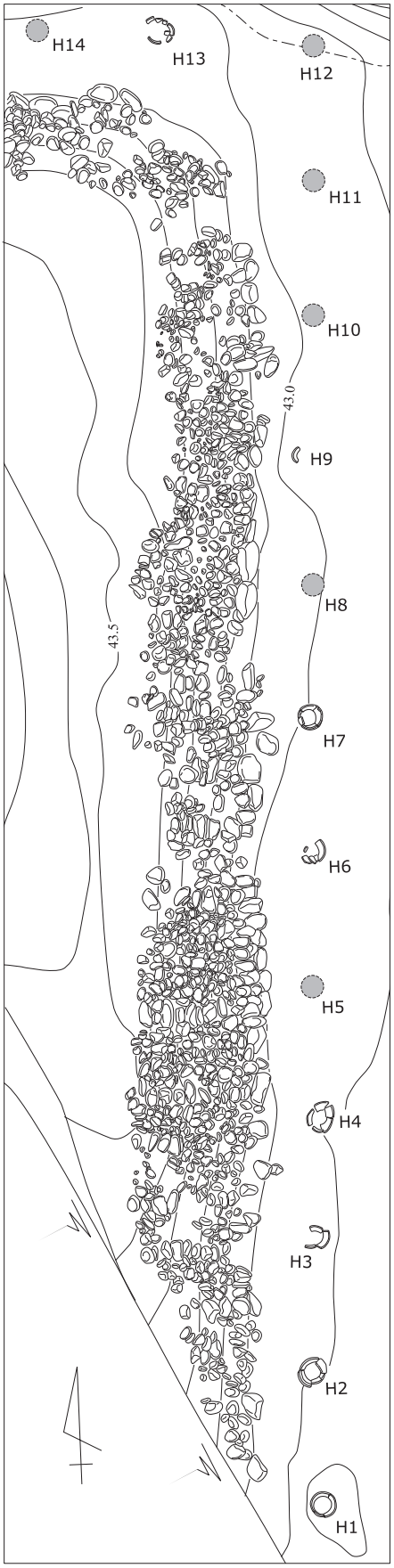
概　要　墳丘東側と北側の平坦面において円筒埴輪列を検出した。樹立位置が明確な円筒埴輪は、最初に確認した南東端部のものから H1 と名づけ、南東の端から北側平坦面西端に向かって連番を付した。また、H1 から H4 の検出作業を通じて、埴輪列は中心間で 1.1 m～ 1.2 mほどの間隔で樹立されていることが判明したため、樹立状態が確認できない位置においても仮の番号を割り当て（Fig.13）、検出作業を進めた。

埴輪の樹立方法　狐塚古墳で検出した円筒埴輪列はそれぞれ隣のものから１m以上離れていることから、布掘りによる設置方法ではなく、独立した据付穴が穿たれ、それぞれ個別に埋められているものと予想された。このため、全ての原位置を保つ埴輪において基底部分の墳丘の断面観察を行ったが、埴輪を据付けるための穴が認識できなかった。後述するように、中段平坦面は旧表土上に盛られた厚さ 10㎝ ～ 15㎝ ほどの整地層によって形成されている。このため、埴輪は整地層の形成と同時に据えられたか、整地層の中で穴を掘り返して据付けられたため、遺構として認識できなかったものと考えられる。中段平坦面の整地は葺石よりも先行して行われているので、埴輪の設置方法としては、後者の可能性が高いものと捉えられよう。

基底部の標高　埴輪列として検出できた円筒埴輪の基底部の標高は H13 と H15 が 43.0 mと、やや高いものの、残りの個体は 42.8 m～ 42.9 mでほぼ一致している。この高さは、ほぼ旧表土上面に相当する。埴輪は旧表土上に盛られた整地層の中で据えられていることが分かる。第１条突帯が遺存している H2 や H7、H16、H18 の状況から、埴輪列は第１段（基底部）の３分の２以上が埋められていたことが判明する。

円筒埴輪の群別　狐塚古墳に用いられた円筒埴輪は、後述するように２次調整にヨコハケが施されるⅠ群とタテハケが施されるⅡ群に大別できる。円筒埴輪列で両者の弁別ができたものを見渡すと、東側埴輪列（H1 ～ H9）にはⅠ群とⅡ群が混在することに対し、北側埴輪列（H13 ～ H20）はⅠ群のみが用いられていることが判明する。流土中から出土した破片についても、Ⅱ群の円筒埴輪は東側斜面のみから出土しており（Tab.2 ～ 4）、埴輪列によって樹立される埴輪の群に違いがあることが判明する。

東側埴輪列詳細図



北側埴輪列詳細図

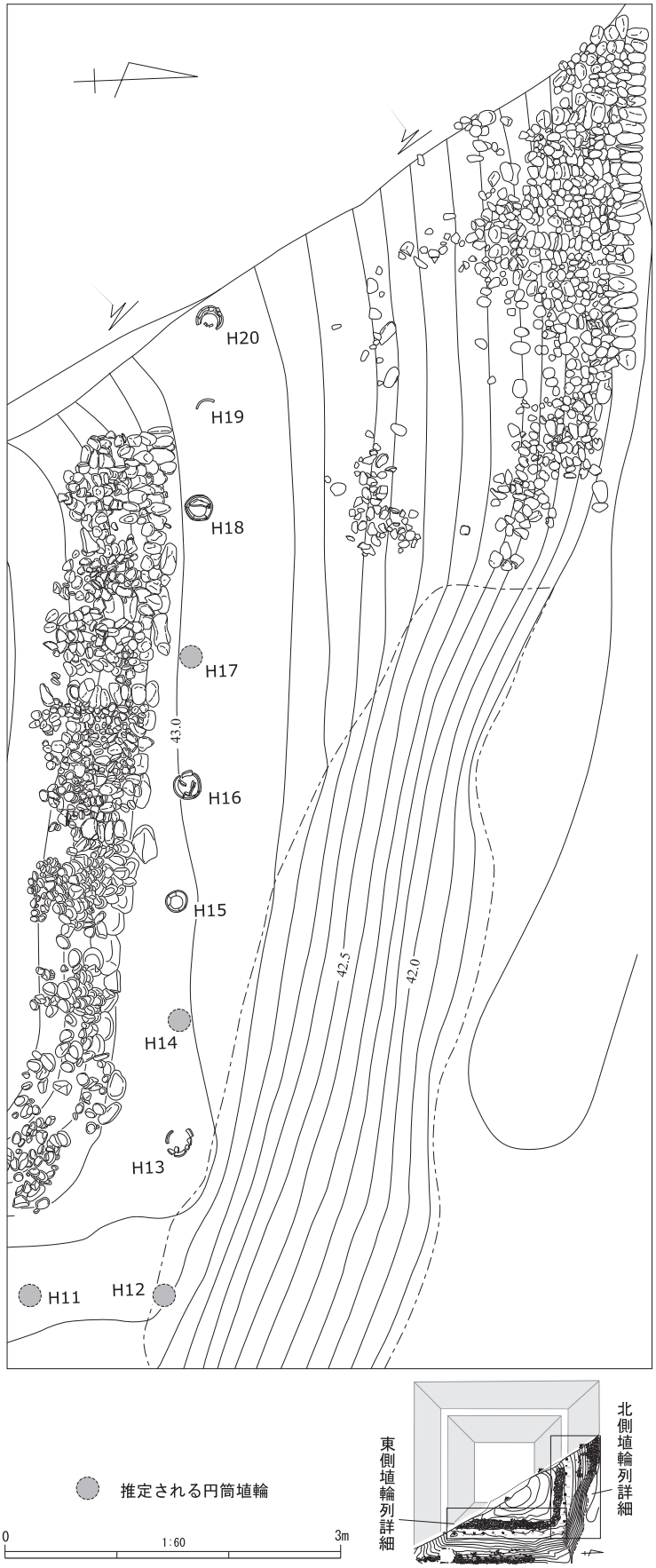


Fig.13　葺石・円筒埴輪列の詳細

3　埴輪の検出状況

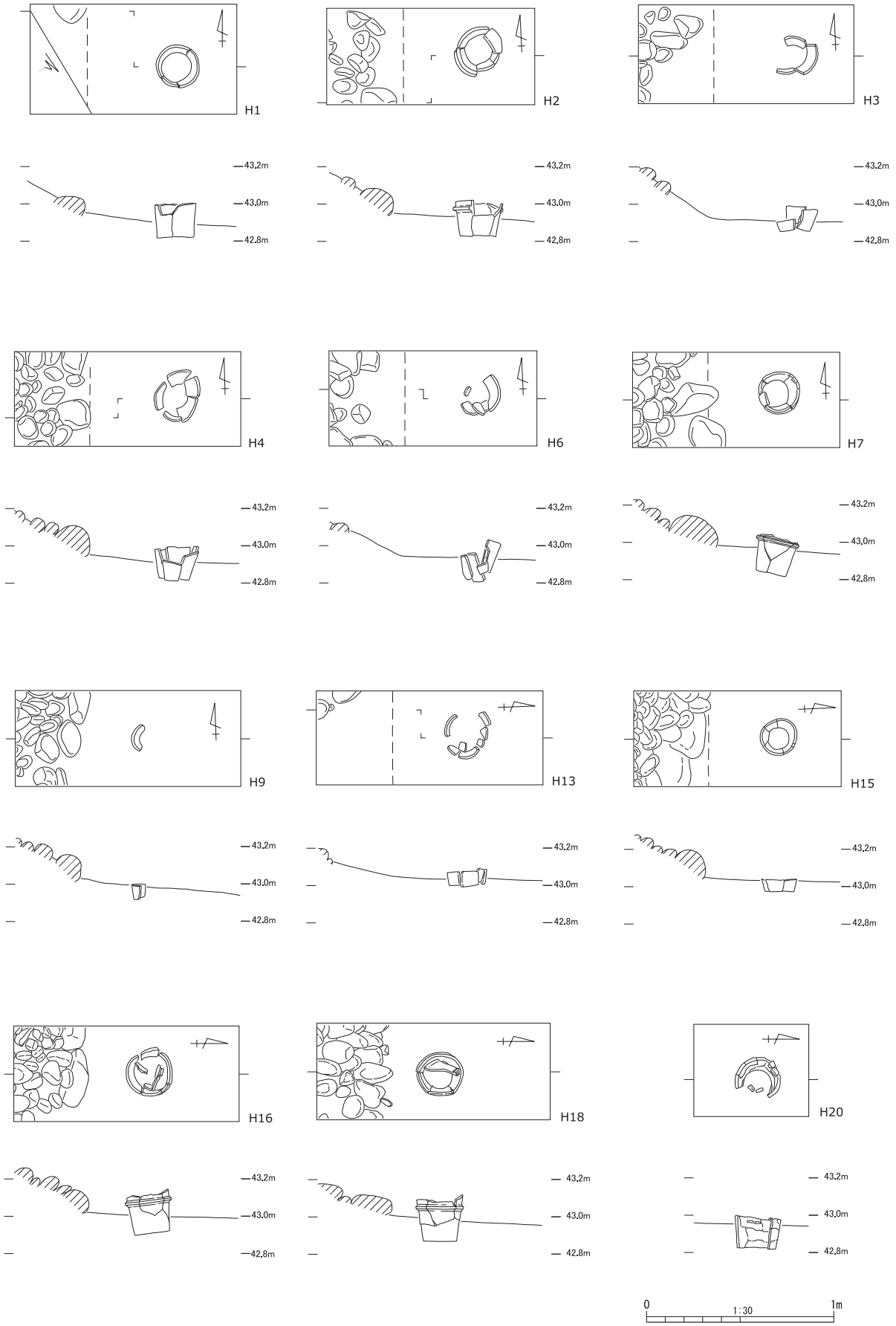


Fig.14　埴輪出土状態

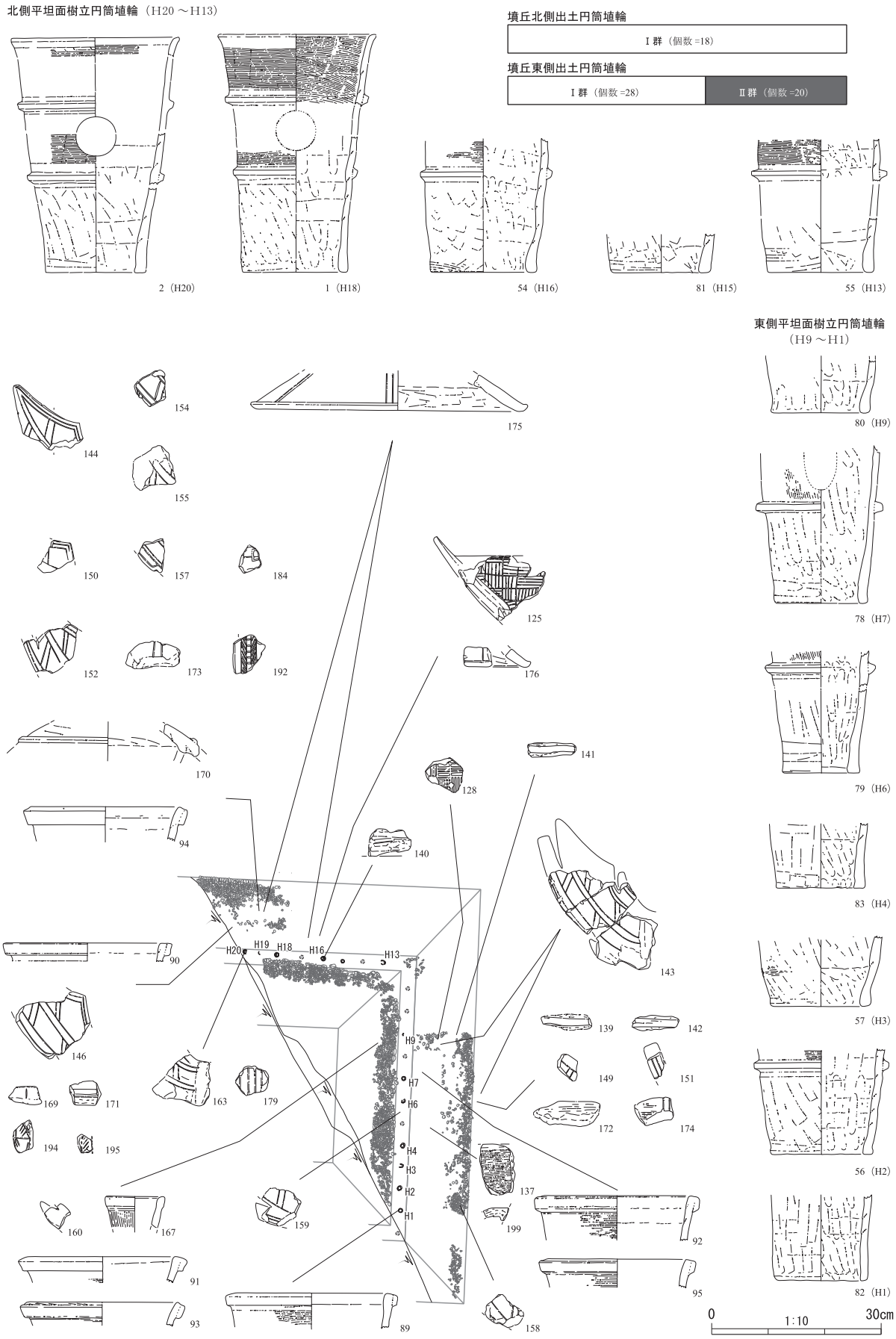


Fig.15　埴輪出土位置図

4　墳丘の構造と復元

（1）墳丘構造調査と構築技法

トレンチの設定位置　葺石と埴輪にかかわる調査を完了した後、墳丘内部にトレンチを入れ、墳丘の内部構造を確認した(Fig.17)。トレンチは東西南北にほぼ並行させた方向に２本､設定した。以下､東側斜面に設定した調査溝を東西トレンチ（ａ断面)、北側斜面に設定した調査溝を南北トレンチ（ｂ断面）とする。東西トレンチは､墳丘上面から断面を記録した１トレンチの位置を踏襲し､図では上面の情報を合成した。

墳丘の構造　東西トレンチ、南北トレンチともに類似した層位が確認できた。下段墳丘は地山削り出しによって形成されており、旧表土の上に墳丘を盛り上げて上段墳丘が構築されている。上段墳丘の裾を描くように、土手状の盛り土が最初に行われ、土手の内部を埋めるように上段墳丘が築かれている。盛り土の単位は比較的粗いが、水平堆積に使い土層が確認できる。中段平坦面には厚さ 20㎝ほどの整地層が土手状盛り土の外側に設けられている。下段墳丘の葺石は､地山を成形した後に裏込め土を盛り付けながら構築されている。上段の葺石についても上段墳丘の核の部分を盛り土によって形成した後、小礫を多く含む裏込め土を盛り付けながら積み上げられている。葺石の石材は長軸を墳丘斜面に直交するように設けられている。

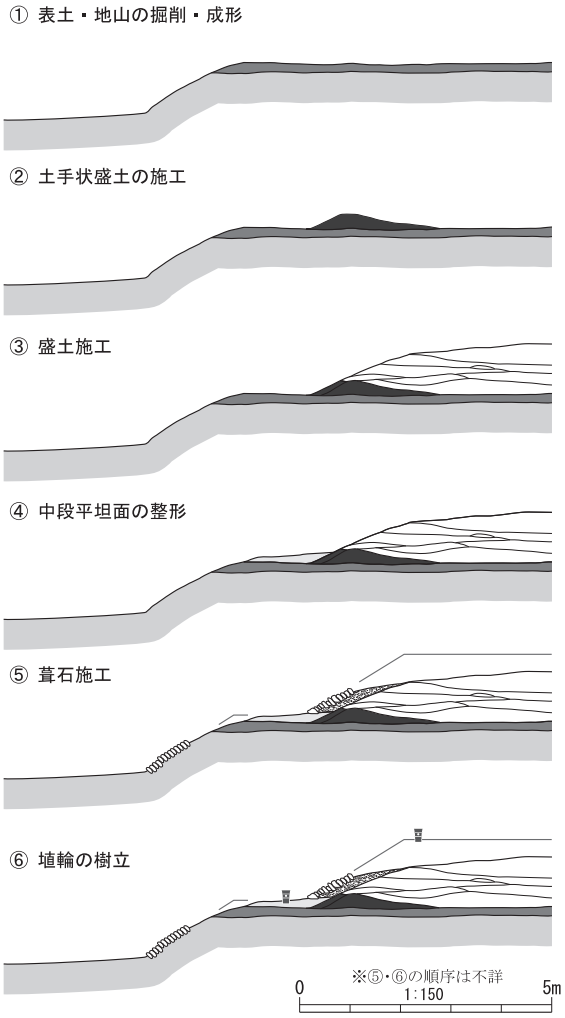
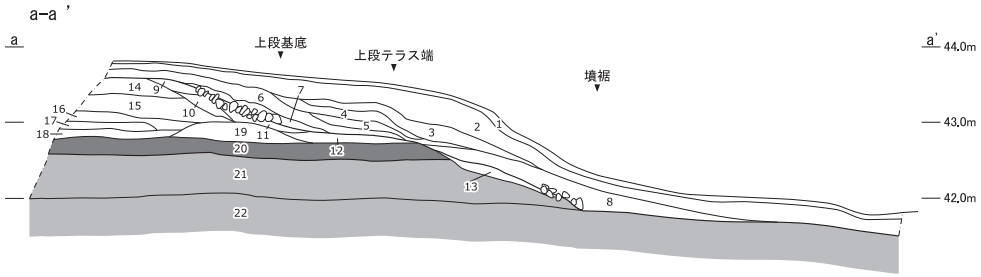


Fig.16　墳丘の構築過程

（2）墳丘の復元

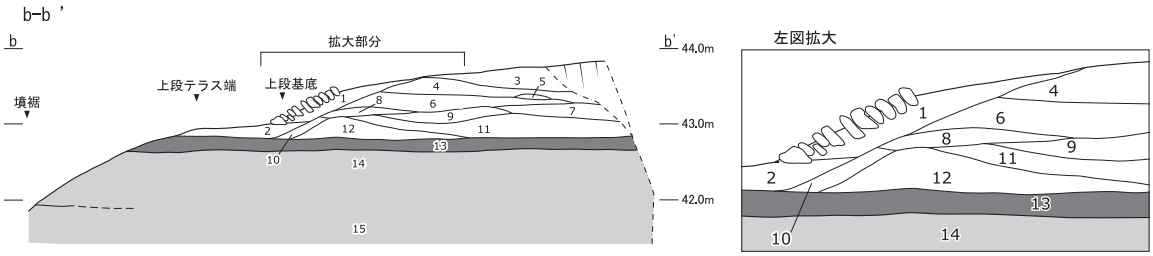
発掘調査の成果をもとに、狐塚古墳の墳丘を復元する（Fig.18)。古墳の規模は、下段墳丘の東辺における検討結果から、一辺 22 ｍであることが判明する。中段平坦面は 0.8 ｍほどで、1.1 ～ 1.2 ｍ間隔で立ち並べられた円筒埴輪列が伴う。上段墳丘の規模は一辺 13.5 ｍ程度である。基底面はほぼ水平であり、下段墳丘の高さは 1.3 ｍ、上段墳丘の残存高は 0.8 ｍ、古墳全体の推定高は 2.6 ｍ程度とみられる。周溝は周辺の地形から全周していないとみられる。周溝の存在が想定できるのは、墳丘の北側と北東側である。推定できる周溝の幅は約 9 ｍである。

墳頂平坦面の状況は全く不明であるが、形象埴輪が樹立されていたことが確実である。埋葬施設の情報は全く無いが、墳丘が東西－南北方向に築かれていることから、南北もしくは東西方向に設定されていたと考えられる。近隣地における甲冑出土の中期古墳の殆んどが東西頭位であることをふまえれば、狐塚古墳の埋葬施設も東西方向であった蓋然性が高い。



a–a’ 土層注記

1　暗褐色腐植土
2　暗黄褐色粘質土　（しまり悪い、流土）
3　赤褐色粘質土　（流土）
4　褐色粘質土　（流土）
5　赤褐色粘質土　（墳丘崩落土か？）
6　黄褐色粘質土　（墳丘崩落土か？）
7　暗黄褐色粘質土　（有機質、炭化物を多く含む、葺石直上から埴輪多数出土、初期崩落土か？）
8　黄褐色粘質土
9　赤褐色粘質土
10 明赤褐色砂質土　（地山小礫を多く含む）
11 暗黄褐色粘質土
12 暗赤褐色粘質土　（テラス面整地土）
13 暗黄褐色粘質土
14 赤褐色粘質土
15 黄褐色粘質土
16 明黄褐色粘質土
17 褐色粘質土
18 赤褐色粘質土
19 暗赤褐色粘質土　（墳丘盛土、土手状）
20 暗褐色粘質土　（旧表土）
21 明赤褐色粘質土　（地山）
22 明黄褐色礫混粘質土（地山）



b–b’ 土層注記

1　褐色粘質土
2　暗褐色粘質土　（テラス面整地土）
3　明赤褐色粘質土　（地山礫を多く含む）
4　褐色粘質土
5　赤褐色粘質土
6　明褐色粘質土
7　暗褐色粘質土
8　暗赤褐色粘質土
9　褐色粘質土
10 暗赤褐色砂質土
11 赤褐色粘質土
12 暗褐色粘質土　（墳丘盛土、土手状）
13 暗黄褐色粘質土　（旧表土）
14 赤褐色粘質土　（地山）
15 明赤褐色礫混粘質土（地山）

0　1:50　1m

0　1:100　5m

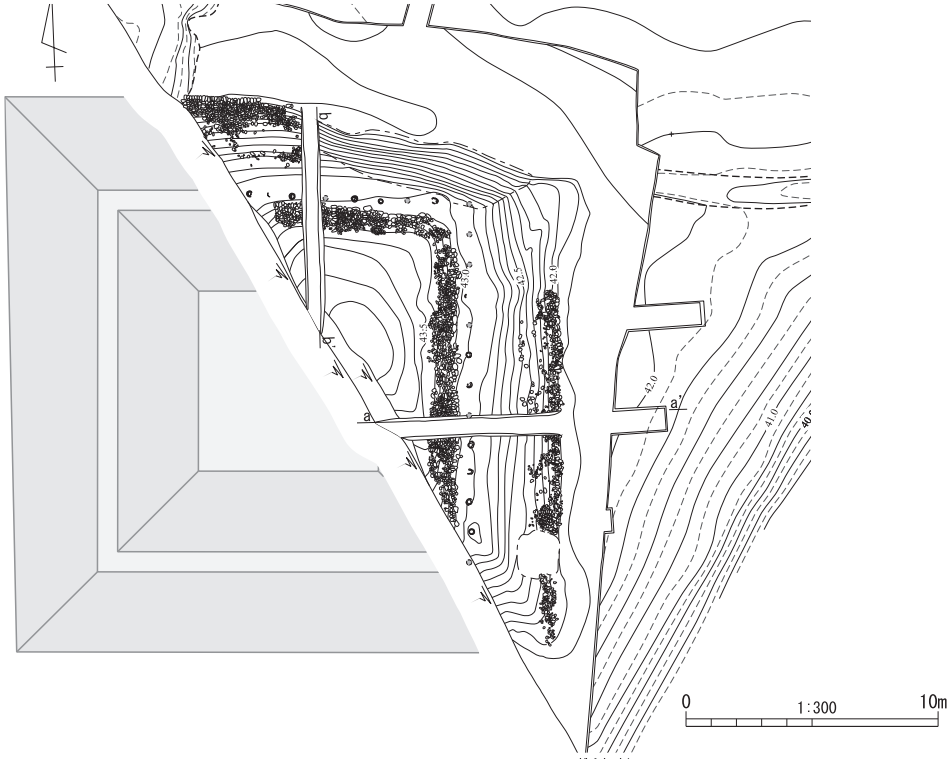


Fig.17　墳丘土層断面図

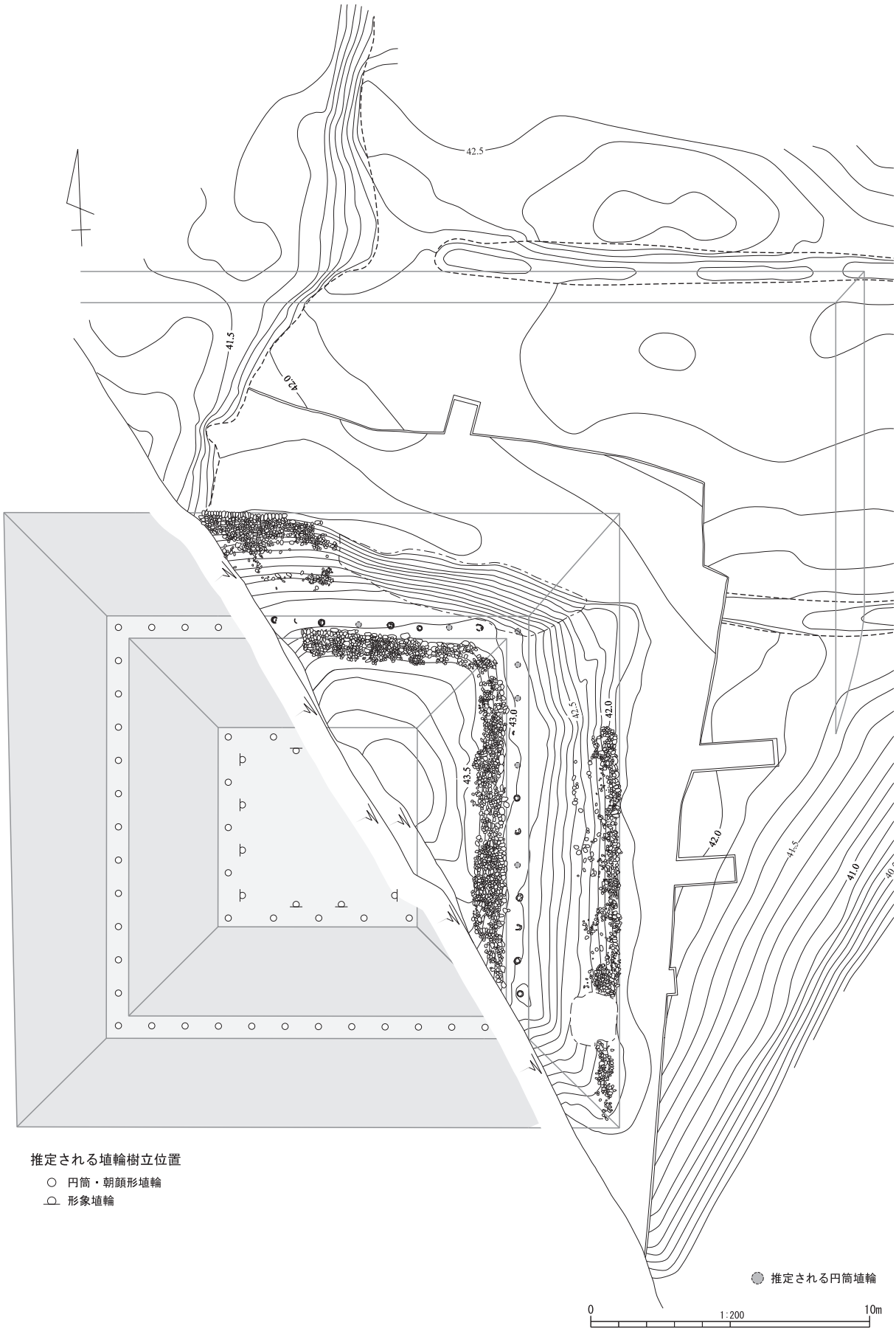

42.5
41.5
42.0
43.5
43.0
42.5
42.0
42.0
41.5
41.0
推定される埴輪樹立位置
円筒・朝顔形埴輪
形象埴輪
推定される円筒埴輪
0
1:200
10m

Fig.18　墳丘復元図

第３章　出土遺物

１　出土遺物の概要

資料群の来歴　今回の調査と報告書作成に伴う関連調査によって、狐塚古墳にかかわる情報を集約した。狐塚古墳からの出土遺物としては、墳丘に樹立された埴輪と埋葬施設に伴う副葬品が知られる。埴輪については、月岡資料、1975 年出土資料、2011 年出土資料があり、それぞれの遺物群の特徴が一致することを確認した。このため、埴輪については、採集・出土年にかかわりなく種別ごとに報告する。

副葬品には短甲、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、砥石がある。これらは月岡資料と 1975 年以前に採集された細江町資料が知られ、2011 年の調査では確認できていない。月岡資料には、短甲と鉄剣の小破片 1 点（79）があり、1975 年出土資料には、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、砥石が確認できる。

月岡資料の認定　月岡資料の取り扱いについては、補足説明が必要である。月岡資料の埴輪については、「老ヶ谷古墳」出土との注記がある。「老ヶ谷古墳」は狐塚古墳の旧称とされ、『細江町史』にその旨が記されている（細江町 1986）。円筒埴輪、形象埴輪ともに諸特徴が出土資料と一致するので、狐塚古墳からの採集品とみて問題ないと捉えられる。

副葬品のうち、月岡資料に認められるのが短甲である。短甲は全体像がほぼうかがえるので、埋葬状態を保っていた状態の大部分を取り出したものと考えられる。短甲には注記がないが、この度の整理作業によって、月岡資料の短甲片と細江町資料の短甲片に接合関係が認められた。このことから、月岡資料の短甲は、狐塚古墳出土品と断定しうる。現在、月岡資料の中で狐塚古墳出土品と認めうるものは、短甲片と鉄剣の破片 1 点のみである。しかし、埋葬状態を保つ短甲の全体を採集し、かつその中に鉄剣の破片が混入していることを勘案すると、月岡氏が採集した遺物には、短甲以外にも刀剣や鉄鏃などの鉄器類が含まれていた蓋然性が高い。現在、月岡資料の中に出土地不明なままの刀剣が数多くあるが、層状に剥離する遺存状態が後述する細江町資料と類似するものが含まれる。これらの刀剣は狐塚古墳から採集された可能性を考慮すべきであろう。

いっぽう、細江町史図版 34 B（Fig.19）に紹介されている鉄刀および鎌については、狐塚古墳とは異なる古墳出土の注記が伴う点で注意が必要である。これらの遺物群のうち、鉄製鏃を伴う小刀（町史図版 34-29）や両関の鉄刀類（町史図版 34-30 ～ 39）は、古墳時代後期の所産と考えられるものであり、銹の状態も短甲とは大きく異なる。これらの情報を総合的に判断すると、町史図版 34 B に紹介されている鉄器は、狐塚古墳出土品と捉えることができない。

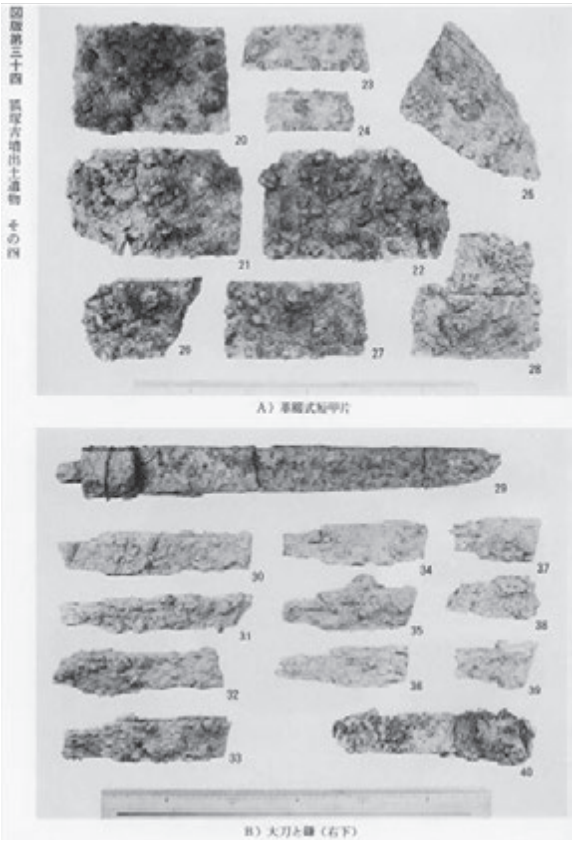


Fig.19　細江町史所収の図版

２　埴　輪

（１）狐塚古墳出土埴輪の概観

狐塚古墳において確認できる埴輪には、円筒埴輪（朝顔形埴輪を含む）と形象埴輪がある。後述するように、円筒埴輪には蓋形埴輪などと組み合う基底部材が含まれるとみられるが、口縁を除き普通円筒埴輪と区別をつけることが困難なことから、円筒埴輪の中に一括して取り扱う。円筒埴輪には、普通円筒埴輪（1 ～ 88）、貼付突帯口縁円筒埴輪（推定蓋形埴輪基底部、89 ～ 97）、朝顔形埴輪（98 ～ 124）がある。形象埴輪には、家形埴輪（125 ～ 142）、蓋形埴輪（143 ～ 175）、甲冑形埴輪（177 ～ 190）、盾形埴輪（191 ～ 199）、靫形埴輪（200 ～ 210）、不明品（推定鳥形埴輪を含む、211 ～ 217）がある。

埴輪は墳丘斜面から数多く出土した。また中段平坦面において樹立状態が確認できた円筒埴輪もある。出土位置の傾向から、墳頂平坦面には円筒埴輪と形象埴輪の双方が樹立されていたとみられ、中段平坦面には円筒埴輪のみが並べられていたと捉えられる。

（２）普通円筒埴輪　（Fig.22 ～ 28）

群　別　狐塚古墳の円筒埴輪には大きく、２次調整にヨコハケを施す一群（1 ～ 57）と、２次調整にタテハケのみを施す一群（58 ～ 79）の二つの群に分けられる。前者をⅠ群、後者をⅡ群とする。基底部については、両者の区別がつけられない個体がある（80 ～ 88）。後述するように、両者は調整技法のみならず、口縁や突帯の形状、透孔の特長、器壁の厚さなどの違いにも相関関係が認められる。

全体形状　基底部から口縁部まで完全に復元できた個体はないが、Ⅰ群、Ⅱ群共に２条の突帯をめぐらせた３段構成とみられる（Fig.20）。遺存状態が最もよい個体（1）の大きさは、口縁部の直径 28.2㎝、高さは推定 42㎝、基底部の直径 19㎝ である。

焼　成　円筒埴輪の焼成はⅠ群、Ⅱ群ともに、おしなべて良好で黒斑は認められない。表面の風化や磨滅が進行している個体もあるが、比較的硬質な焼成といえ、窖窯焼成によって製作されたものと判断できる。ただし、須恵器のような堅緻な焼成の個体は含まない。

色　調　Ⅰ群、Ⅱ群ともによく似た色調を呈する。『標準土色帳』に照らせば、にぶい橙色や浅黄橙色などに分類できるが、おしなべて同一の色調を呈しているといえる。著しく色調が異なる個体はみられない。

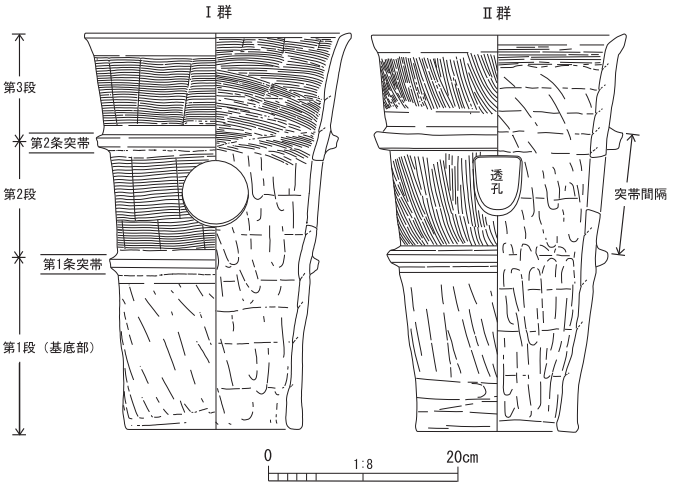


Fig.20　円筒埴輪の群別と部分名称

胎　土　Ⅰ群、Ⅱ群の双方とも胎土に含まれる粒子の含有量は比較的少ない。砂礫の大きさも大部分が長径 2㎜ 以下の細かいもので、目立つものではない。礫の色調は赤褐色、灰色などを呈するものが多い。赤褐色を呈する粘土状の粒子も比較的多く認められる。

調整技法　Ⅰ群円筒埴輪の外面は、タテ方向に１次調整のナデ調整を用い、２次調整にはヨコハケを施す。ヨコハケを

主体的に施すのは、第２段と第３段である。基底部（第１段）は、ヨコハケを施さず、１次調整のナデのままであるものが多い。ハケメの条線は、2cm 間に６～８本ほどである。２次調整の原体幅は必ずしも明瞭でないが、突帯の間を一回の調整で施せる幅 7cm ほどのものと、突帯間隔を埋めるには数回施す必要がある幅 2.5cm ほどのものがある。Ⅰ群円筒埴輪の２次調整には、原体の明瞭な静止痕跡を残すＢ種ヨコハケが看取できるものがある（1 ～ 3､11､29､37､50､51､53）。Ⅰ群円筒埴輪の内面調整については、第３段内面にヨコハケを施すものが多い。

Ⅱ群円筒埴輪の外面にはタテハケが施される。タテハケの施行と突帯添付の前後関係については、不明確であるが、突帯添付後に施したとみられるもの（60）と、突帯添付以前に施したとみられるもの（75､76）がある。Ⅱ群円筒埴輪もⅠ群円筒埴輪と同様に基底部（第１段）にはタテハケを施さず、ナデ調整のままである個体が主体をなすとみられる。タテハケの条線は 2cm

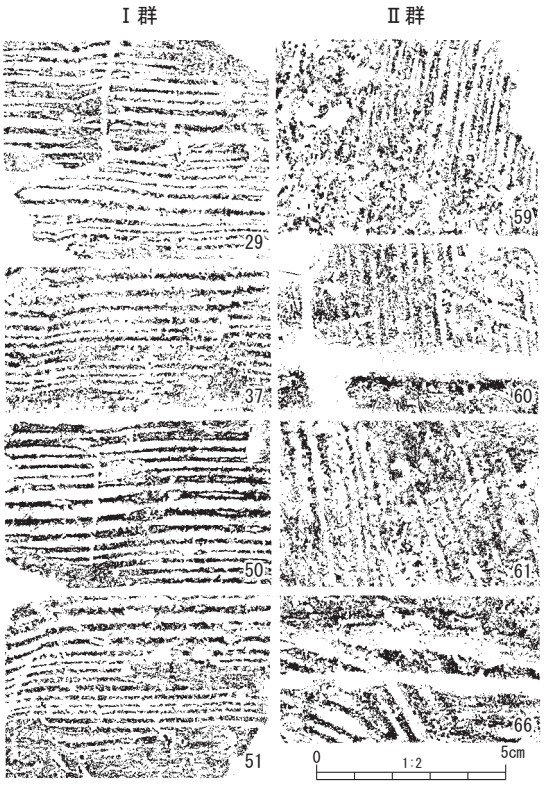


Fig.21　円筒埴輪のハケメ

Fig.22　円筒埴輪Ⅰ群実測図（1）

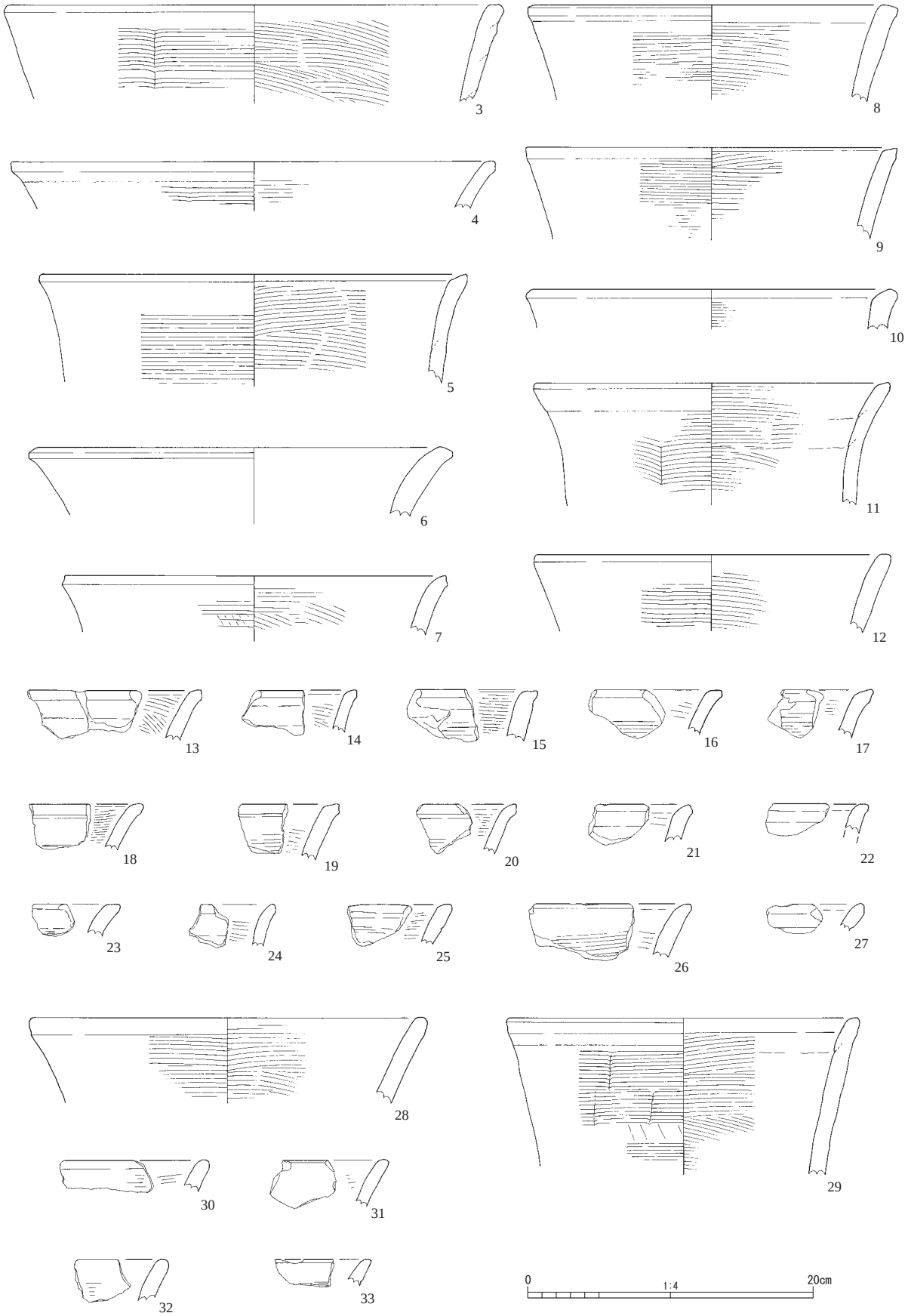


Fig.23　円筒埴輪Ⅰ群実測図（2）

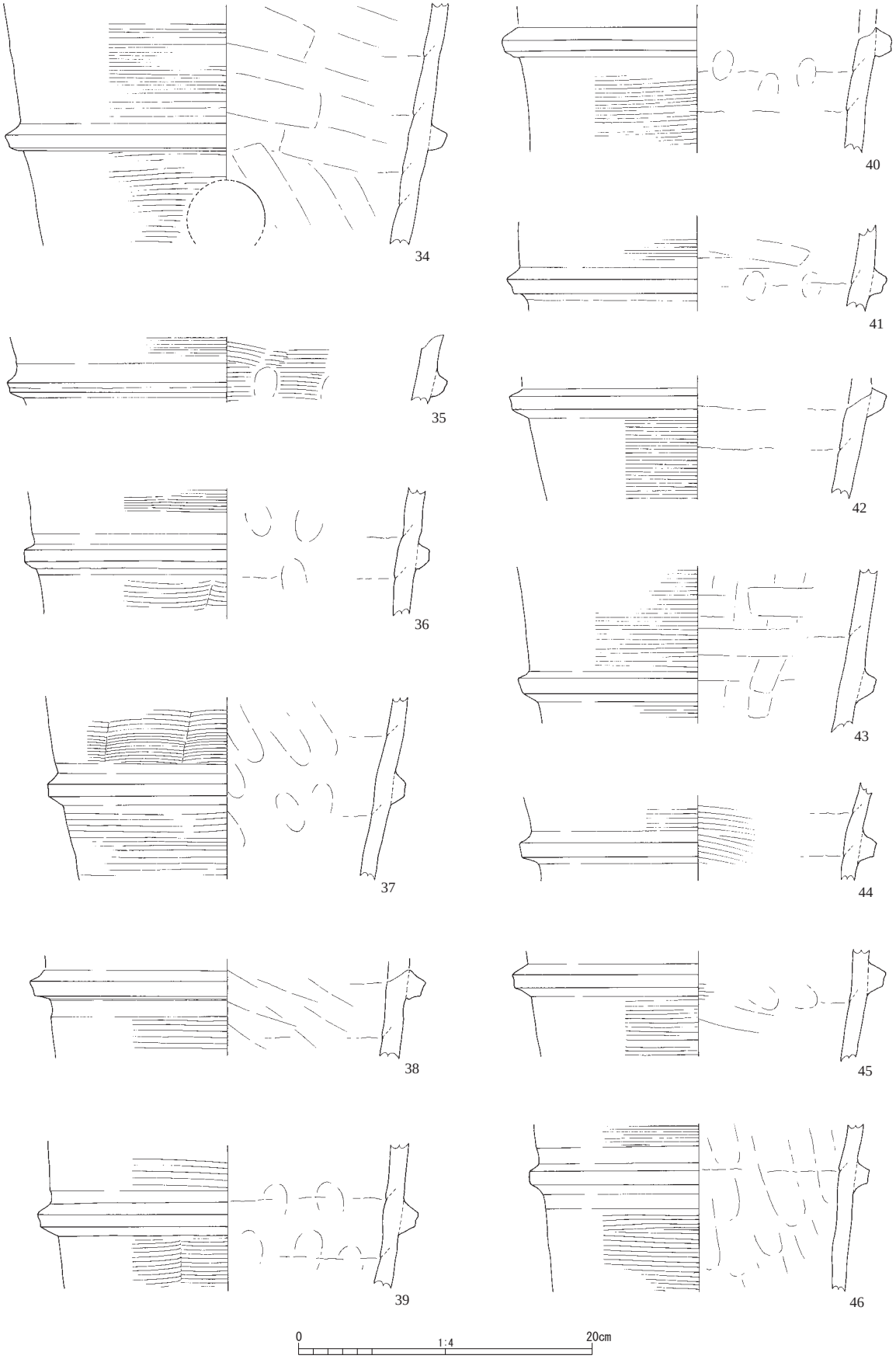


Fig.24　円筒埴輪Ⅰ群実測図（3）

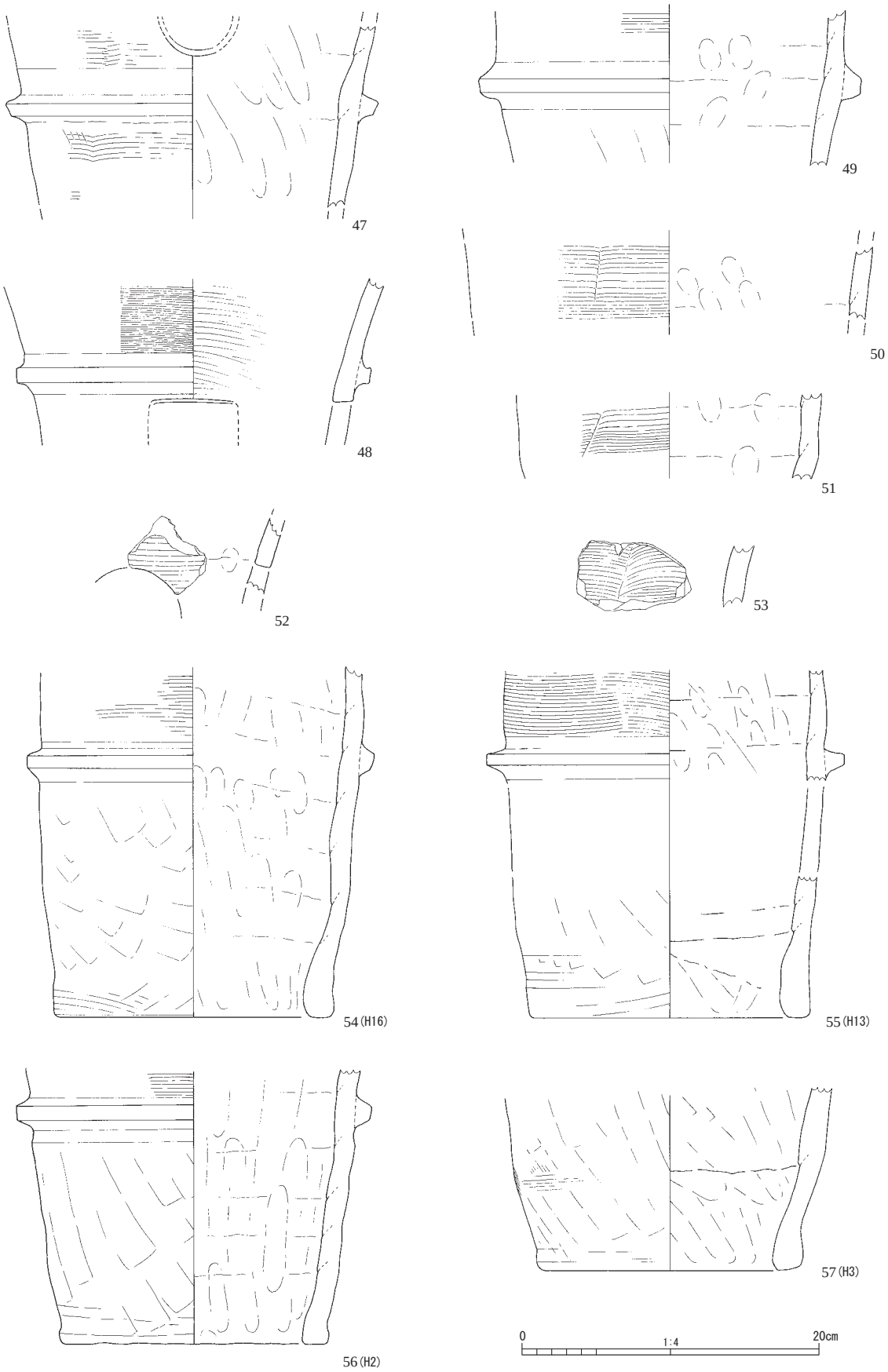


Fig.25　円筒埴輪Ⅰ群実測図（4）

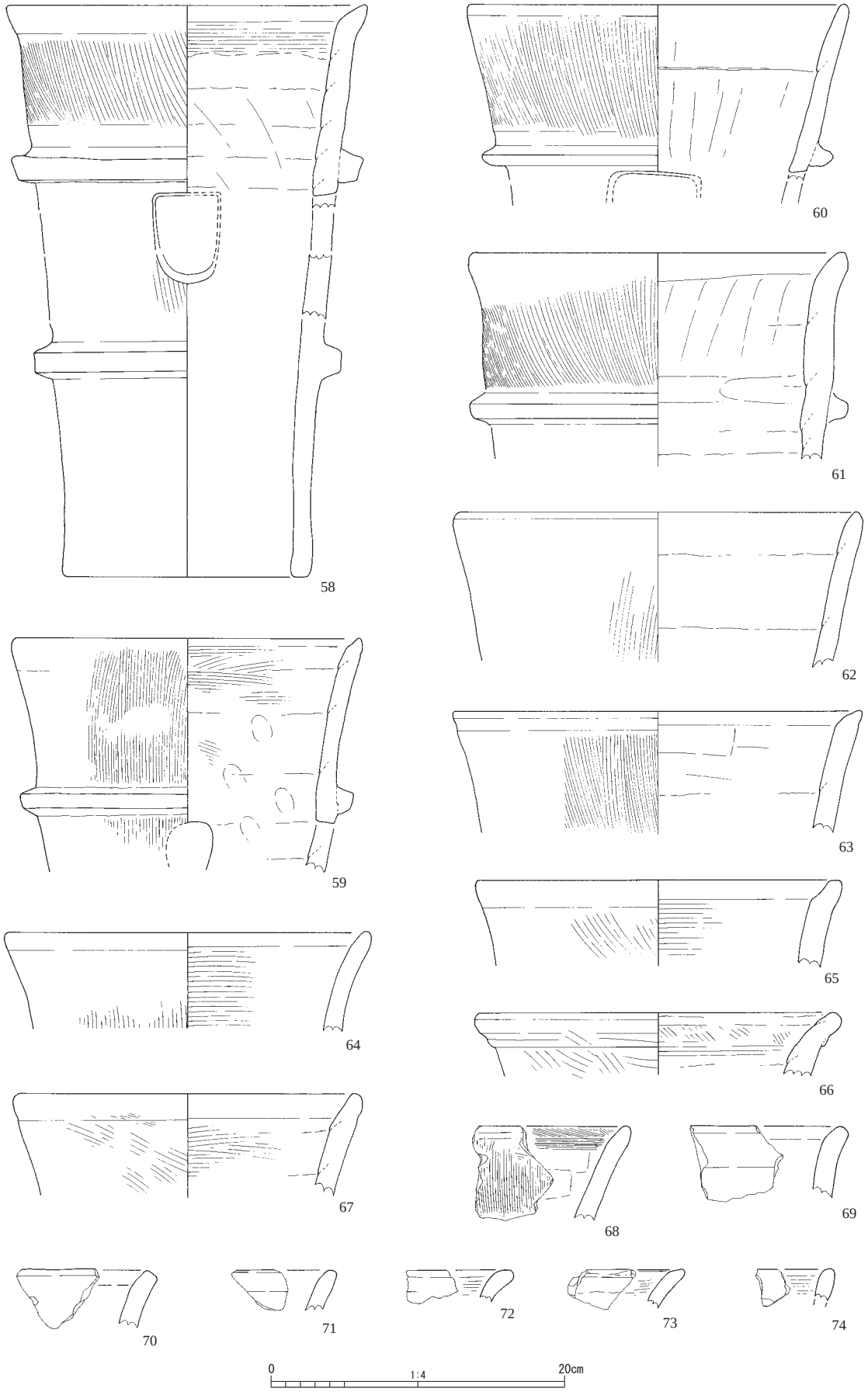


Fig.26　円筒埴輪Ⅱ群実測図（1）

の間に 6 ～ 9 本ほどである。口縁内面については、ヨコハケを施すものが多い。

口縁部　Ⅰ群円筒埴輪の口縁部は外反し、外側に僅かながらも端面を作り出す形状（屈曲口縁、1 ～ 27）を基本形とする。内面は緩やかに屈曲し、稜線をもつものがある。この他に、直立する口縁（直立口縁、28 ～ 33）も客体的であるが認められる。これに対し、Ⅱ群円筒埴輪の口縁部は直立して口縁で端面も不明瞭な形状のものが多いが、Ⅰ群の屈曲口縁を模したような形状（58、61、63 など）も認められる。ただし、端部はⅠ群のように面をなすものがない。

突　帯　Ⅰ群円筒埴輪の突帯断面は、明確な台形もしくはM字形を呈する。突帯の突出は 0.8 ～ 1.4㎝ほどである。端面の稜線も明確に観察できる。いっぽう、Ⅱ群円筒埴輪の突帯形状は安定していない。台形を呈するもの（58）もあるが、Ⅰ群の突帯と比べ大振りである。このほか、角が不明瞭な台形のもの（59、78、79）や三角形を呈するもの（60、75、76）もみられる。

透　孔　Ⅰ群円筒埴輪の透孔は円形のものが 4 点（2、34、47、52）、方形のものが 1 点（48）認められる。円形を主体とするものとみてよいだろう。Ⅱ群円筒埴輪の透孔については、全体形が判明するものが無い。60 は方形の可能性があるが、比較的遺存個所が大きい個体（58、59）を見る限り、上端が直線を描く半円形を呈するとみられる。

基底部　Ⅰ群円筒埴輪の基底部（1、2、54 ～ 57）は直径 18 ～ 19㎝であり、第 1 段の高さは 17㎝ほどである。器壁の厚さは 1.5 ～ 2.0㎝ほどで、形態は安定している。いっぽう、Ⅱ群円筒埴輪の基底部（78・79）は直径 13.8 ～ 16.5㎝であり、Ⅰ群と比べて直径が小さい傾向が認められる。

また器壁の形状もⅠ群と比べて不安定である。80 ～ 88 はⅠ群とⅡ群の分離が厳密にみると困難な資料群である。形態的にやや特異な 82 はⅡ群の可能性が高いが、その他の個体の多くはⅠ群と想定できる。

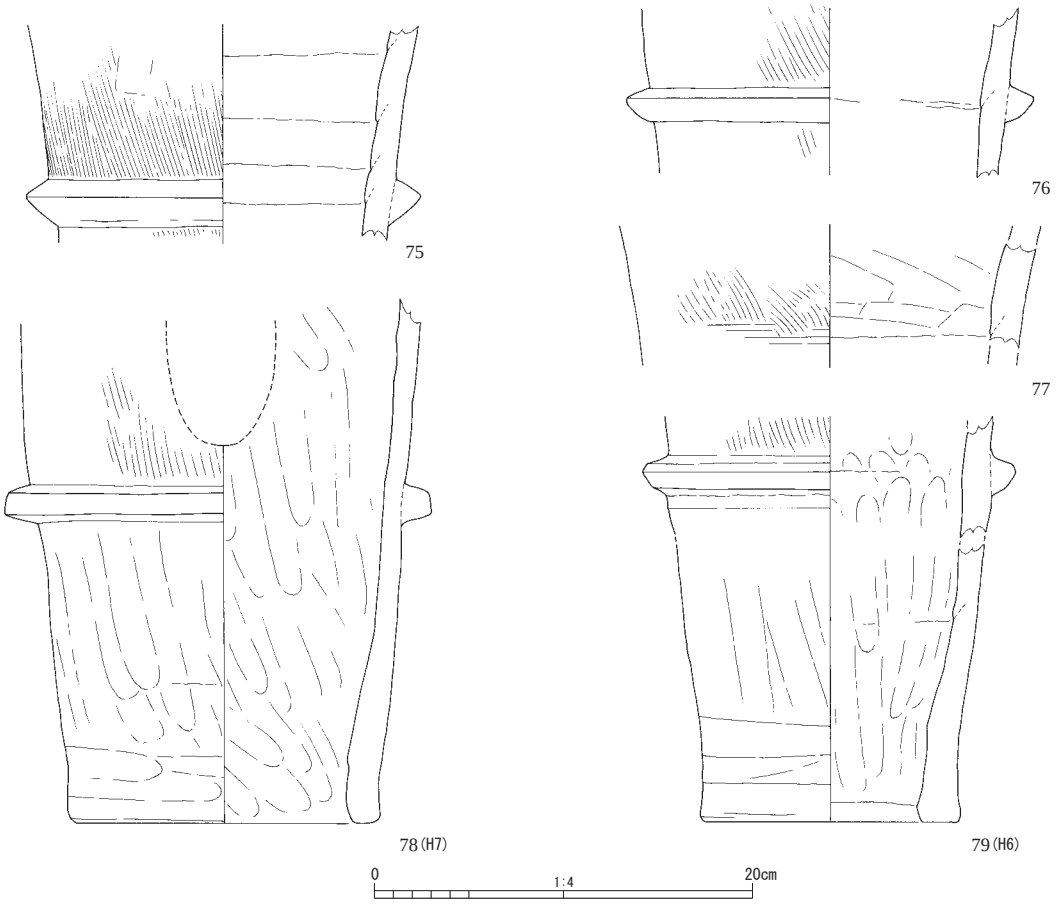


Fig.27　円筒埴輪Ⅱ群実測図（2）

ハケメが残存していない基底部については、Ⅰ群かⅡ群かの判別が明確にできないものがある。群別が不明瞭な基底部を Fig.28 にまとめたが、このうち 84 など大型の破片は、形象埴輪の基底部である可能性も考慮してよいだろう。

群別の比率　Ⅰ群の円筒埴輪とⅡ群の円筒埴輪の比率は、口縁端部の破片数からうかがうことができる。Ⅰ群の口縁端部数は 33 点、Ⅱ群の口縁端部数は 17 点である。また、実測図を作成した個体数で比較すると、Ⅰ群は 57 点、Ⅱ群は 22 点である。以上のことから、Ⅰ群とⅡ群の比率はおおよそ、２：１ないしは３：１程度であったとみられる。

樹立位置の傾向　樹立位置が判明している円筒埴輪基底部のうち、北側埴輪列に使用されたものはすべてⅠ群で占められる。いっぽう、東側埴輪列にはⅠ群とⅡ群の埴輪が混在する（Tab.1）。また、墳丘斜面の崩落土中から出土した埴輪についても、Ⅱ群の出土位置は東側斜面に限られる。このことから、墳丘北側埴輪列にはⅠ群が限定的に用いられ、墳丘東側埴輪列はⅠ群とⅡ群が混在していたといえるだろう。また、北側斜面においてⅡ群の破片が全く確認できないことから判断すると、墳頂平坦面についてもⅠ群の円筒埴輪のみが樹立されていた可能性が指摘できる。

Tab.1　円筒埴輪列の群別

番号	樹立位置	Fig.	実測図版番号	群別
H1	東	28	82	Ⅱ群か
H2	東	25	56	Ⅰ群
H3	東	25	57	Ⅰ群
H4	東	28	83	Ⅱ群か
H5	東	－	未確認	－
H6	東	27	79	Ⅱ群
H7	東	27	78	Ⅱ群
H8	東	－	未確認	－
H9	東	28	80	Ⅰ/Ⅱ群
H10	東	－	未確認	－
H11	東	－	未確認	－
H12	北東隅	－	未確認	－
H13	北	25	55	Ⅰ群
H14	北	－	未確認	－
H15	北	28	85	Ⅰ群か
H16	北	25	54	Ⅰ群
H17	北	－	未確認	－
H18	北	22	1	Ⅰ群
H19	北	－	未実測	Ⅰ群
H20	北	22	2	Ⅰ群

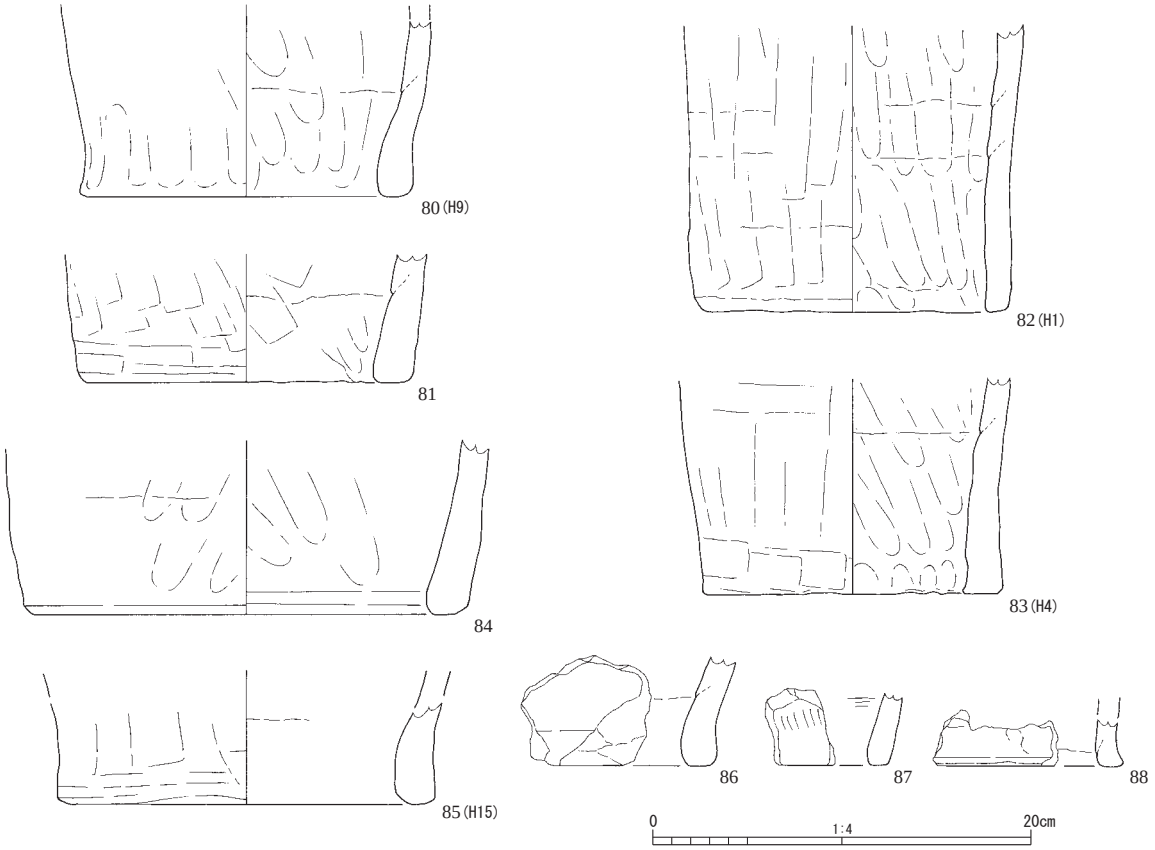


Fig.28　円筒埴輪底部実測図

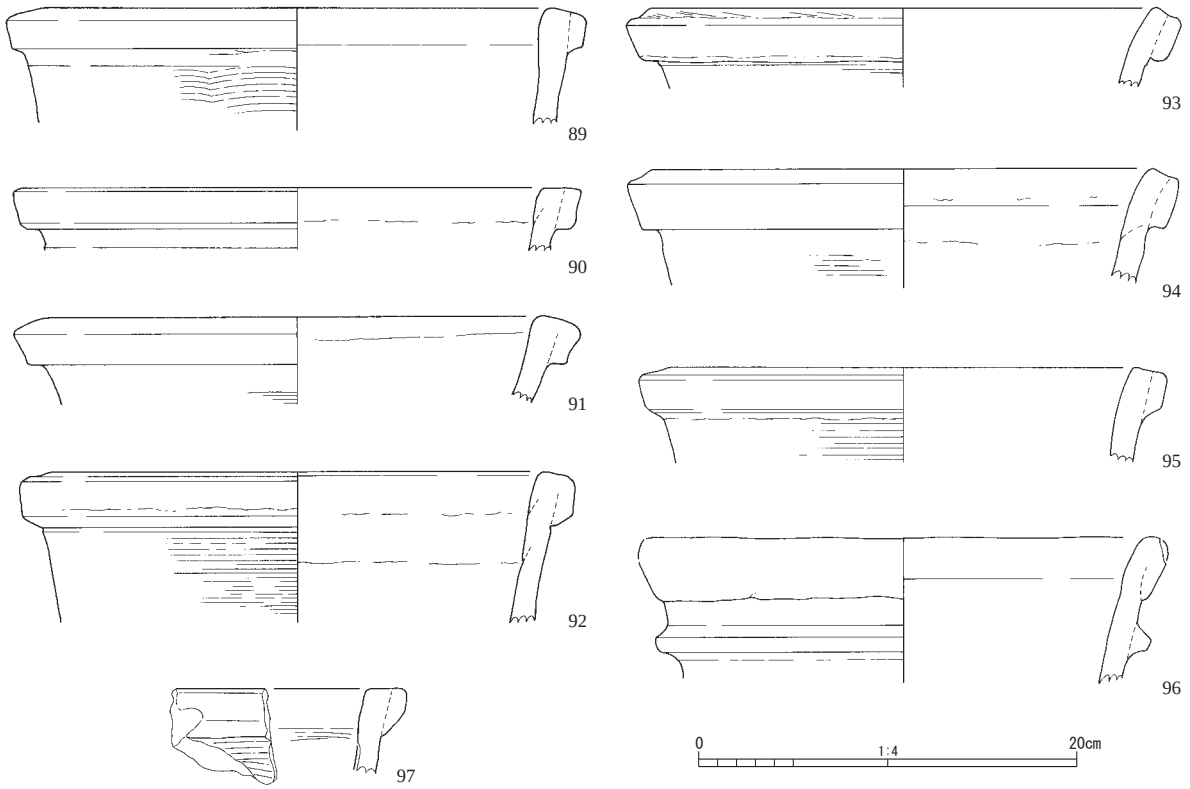


Fig.29　貼付突帯口縁円筒埴輪実測図

（３）貼付突帯口縁円筒埴輪　（Fig.29）

89 ～ 97 は突帯を貼り付けた口縁部（以下、貼付突帯口縁とする）をもつ円筒埴輪である。口縁部の突帯は、幅が 2.3㎝ ～ 3㎝ と広く、通常の突帯とは形状が異なる。外面調整が観察できる個体にはすべてヨコハケが認められるので、Ⅰ群の技術系譜で製作されたものであることが分かる。96 は口縁突帯が特異な形状のもので、口縁端部を折り返したような技法が採用されている。

貼付突帯口縁をもつ個体は、全体形状が不明確である。しかし、後述するように、狐塚古墳からは蓋形埴輪が比較的多く確認されていることを勘案すると、貼付突帯口縁をもつ円筒埴輪は、蓋形埴輪と組み合わせて用いられていた可能性が高いとみられる（Fig.56）。

（４）朝顔形埴輪　（Fig.30）

98 ～ 124 は朝顔形埴輪である。口縁端部は明瞭な外傾面をもつものが多く、屈曲は鋭い。普通円筒埴輪の口縁形態とは明らかに違いがあり、識別は比較的容易である。口縁外面はタテハケ、内面はヨコハケである。

102 ～ 117 は、小破片であるものの、口縁形態と傾きから、朝顔形埴輪と判断した。118 ～ 121 は、口縁屈曲部もしくはその近辺の破片である。外面にタテハケが施されている点は、口縁端部と同様である。121 はやや特異な形状である。屈曲部下段には方形もしくは半円形の透孔が入れられており、口縁の屈曲もやや内彎している。122 ～ 124 は肩部の破片である。彎曲する部分の外面についてはロ縁と同様のタテハケが施されている。124 にはＢ種ヨコハケの特徴が明瞭に看取できる。

朝顔形埴輪についても、突帯形状と外面調整の特徴から、大部分がⅠ群円筒埴輪の技術系譜に連なると考えられる。ただし、特異な形状と透孔を有する 121 については、Ⅱ群に分類しうる。

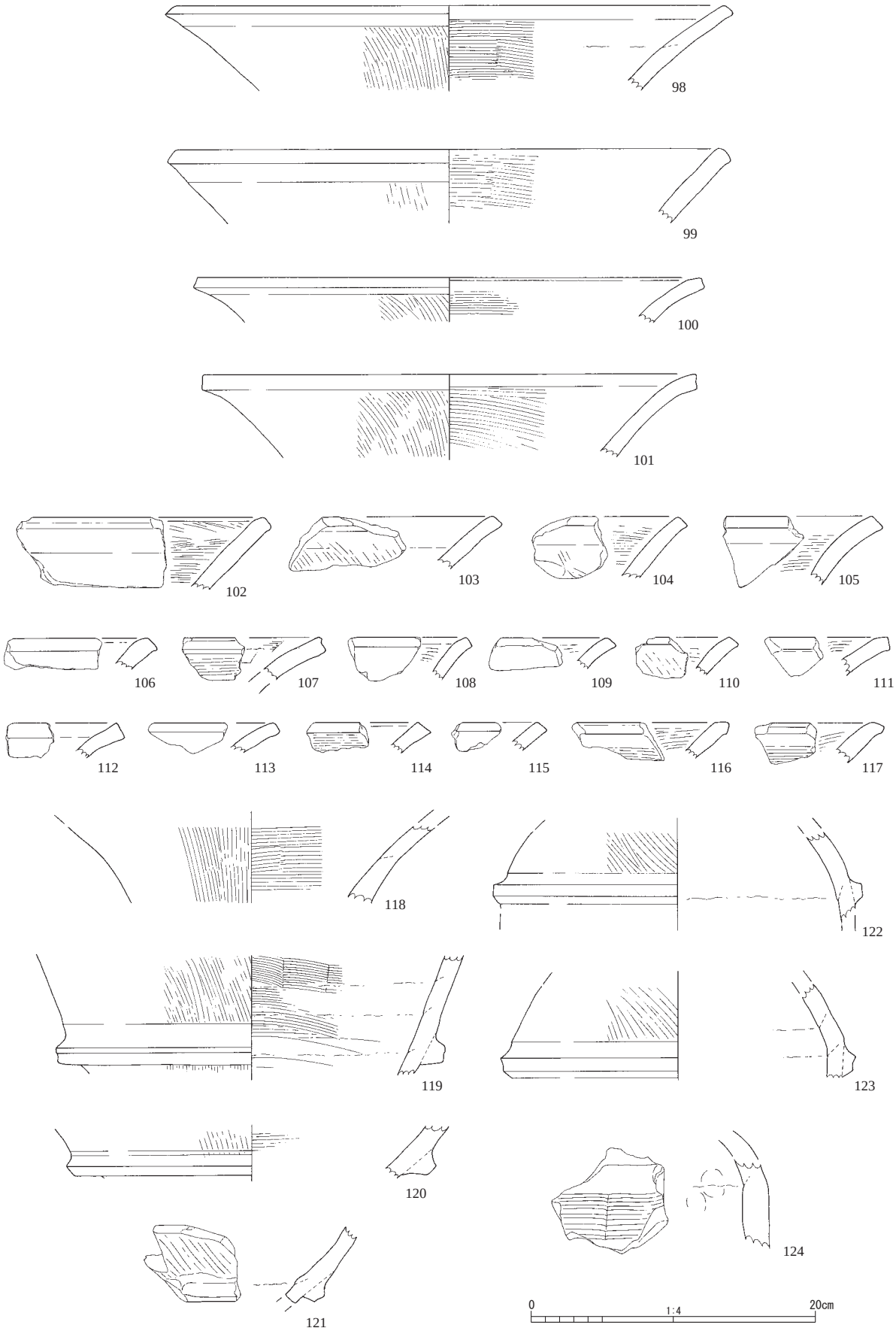


Fig.30　朝顔形埴輪実測図

（５）家形埴輪　（Fig.32 ～ 33）

125 ～ 142 は、家形埴輪の破片である。網代が表現された屋根の破片（125 ～ 129）、軒の突出が弱い無文の屋根部の破片（130 ～ 133）、壁に相当する軸部の破片（134 ～ 136）、ハケメを明瞭に残した屋根もしくは軸部の破片（137､138）､裾周り突帯（139 ～ 142）がある。家形埴輪の破片は､2011 年出土資料よりも 1975 年出土資料が多くを占める。1975 年出土資料には、副葬品も含まれることを考えると、墳頂部が破壊される前に採集されたものが一定量あるとみてよい。家形埴輪の破片の多くは当初の樹立位置を反映し、墳頂部でもより中央部に近い位置に集中して樹立されていた可能性が指摘できる。

125 は破風を備えた屋根の破片で、丁寧な線刻を用いた網代表現がみられる。網代は、長方形区画を基本とし、中心線によって等分した正方形区画を貫通する縦横交互の線刻によって表現されている（Fig.34 左上）。この施文原則は、網代表現がみられる 125 ～ 129 すべてに共通する。126 は網代表現される屋根部に屈曲をもつ破片である。網代線刻は一部妻側にもめぐっており、破風が連接するものではない（Fig.34 右上）。特異な屋根構造を表現しているとみられるが、遺存部分が限られるため全体形は不明である。128 ～ 129 も網代表現がみられる屋根部の破片であるが、網代の単位がそれぞれ異なるため、それぞれ別個体とみられる。125、126 を含め、すべて別の個体とみるなら、最低でも 5 点の網代表現のある家形埴輪があった可能性がある。

130 ～ 133 は屋根部の軒先とみられる破片である。いずれも屋根の突出は小さいが、外面先端に一条の線刻を入れた 130・133 と、先端部を厚くし、小さな段をもつ 131・132 の 2 種が認められる。最低でも 2 個体分あるとみられよう。

134 は開口部が表現された軸部の破片である。開口部の下端は半円形の抉りがみられる。開口部から壁に向かって彎曲が顕著であることから、妻側に相当するとみられる。開口部の側片から下部の延長方向には一条の沈線が入れられている。裾廻り突帯はみられない。裾部分は横長の粘土板を用いて形成されている、裾部の粘土板は上端部に斜方向の刻みを入れて接合する技法（Fig.34 下段）がみられる。135 も開口部にあたる軸部の破片である。136 は裾部の粘土板であり、134 と同様に粘土板の上端に刻みを入れる製作技法がみられる。両者は同一個体と捉えても問題ない。

137･138 はハケメを残した屋根部もしくは軸部の破片である。137 は屋根部の可能性があるが、屈曲の角度が直角に近いとみるなら、軸部の破片と捉えるほうが妥当であろう。

139 ～ 142 は裾廻り突帯の破片である。いずれも単純な突帯状の表現である。140 は基部まで残るが、基底部から裾廻り突帯までの距離が短い。

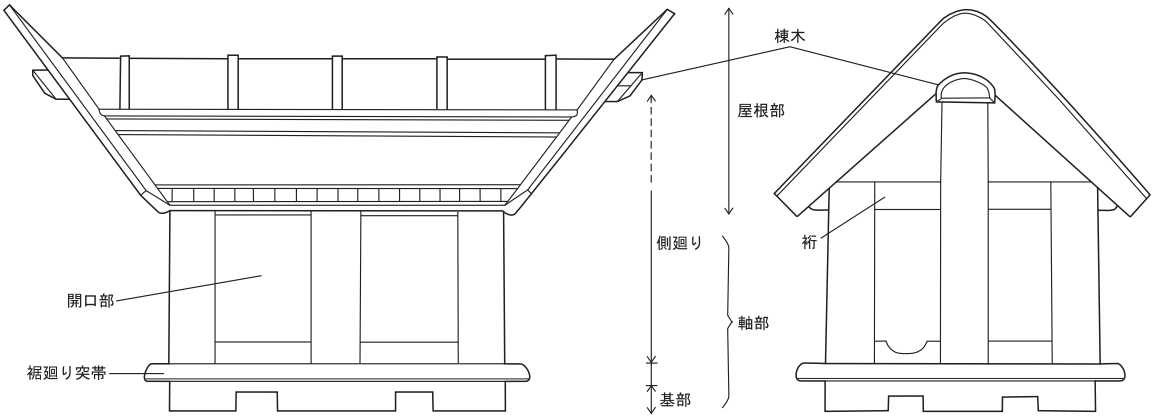


Fig.31　家形埴輪の部分名称

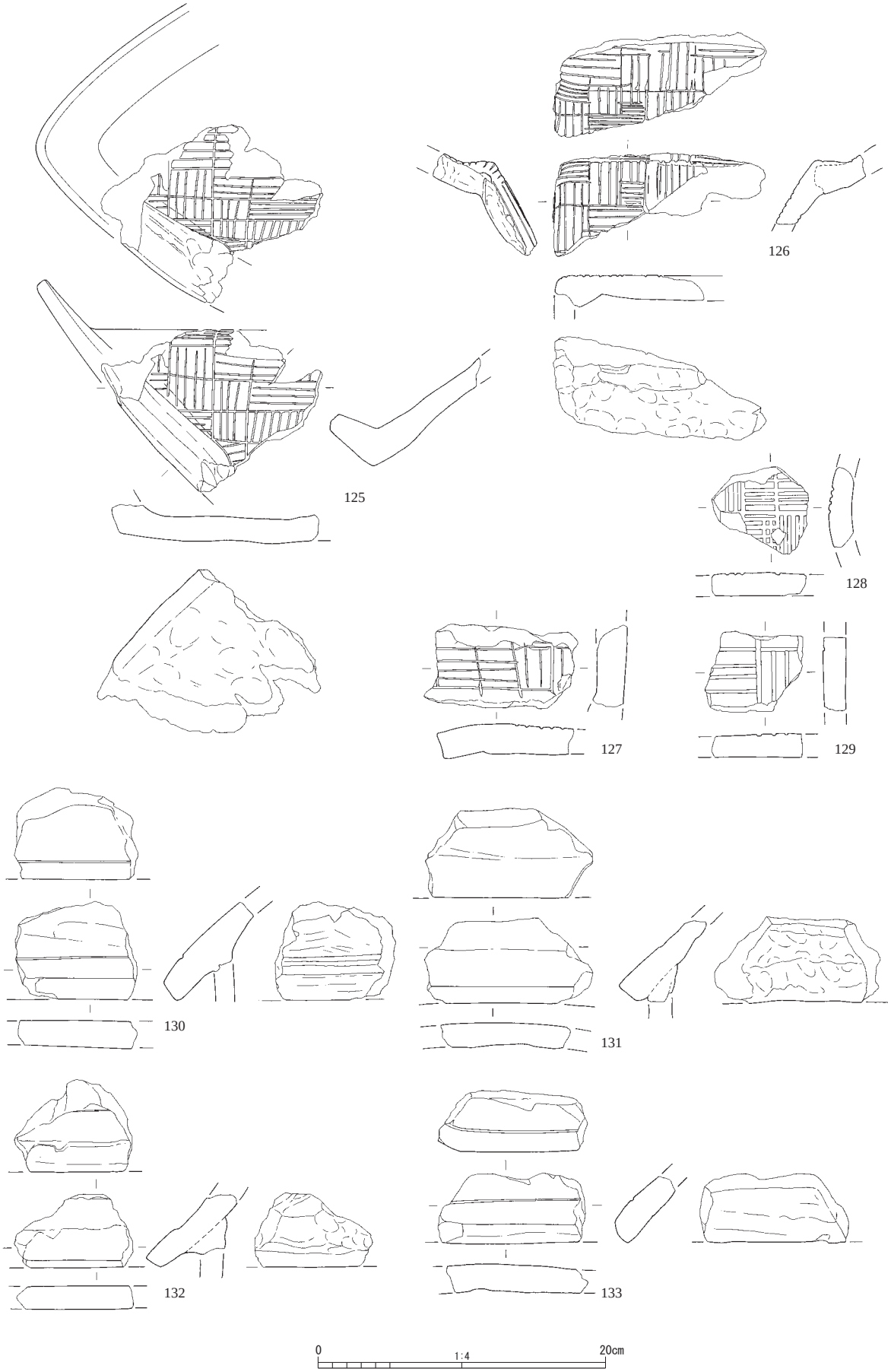


Fig.32　家形埴輪実測図（1）

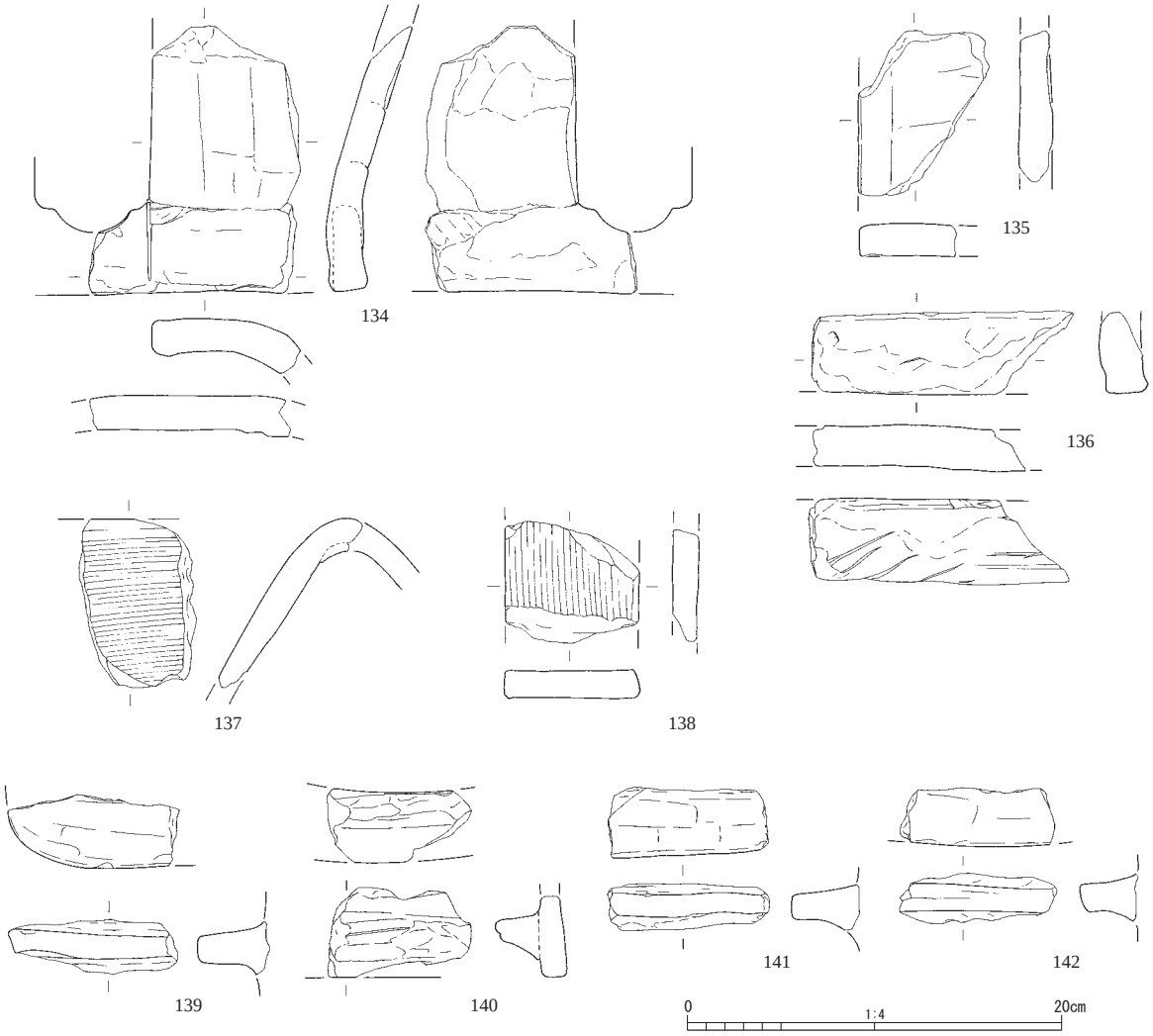


Fig.33　家形埴輪実測図（2）

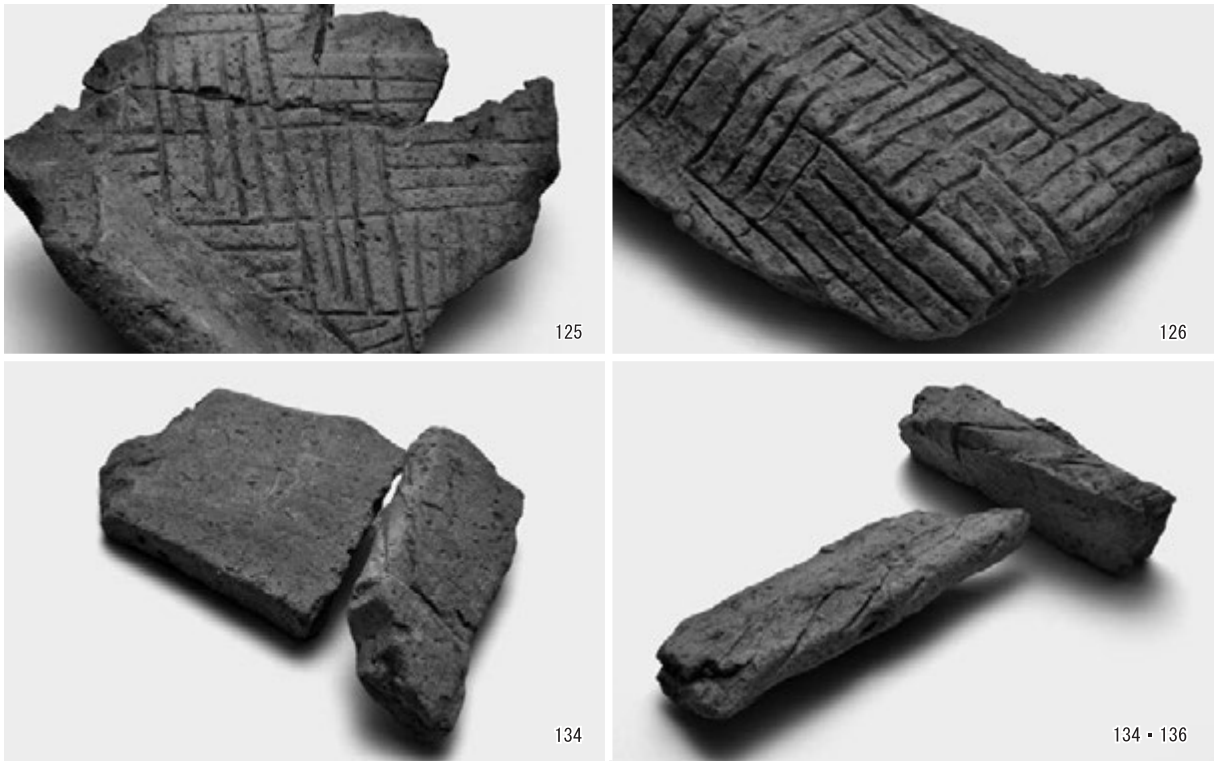


Fig.34　家形埴輪詳細

（６）蓋形埴輪　（Fig.36・37）

143 ～ 175 は、蓋形埴輪の破片である。立ち飾りの飾り板の破片（143 ～ 165）が多くを占めるが、軸部（166）、軸受け部（167､168）、笠部（169 ～ 176）などの各部位の破片も僅かながら揃う。蓋形埴輪は 1975 年出土資料とともに、2011 年出土資料も一定量含まれる。蓋形埴輪は墳丘の北側・東側、双方の斜面から比較的多く出土した。立ち飾りの形状、鰭飾りの線刻など、個体ごとの違いは少なく、形態的特徴はすべての破片において共通する。他の形象埴輪と同様、蓋形埴輪も墳頂部に樹立されていたものとみられるが、他の形象埴輪と比べて破片数が多いことから判断して、墳丘外側の埴輪列と近い位置に並んでいた可能性が考えられる。狐塚古墳に樹立された蓋形埴輪は Fig.35 に示すような形状を呈すると考えられる。飾り板は直立する傾向があること、軸受け部の直径が小さいことなど、やや特異な箇所が認められるが、同時代の蓋形埴輪として大きくは問題ない形状に復元できる。

蓋形埴輪は単体で樹立されたものではなく、円筒埴輪が基底部として組み合うものと想定できる。明確な出土状態として確定できたものではないが、円筒埴輪の中に認められる貼付突帯口縁をもつ個体（89 ～ 97）が蓋形埴輪の基底部である可能性が高いといえるだろう。貼付突帯口縁をもつ円筒埴輪と蓋形埴輪との組み合わせ状況の模式図は、Fig.56 に示す。

143 ～ 165 は飾り板の破片である。出土数や出土位置から複数個体分があるとみられるが、外形の形状や線刻の特徴など互いに共通する部分が多い。狐塚古墳の蓋形埴輪は、互いによく似た形状であったとみられる。飾り板上端部が遺存している 144 や 145 をみると、上辺は中央に向かって傾き内側に彎曲していることが分かる。鰭飾りは、内側に１箇所、外側に２箇所設けられている。内側と外側下部の鰭飾りは比較的簡素で短い。いっぽう、外側上部の鰭飾りは、飾り板本体と一体化し、151 にみるように、上部の突出が大きい。飾り板の線刻は並行する二本線を基本として、縁取りと２箇所の区画によって模様が描かれている。内側の鰭飾りと外側下部の鰭飾りには線刻が施されるものと施されないものがある。この差は 143 のように同一個体の表裏においても看取できる。

166 は軸部の破片である。直径 4.8㎝ほどの細い形状であるが、対応する軸受け部（167､168）も直径が小さく、双方の関係としては問題ない。

167、168 は軸受け部の破片である。端部の形状が異なることから、それぞれ別個体の破片と考えられる。いずれも端部は貼り付け突帯口縁のように厚くされており、外側にはハケメを明瞭に残す。ハケメは軸受け部以外にみられないことから、模様として意識されていた可能性がある。

169 ～ 176 は笠部の破片である。笠部は中央突帯をもち、その上部は無文、下部は２本一組の縦方向の区画沈線によって模様が描かれる。２本一組の区画沈線は､175 の特徴から６方向に入れられているとみられる。笠部下端（175､176）は端部を上方に摘み上げた形状である。

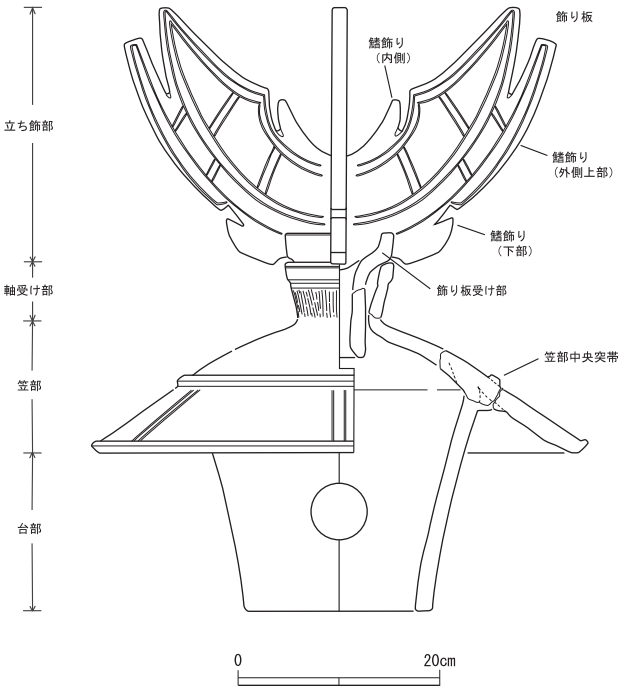


Fig.35　蓋形埴輪の部分名称

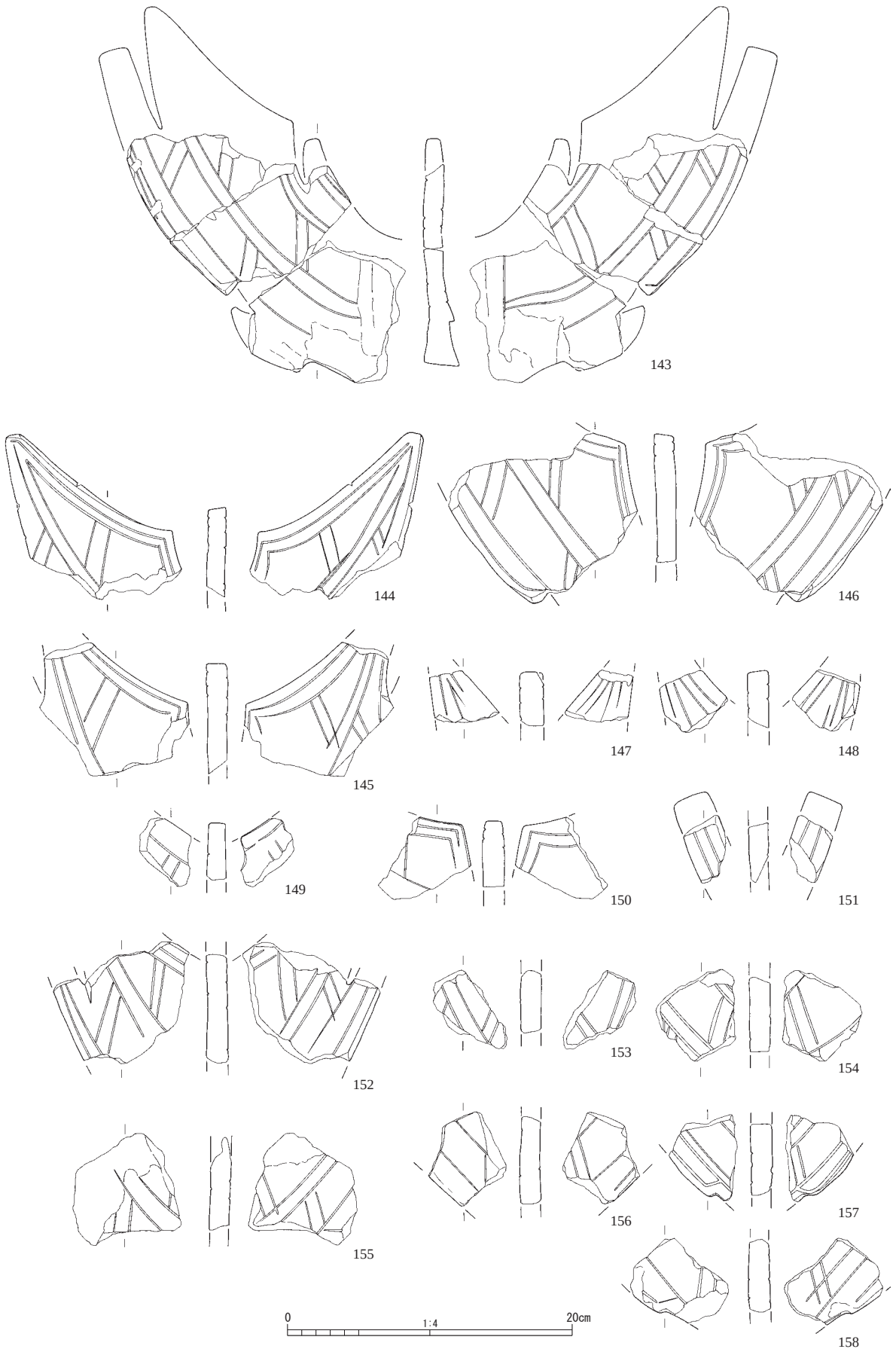


Fig.36　蓋形埴輪実測図（1）

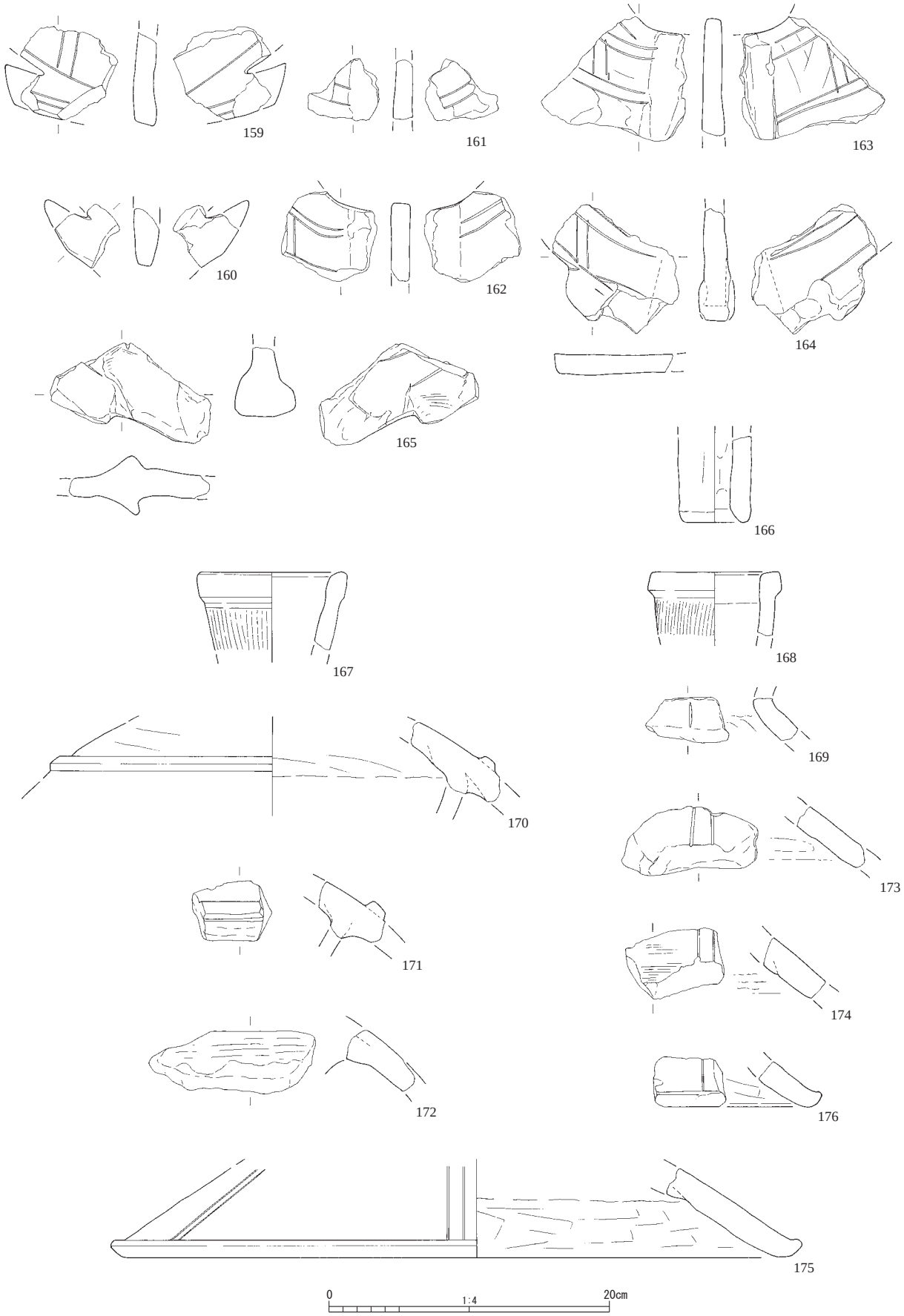


Fig.37　蓋形埴輪実測図（2）

（７）甲冑形埴輪　（Fig.38）

177 ～ 190 は、甲冑形埴輪の破片である。甲冑形埴輪には、冑の錣の破片（177）、肩甲の破片（178､179）、短甲の破片（180 ～ 185）、草摺の破片（186 ～ 190）がみられる。甲冑形埴輪の破片も家形埴輪の破片と同様に 2011 年出土資料が少なく、1975 年出土資料が占める割合が大きい。甲冑形埴輪は家形埴輪と共に墳頂部中央に樹立されていた可能性を示唆しているといえよう。

177 は冑の錣を表現した部分の破片である。錣の下端部には、ヘラ状工具の刺突によって連続した縦方向の刻み目が入れられている。この模様は通有の覆輪を表現したものでなく、大阪府野中古墳で出土しているような革製冑などの特殊な外観をもつ冑の錣を模している可能性がある。

178、179 は肩甲を表現した部分の破片である。線刻によって鉄板の重なりが表現されている。本来は頸甲とともに、短甲の上部に一体成形されていたとみられる。

180 ～ 185 は短甲を表現した部分の破片である。180 や 183 から、三角板革綴短甲を表現したものであることが分かる。綴じ革部分は僅かに表面を突出させ、縁取りに線刻を施すことによって表現している。183 や 184 は添付した綴じ革部分が剥離したものとみられる。短甲部分の表面は、帯金や地板を線刻によって表現した後、粘土を添付して綴じ革部分を表現したものであることが分かる。

186 ～ 190 は草摺を表現した部分の破片である。186 は短甲と連接する部位であるが、短甲と一体成形か、別作りかは判断できない。草摺は 177 と同様にヘラ状工具を用い、山形の刺突を二段に施すことによって表現されている。189 や 190 は草摺の端部が遺存している。

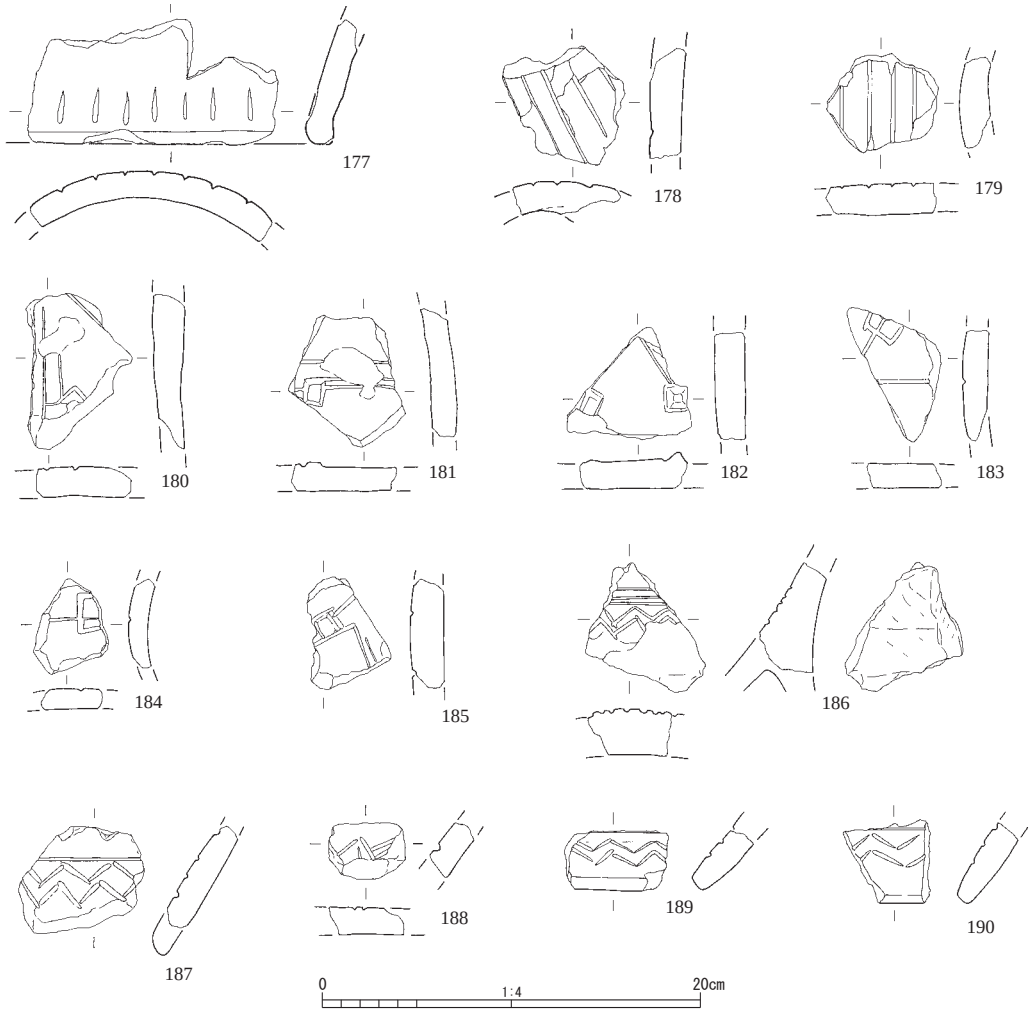


Fig.38　甲冑形埴輪実測図

（８）盾形埴輪　（Fig.39）

191 ～ 197 は盾形埴輪の破片である。また、198、199 は盾形埴輪や靫形埴輪などの板状部分を裏側から補強する突帯の破片である。盾形埴輪は破片の出土量が少なく、本来の樹立位置を推定しうるだけの情報を読み取ることが難しい。

191 ～ 193 は盾面の外区を区画する部位とみられる。外区の区画は、通有の綾杉文とは異なり、それぞれ方向を違えた斜線を充填する２本の区画帯が表現されている。区画帯の間は無文のもの（191､193）と梯子文が入れられるもの（192）がある。191 の裏面には、盾面を補強するための突帯がみられる。

194 ～ 197 は盾面の模様を表現した部位とみられる。194、195 は連続した斜線がみられる破片で、盾面内区に相当する可能性がある。196、197 は連続する平行線によって三角文などが表された破片である。

198、199 は形象埴輪の裏面を補強する突帯である。盾形埴輪か、後述する靫形埴輪に付随するものと捉えられる。198 は幅 2.0㎝を超える太めの突帯であり､大きく外側に広がる板状部位がある盾形埴輪の補強突帯の可能性が高い。これに対して､199 は小型であり、使用される部位が異なるとみられる。

Fig.39　盾形埴輪詳細

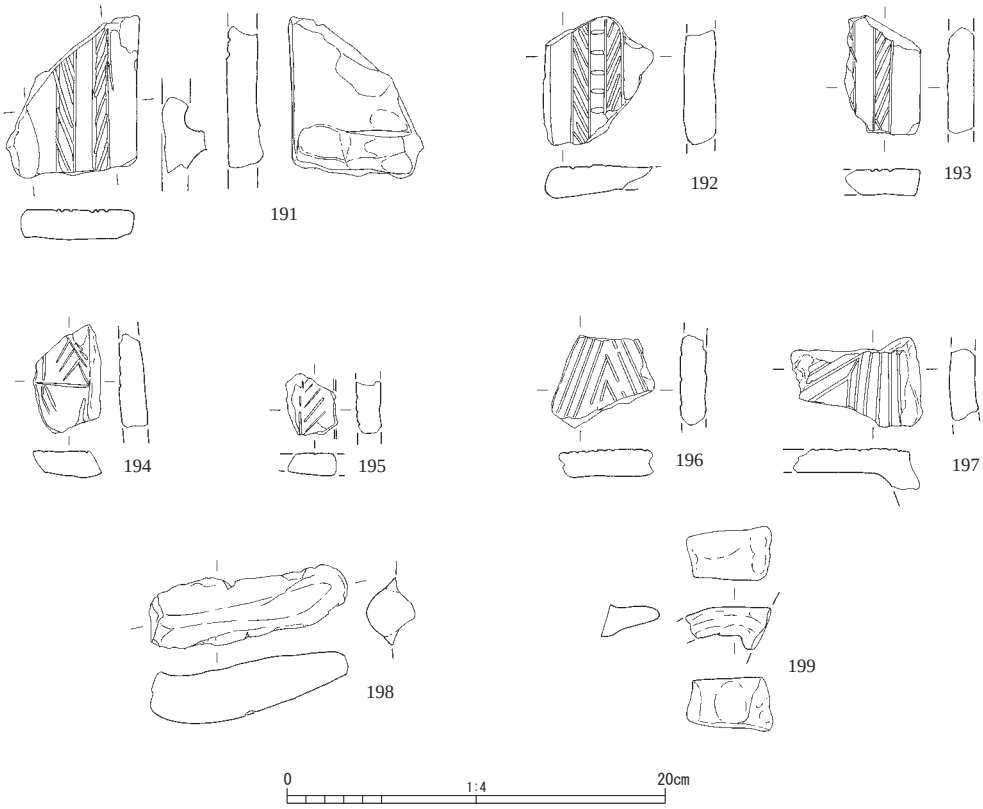


Fig.40　盾形埴輪実測図

（９）靫形埴輪　（Fig.41）

200 ～ 210 は靫形埴輪もしくはその可能性が高い破片である。飾り板の端部（200）、飾り板の鰭状部分もしくはその可能性がある破片（201 ～ 206）、矢筒部もしくはその可能性が考えられる破片（207 ～ 210）が認められる。いずれの破片も表面には直弧文が表現されており、相互に関連性が高いと考えられる。直弧文がみられる 200 ～ 210 の破片は、家形埴輪や甲冑形埴輪の破片とは異なり、2011 年出土資料が多い。形象埴輪の樹立位置の違いが反映されている可能性が考えられる。

200 は靫形埴輪の飾り板端部の破片と考えられる。端部を 2 本の平行線で縁取った中に同じく並行する 2 本線によって表現する簡略化が進んだ直弧文が入れられている。201 ～ 206 は飾り板の鰭状部分もしくはその可能性がある破片である。205 や 206 は端部に施された 2 本の平行線の縁取りがみられ、200 と意匠が共通する。203 は遺存部位が比較的大きいもので、剥離した痕跡から、本体部分から左右に拡張した鰭状の部位であることが分かる。206 の裏面には補強の突帯がみられる。

207 ～ 210 は矢筒部もしくはその可能性が考えられる破片である。いずれも箱状の部位を構成するものであるが、正確な部位を特定するには至らない。208 は正面のみでなく側面にも直弧文が入れられている。

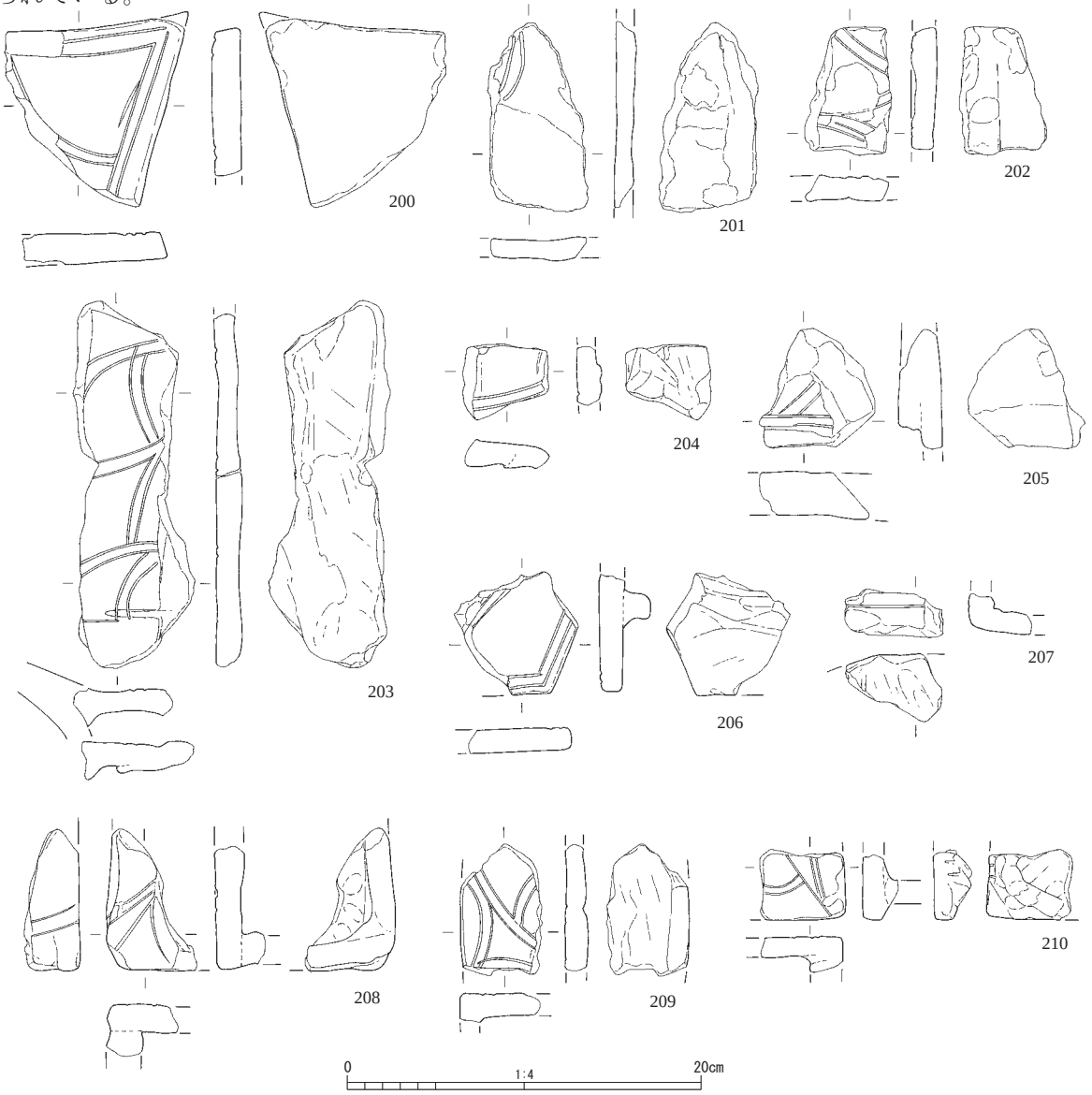


Fig.41　靫形埴輪実測図

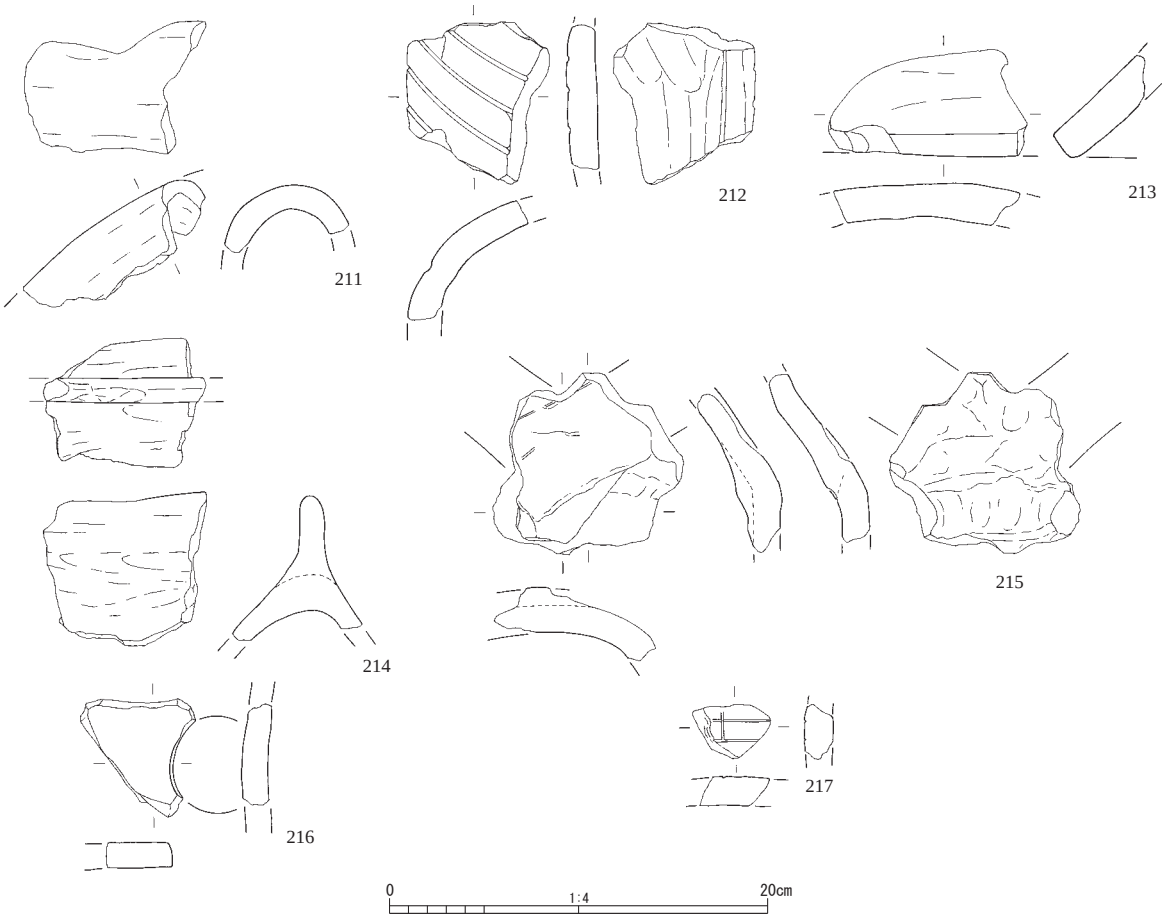


Fig.42　その他の形象埴輪実測図

（10）その他の形象埴輪　（Fig.42）

211 ～ 213 は鳥形埴輪もしくはその可能性が高いと考えられる破片である。211 は筒状の部位で鳥形埴輪の頸にあたると考えられる。212 は平行する線刻がみられる破片である。甲冑形埴輪の肩甲の可能性も考慮したが、全体的な形状と平行線の方向が整合的に理解できないことから、鳥形埴輪の羽を表現したものと捉えた。213 についても確定的でないが形状的な特徴から鳥形埴輪の翼にあたる可能性がある。

214 ～ 217 は種類や部位が不明な形象埴輪である。214 は鰭状の突出がみられる破片である。上下や表裏が判然とせず、種類を特定することが難しい。215 は外反する部位にあたる破片で、交差する２本の帯状部分が表現されている。鳥形埴輪の尾の可能性があるが、確定的でない。216 は円形の透孔がみられる板状破片である。217 は表面に線刻がみられるが、詳細は不明瞭である。

（11）かわらけ　（Fig.43）

218 ～ 220 は土師質の小皿（かわらけ）である。218 と 220 は墳頂部から、219 は墳丘斜面 H 20 ～ H 21 付近から出土した。いずれも非ロクロ成形品であり、指頭圧痕が明瞭に残る。218、219 は直径 8 ～ 9㎝ ほどの小型品である。製作技法と寸法から判断して、これらのかわらけは近世以降のものと捉えられる。調査では、墳頂中央部の状況が確認できなかったが、破壊された部分に祠などの小施設が存在した可能性が考えられるだろう。

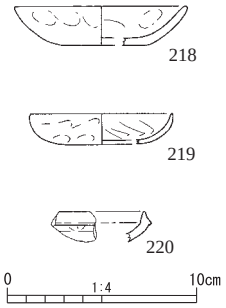


Fig.43　かわらけ実測図

Tab.2　出土埴輪観察表（1）

Fig	番号	取上番号	出土位置・遺構・層位	細別	群別	残存	反転	口径	底径	色調	ハケメ	備　考
22	1	69･95～98･121	【H18】	円筒	I	60		28.2	19.0	にぶい橙	7-9	
22	2	72･112･113	【H20】	円筒	I	30		30.0	18.0	にぶい橙	7-8	第2段:B種ヨコハケ
23	3	33･47	T2南拡張区 H5-H7間、H5-H6間上段斜面	円筒	I	5	反	35.0		にぶい橙	8	第3段:B種ヨコハケ
23	4	75	H20周辺	円筒	I	5	反	34.0		にぶい橙		
23	5	33･34･38･47･50	H5-H7間 、H15-H17間、2T南拡張区	円筒	I	10	反	30.0		にぶい橙	7	
23	6	9	T1-T2間	円筒	I	5	反	29.6		にぶい橙		
23	7	3･5	T2南拡張区、T4表土	円筒	I	10	反	27.0		浅黄橙		
23	8	10	T1-4 間	円筒	I	5	反	26.0		にぶい橙		
23	9	83	H20-H21間下段斜面 葺石直上	円筒	I	5	反	26.0		にぶい橙	6	
23	10	3	T2　南拡張区	円筒	I	5	反	26.0		浅黄橙		器壁厚め
23	11	83	H20-H21間下段斜面 葺石直上	円筒	I	5	反	25.0		浅黄橙	7	
23	12	9	T1-T2間	円筒	I	5	反	25.0		にぶい橙		
23	13	3	T2	円筒	I	5				にぶい橙		
23	14	3	T2	円筒	I	5				浅黄橙		
23	15	103	H16周辺	円筒	I	5				浅黄橙		
23	16	22	T1拡張区 上段	円筒	I	5				にぶい橙		
23	17	72	H18-H20間 斜面	円筒	I	5				にぶい橙		
23	18	49	T1南拡張区 北半	円筒	I	5				にぶい橙		
23	19	49	T1南拡張区 北半	円筒	I	5				にぶい橙		
23	20	21	T1-T4 間　斜面	円筒	I	5				にぶい橙		
23	21	18	T4南	円筒	I	5				にぶい橙		
23	22	4	T2北拡張区 表土	円筒	I	5				浅黄橙		
23	23	9	T1-T2間	円筒	I	5				にぶい橙		
23	24	3	T2 南拡張区	円筒	I	5				にぶい橙		
23	25	50	T2上段 葺石直上	円筒	I	5				にぶい橙		
23	26	50	T2上段 葺石直上	円筒	I	5				にぶい橙		
23	27	21	T1-T4 間 斜面	円筒	I	5				にぶい橙		
23	28	3	T2南拡張区	円筒	I	10	反	28.0		浅黄橙	8	
23	29	5	T4表土	円筒	I	10	反	24.8		橙	8-9	第3段：Bb種ヨコハケ
23	30	37	H14周辺 T3東拡張区	円筒	I	5				にぶい橙		
23	31	61	H10-H11間下段斜面	円筒	I	5				浅黄橙		
23	32	9	T1-T2間	円筒	I	5				にぶい橙		
23	33	29	T1西拡張区 上段 葺石直上	円筒	I	5				にぶい橙		
24	34	72・82	H18-H20斜面、H20-H21下段斜面 上層	円筒	I	10	反			にぶい橙	2段: 6･ 3段: 7	
24	35		1975年出土資料	円筒	I	5	反			にぶい橙	12	外面赤彩
24	36	79	H16-H18間斜面	円筒	I	5	反			にぶい橙	2段: 8･ 3段: 12	2段：B種ヨコハケ
24	37	71・72	H17-H20間 斜面、H18-H20間 斜面	円筒	I	10	反			浅黄橙	3段：8	3段：B種ヨコハケ
24	38		1975年出土資料	円筒	I	5	反			にぶい黄橙	7	
24	39	82	H20-H21間 下段斜面 上層	円筒	I	5	反			にぶい橙	8	
24	40	80	H18-H20間 斜面	円筒	I	5	反			にぶい橙	9	
24	41		1975年出土資料	円筒	I	5	反			にぶい橙	8	
24	42		1975年出土資料	円筒	I	5	反			にぶい黄橙	6-7	
24	43	67・104	H16 周辺	円筒	I	5	反			浅黄橙	7-8	
24	44	83	H20-21間 下段斜面 葺石直上	円筒	I	5	反			にぶい橙	8か	
24	45		1975年出土資料	円筒	I	5	反			にぶい黄橙	6-7	
24	46	22・39	T1西拡張区 上段 、T2南拡張区 H5周辺	円筒	I	10	反			にぶい橙	2段:7-8･3段:12	
25	47	23・50・58	T1西拡張区下段、T2上段 葺石直上、H1-H5間	円筒	I	10	反			にぶい橙		2段：B種ヨコハケ
25	48	10	T1-T4 間	円筒	I	5	反			にぶい橙	11	方形の透孔
25	49		1975年出土資料	円筒	I	5	反			にぶい橙		
25	50		1975年出土資料	円筒	I	5	反			にぶい褐	7	Bb種ヨコハケ
25	51		1975年出土資料	円筒	I	5	反			にぶい褐	8	B種ヨコハケ
25	52	23	T1西拡張区 下段	円筒	I	5				にぶい褐	9	
25	53	78	H20 周辺	円筒	I	5				にぶい橙	8	Bb種ヨコハケ
25	54	67・103・104	【H16】	円筒	I	30			19.0	にぶい橙	10	
25	55	40・109	【H13】	円筒	I	30	一部反		19.0	にぶい橙	8	
25	56	100	【H2】	円筒	I	20	反		18.2	黄橙		
25	57	45・51・105	【H3】	円筒	II	20			18.0	にぶい橙		
26	58	3・7・9・16	T2南拡張区、T1表土、T1-2間	円筒	II	20		24.6		にぶい橙	6-7	
26	59	6・10・17・23	T4北 T1南拡張区、T 1 -T4間、T1西拡張区 下段	円筒	II	10	反	24.0		にぶい橙	9	
26	60	2・3・4	T2南北拡張区 表土	円筒	II	5	反	26.0		にぶい黄橙		
26	61		1975年出土資料	円筒	II	5	反	25.9		にぶい橙	10	
26	62	13	T1-T2間	円筒	II	5	反	28.0		にぶい橙	8	
26	63	9・20	T1-T2間	円筒	II	5	反	28.2		浅黄橙	8	
26	64	6・13	T4北 T1南拡張区 表土、T1-2間	円筒	II	5	反	25.0		橙	8-9	
26	65	4	T2 北拡張区 表土	円筒	II	10	反	25.0		浅黄橙	6-7	
26	66		1975年出土資料	円筒	II	5	反	25.0		にぶい橙		
26	67	65	北東ｺｰﾅｰ 基底部	円筒	II	5	反	23.8		浅黄橙	7	
26	68	39	T2南拡張区 H5周辺	円筒	II	5				にぶい橙		
26	69	3	T2南拡張区	円筒	II	5				黄橙		厚い器壁
26	70	18	T4南	円筒	II	5				にぶい橙		
26	71	3	T2南拡張区	円筒	II	5				浅黄橙		
26	72	50	T2上段 葺石直上	円筒	II	5				橙		
26	73	41	T2南拡張区 H7-H8間	円筒	II	5				にぶい橙		

Tab.3　出土埴輪観察表（2）

Fig	番号	取上番号	出土位置・遺構・層位	細別	群別	残存	反転	口径	底径	色調	ハケメ	備　考
26	74	5	T4表土	円筒	Ⅱ	5				浅黄橙		
27	75	9	T1-2間	円筒	Ⅱ	5	反			にぶい橙	7	
27	76	5	T4表土	円筒	Ⅱ	5	反			浅黄橙		
27	77		1975年出土資料	円筒	Ⅱ	5	反			にぶい橙	6	
27	78	33・46・101・102	【H7】	円筒	Ⅱ	40	一部反		16.5	にぶい黄橙	7	
27	79	35・107	【H6】	円筒	Ⅱ	20	反		13.8	にぶい橙		
28	80	20・61・108	【H9】	円筒	（Ⅰ/Ⅱ）	20			17.6	にぶい橙		
28	81	110	【H15】	円筒	（Ⅰ）	5	反		18.8	にぶい橙		
28	82	99	【H1】	円筒	（Ⅱ）	20			16.7	黄橙		
28	83	106	【H4】	円筒	（Ⅱ）	20			16.0	にぶい橙		
28	84	72	H18-H20間 斜面	円筒	（Ⅰ/Ⅱ）	5	反		23.5	にぶい橙		
28	85		1975年出土資料	円筒	（Ⅰ/Ⅱ）	5	反		20.0	浅黄橙		
28	86	71	H17-H20間 斜面	円筒	（Ⅱ）	5				にぶい橙		
28	87	50	T1南拡張区 葺石直上	円筒	（Ⅰ）	5				にぶい橙		
28	88	3・4	T2南拡張区、T2北拡張区 表土	円筒	（Ⅰ）	5				浅黄橙		
29	89	57	H1周辺	張付	Ⅰ	5	反	30.7		にぶい橙		
29	90	82	H20-H21間下段斜面 上層	張付	Ⅰ	5	反	30.0		にぶい橙		
29	91	27	T2北西拡張区	張付	Ⅰ	5	反	30.0		にぶい橙	8か	
29	92	9	T1-T2間	張付	Ⅰ	5	反	29.4		にぶい橙	7	
29	93	50	T2上段　葺石直上	張付	Ⅰ	5	反	29.4		にぶい橙		
29	94	73	H18-H20間 斜面	張付	Ⅰ	5	反	28.4		浅黄橙	8	
29	95	16	T1-T2間	張付	Ⅰ	5	反	28.0		にぶい橙	8	
29	96		1975年出土資料	張付	Ⅰ	5	反			にぶい橙		
29	97		1975年出土資料	張付	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	98	72	H18-H20間 斜面	朝顔形	Ⅰ	5	反	40.0		にぶい橙	7	
30	99		1975年出土資料	朝顔形	Ⅰ	5	反	39.7		にぶい橙	7	
30	100	72	H18-H20間 斜面	朝顔形	Ⅰ	5	反	36.0		にぶい橙	7	
30	101	70	H16-H18間 下段斜面	朝顔形	Ⅰ	5	反	35.0		浅黄橙		
30	102	33	T2南拡張区 H5-H7間	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	103	17	T1-T4間拡張区	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	104	24	T1南 上段拡張区	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	105	23	T1西拡張区 下段	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	106	22	T1西拡張区 上段	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	107		1975年出土資料	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	108	73	H18-H20間 北側斜面	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	109	3	T2南拡張区	朝顔形	Ⅰ	5				浅黄橙		
30	110	29	T1西拡張区 上段 葺石直上	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	111	122	H18-H19間上段 葺石直上	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	112	1	T1	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	113	37	T3東拡張区 H14周辺	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	114	52	T1南拡張区 H2周辺	朝顔形	Ⅰ	5				橙		
30	115	10	T1-T4間	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	116		1975年出土資料	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	117		1975年出土資料	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙		
30	118	74	H18-H2間　斜面	朝顔形	Ⅰ	5	反			にぶい橙	7	
30	119	59	H5～H7間	朝顔形	Ⅰ	5	反			にぶい橙	7	
30	120	83	H20-H21間下段斜面 葺石直上	朝顔形	Ⅰ	5	反			にぶい橙		
30	121	82	H20-H21間下段斜面 上層	朝顔形	（Ⅱ）	5				にぶい橙		変則的な場所に透孔か
30	122	85	H18-H20間下段斜面 葺石直上	朝顔形	Ⅰ	5	反			明黄褐	7	
30	123	83	H20-H21間下段斜面 葺石直上	朝顔形	Ⅰ	5	反			にぶい橙	6	
30	124	6	1975年出土資料	朝顔形	Ⅰ	5				にぶい橙	7	
32	125	70・71	H16-H18間 下段斜面、H17-H20間 斜面	家形		5				にぶい橙		
32	126		月岡資料	家形		5				にぶい黄橙		
32	127		月岡資料	家形		5				にぶい黄橙		
32	128	27	T2北西拡張区	家形		5				にぶい橙		
32	129		1975年出土資料	家形		5				にぶい橙		
32	130		1975年出土資料	家形		5				にぶい橙		
32	131		1975年出土資料	家形		5				にぶい橙		
32	132		1975年出土資料	家形		5				橙		
32	133		1975年出土資料	家形		5				にぶい黄橙		
33	134		1975年出土資料	家形		5				浅黄橙		
33	135		1975年出土資料	家形		5				にぶい黄橙		
33	136		1975年出土資料	家形		5				にぶい橙		
33	137	9	T1-T2間	家形		5				浅黄橙		
33	138		1975年出土資料	家形		5				黄橙		
33	139	3	T2南拡張区	家形		5				にぶい黄橙		裾周り突帯
33	140	62	H16 上面	家形		5				にぶい黄橙		裾周り突帯
33	141	2	T2	家形		5				にぶい橙		
33	142	9	T1-T2間	家形		5				にぶい橙		
36	143	20・27	T1-2間、T2北西拡張部	蓋形		5				にぶい橙		
36	144	74	H18-H20間 斜面	蓋形		5				にぶい橙		
36	145		1975年出土資料	蓋形		5				にぶい橙		
36	146	82	H20-H21間 下段斜面 上層	蓋形		5				にぶい橙		赤彩あり
36	147		1975年出土資料	蓋形		5				にぶい橙		
36	148		1975年出土資料	蓋形		5				にぶい橙		

Tab.4　出土埴輪観察表（3）

Fig	番号	取上番号	出土位置・遺構・層位	細別	群別	残存	反転	口径	底径	色調	ハケメ	備　考
36	149	9	T1-T2間	蓋形		5				にぶい橙		
36	150	71	H17-20間 斜面	蓋形		5				にぶい橙		
36	151	20	T1-T2間	蓋形		5				にぶい橙		
36	152	80	H18-H20間 斜面	蓋形		5				にぶい橙		
36	153		1975年出土資料	蓋形		5				にぶい橙		焼成良好
36	154	85	H18-H20間下段斜面 葺石直上	蓋形		5				にぶい橙		
36	155	73	H18-H20間 斜面	蓋形		5				にぶい橙		
36	156		1975年出土資料	蓋形		5				にぶい橙		
36	157	71	H17-H20間 斜面	蓋形		5				にぶい橙		
36	158	5	T4表土	蓋形		5				にぶい橙		
37	159	47	H5-H6間 上段斜面	蓋形		5				にぶい橙		
37	160	50	T2上段 葺石直上	蓋形		5				にぶい橙		
37	161		1975年出土資料	蓋形		5				にぶい橙		
37	162		1975年出土資料	蓋形		5				にぶい橙		
37	163	84	H20周辺	蓋形		5				にぶい橙		
37	164		1975年出土資料	蓋形		5				にぶい橙		
37	165		1975年出土資料	蓋形		5				にぶい橙		
37	166		1975年出土資料	蓋形		5	反			浅黄橙		軸径4.8
37	167	28	T2西拡張区 上段	蓋形		5	反			浅黄橙		
37	168		1975年出土資料	蓋形		5				橙		
37	169	83	H20-H21間 下段斜面 葺石直上	蓋形		5				浅黄橙		
37	170	74	H18-H20間 斜面	蓋形		5	反			橙		
37	171	82	H20-H21間 下段斜面 上層	蓋形		5				橙		
37	172	9	T1-T2間	蓋形		5				にぶい橙		
37	173	71	H17-H20間 斜面	蓋形		5				浅黄橙		
37	174	9	T1-T2間	蓋形		5				にぶい橙		線刻有
37	175	67・68・82	H16、H17、H20-H21間 下段斜面 上層	蓋形		5	反			にぶい橙		線刻6方向か
37	176	92	墳丘断ち割り（南北）	蓋形		5				浅黄橙		
38	177		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい黄橙		鍔部
38	178		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい黄橙		
38	179	78	H20 周辺	甲冑形		5				にぶい黄橙		
38	180		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい橙		
38	181		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい黄橙		
38	182		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい橙		
38	183		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい黄橙		
38	184	80	H18-H20間 斜面	甲冑形		5				にぶい黄橙		
38	185		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい橙		
38	186		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい黄橙		
38	187		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい黄橙		
38	188		1975年出土資料	甲冑形		5				橙		
38	189		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい橙		
38	190		1975年出土資料	甲冑形		5				にぶい黄橙		
40	191		1975年出土資料	盾形		5				にぶい橙		
40	192	71	H17-H20間 斜面	盾形		5				にぶい黄橙		
40	193		1975年出土資料	盾形		5				橙		
40	194	82	H20 -H21間 下段斜面 上層	盾形		5				にぶい黄橙		
40	195	82	H20 -H22間 下段斜面 上層	盾形		5				にぶい黄橙		
40	196	7	1975年出土資料	盾形		5				にぶい橙		
40	197		1975年出土資料	盾形		5				にぶい橙		
40	198		1975年出土資料	盾形		5				にぶい黄橙		補強帯
40	199	33	H5-H7間 T2南拡張区	盾形		5				黄橙		
41	200	71	H17-H20間 斜面	靫形		5				浅黄橙		
41	201	1	T1	靫形		5				黄橙		
41	202	74	H18-H20間 斜面	靫形		5				にぶい黄橙		
41	203	72・73	H18-H21間 斜面	靫形		5				浅黄橙		赤彩
41	204	71	H17-H20間 斜面	靫形		5				浅黄橙		
41	205	71	H17-H20間 斜面	靫形		5				黄橙		
41	206		1975年出土資料	靫形		5				浅黄橙		
41	207	68	H17周辺	靫形		5				浅黄橙		赤彩
41	208	16	T1-T2間	靫形		5				浅黄橙		
41	209	73	H18-20間 斜面	靫形		5				にぶい黄橙		
41	210	71	H17-20間 斜面	靫形		5				浅黄橙		赤彩
42	211		1975年出土資料	不明		5				にぶい橙		鳥の首か
42	212		1975年出土資料	不明		5				にぶい黄橙		鳥の翼か
42	213		1975年出土資料	不明		5				にぶい黄橙		鳥の翼か
42	214	118	H20-H21間下段葺石	不明		5				浅黄橙		
42	215		1975年出土資料	不明		5				にぶい黄橙		
42	216	16	T1-T2間	不明		5				黄橙		
42	217		1975年出土資料	不明		5				にぶい黄橙		

凡例

出土位置・遺構・層位の H は、出土円筒埴輪の名称を示す
【　】内は位置の確定したもの
「張付」:「張付突帯口縁」の略
ハケメ：幅 2cm 内のハケメの本数
残存率：% 表示、10% 単位の切上げ、「5%」は極小破片
反転：「反」は反転して図化したもの
大きさの単位は cm
色調：『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

３　副葬品

（１）　長方板革綴短甲　（Fig.45 ～ 49）

概　要　狐塚古墳から採集された甲冑は、月岡資料と細江町資料がある。両者の接合関係が認められたので、月岡資料の甲冑片についても狐塚古墳からの出土品と特定できる。月岡資料の採集年については必ずしも明確でないが、生前の月岡氏から聞き取りを行った向坂鋼二氏によると、月岡氏が活動した晩年、1960 年代頃のことと推定できる。

確認できる破片は長方板革綴短甲 1 領分に相当し、冑や頸甲・肩甲などの破片は全く確認できていない。狐塚古墳には短甲のみが副葬されていたものと推定できるだろう。短甲の破片は、月岡氏の採集後に砕片化が進み、部材の全体形状をうかがうことが困難であった。この短甲の整理作業については、狐塚古墳の発掘調査に先立ち 1995 年以降断続的に進めてきた。途中何度かの中断期を挟み、2011 年の発掘調査後において接合作業を本格化したところ、左右前胴の下端部を中心に相当数の破片が接合することが判明した。短甲は比較的良好な状態を保った状態で遺存していたことをうかがわせていよう。いっぽう、細江町資料においても僅かであるが短甲の破片（74 ～ 76）がみられるので、月岡氏による短甲の採集は徹底的でなく、一部は現地に残されていたことも分かる。以下、月岡資料（1 ～ 73）を中心に細江町資料（74 ～ 76）を加え、狐塚古墳から出土した短甲の詳細を報告する。

構　造　狐塚古墳から出土した短甲は、長方板革綴短甲であり、前胴、後胴ともに 7 段構成である。竪上板 2 枚、押付板 1 枚、上段地板 5 枚、上段帯金 3 枚、中段地板 7 枚（推定）、下段帯金 3 枚、下段地板 7 枚（推定）、裾板 3 枚（推定）、引合板 2 枚の構成と考えられ、推定で 33 枚の鉄板が用いられたものとみられる。地板の重なりは通例にならい後胴中央から順次、上重ねされている。

竪上板　1、2、3 は左前胴、9、10、11 は右前胴の竪上板である。部分的に覆輪が遺存する。引合板側の上下幅は不明確であるが、2 の幅から推定して、6㎝ほどと推定できる。

押付板　4 ～ 8 は後胴の押付板の破片である。4 は左脇、5 は左肩部、8 は右脇に相当し、6、7 は後胴中央部付近に相当すると想定できる。後胴中央部における上下幅は明確でないが、左肩部に相当する 5 の寸法から想定して 10㎝ほどであると考えられる。7 及び 8 の覆輪の遺存状態は良好で、その技法の詳細がうかがえる。

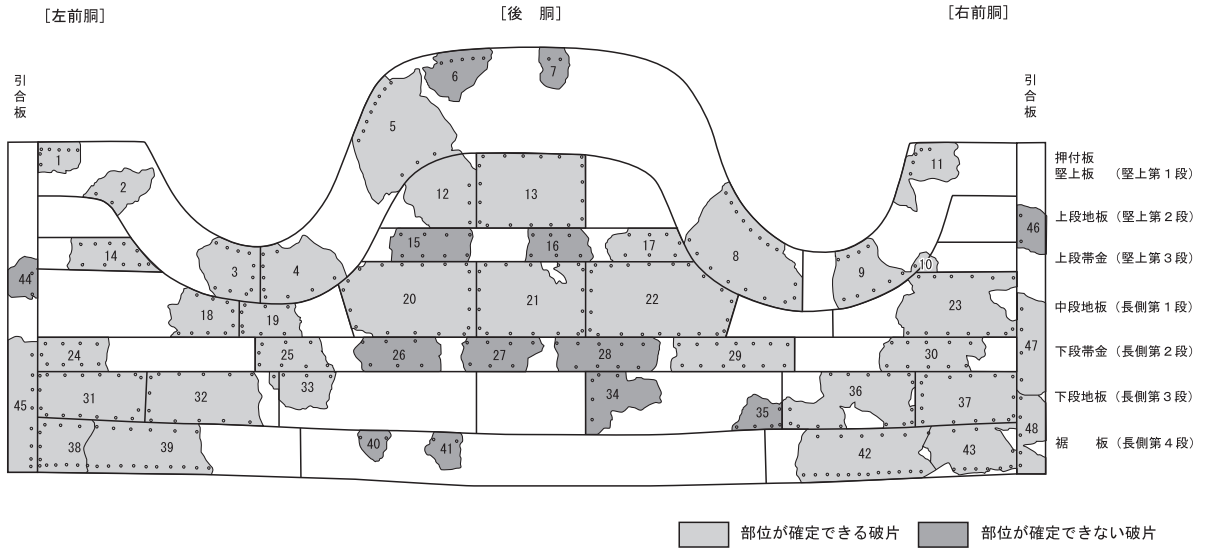


Fig.44　長方板革綴短甲展開模式図

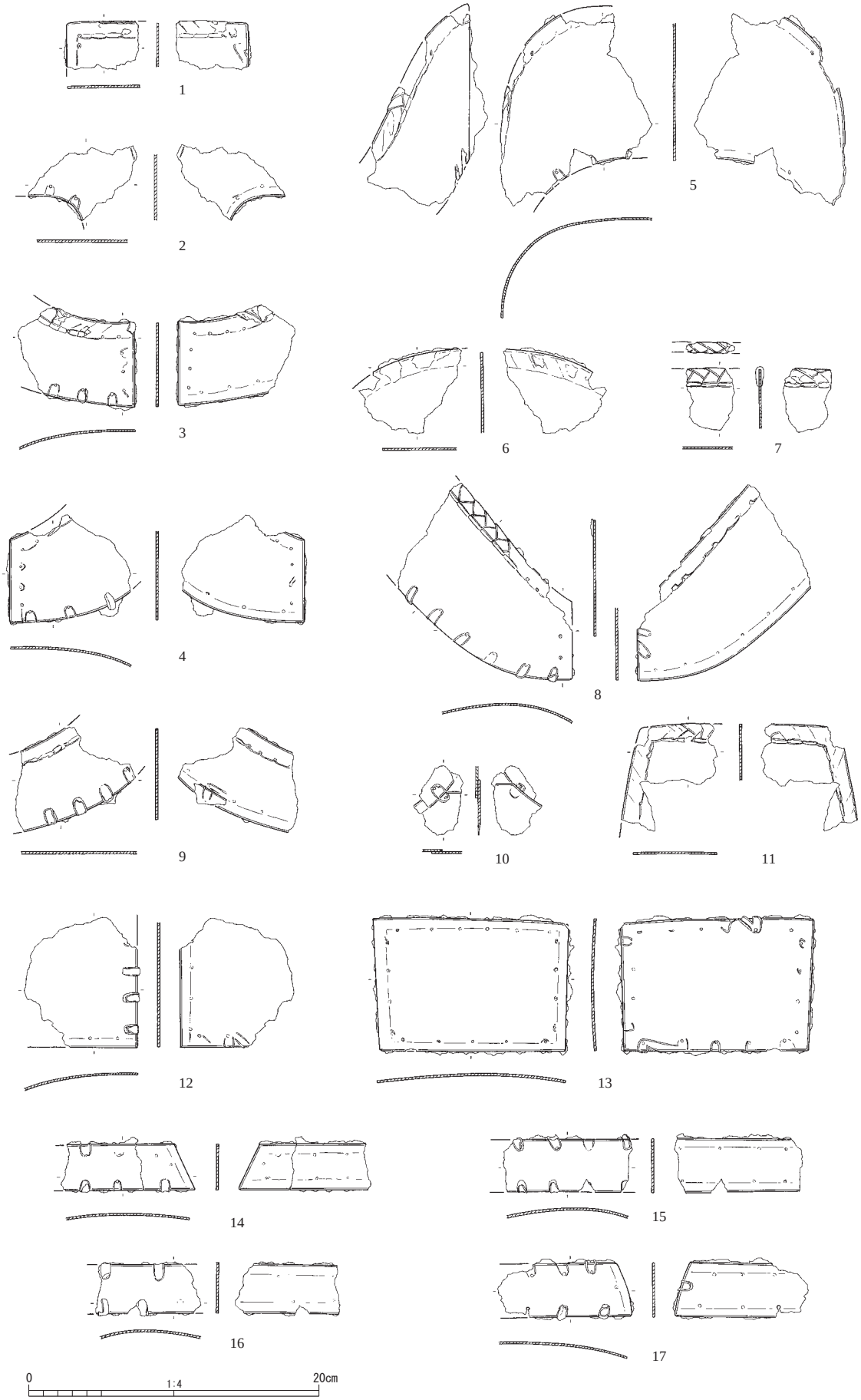


Fig.45　長方板革綴短甲実測図（1）

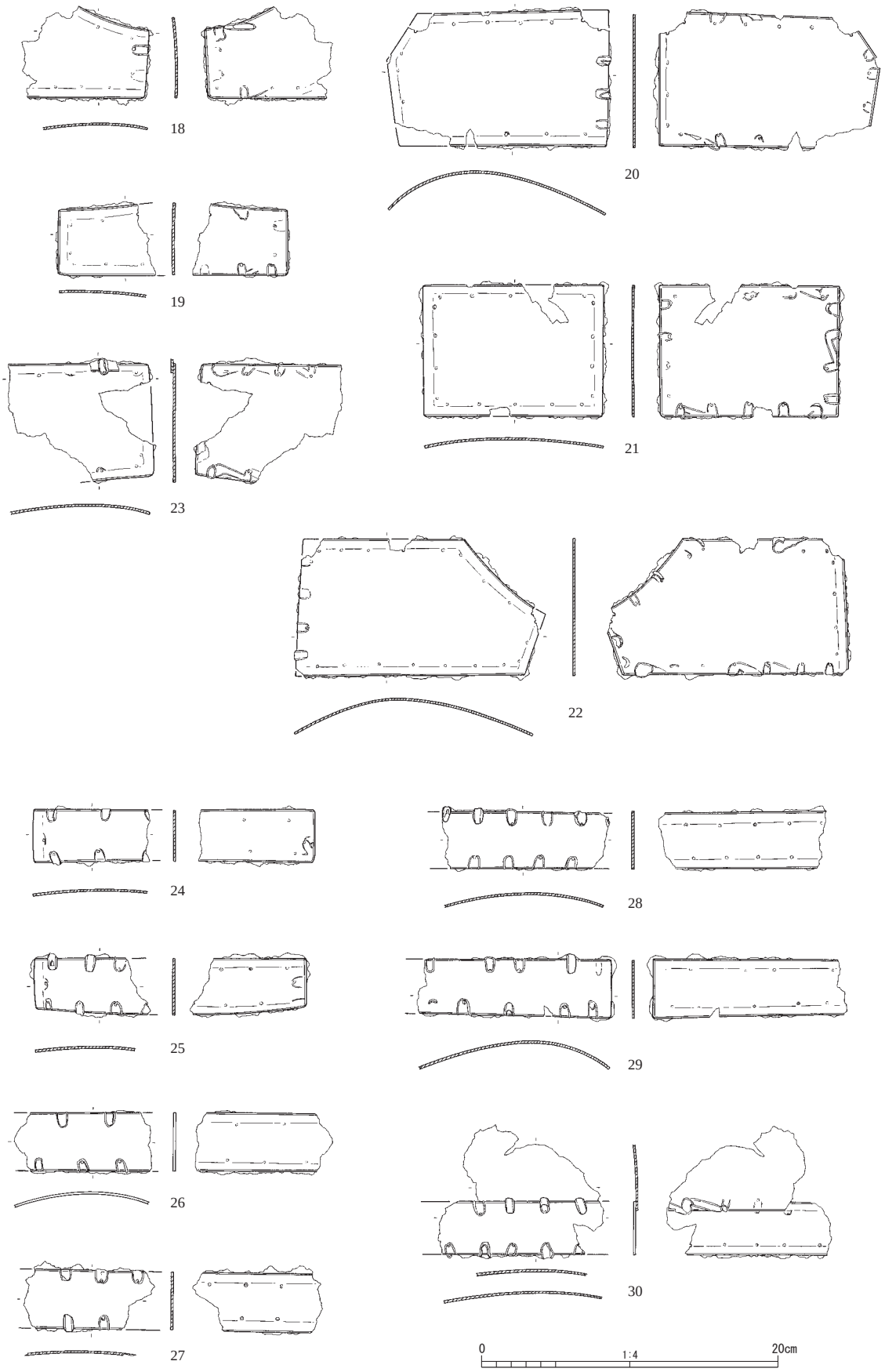


Fig.46　長方板革綴短甲実測図（2）

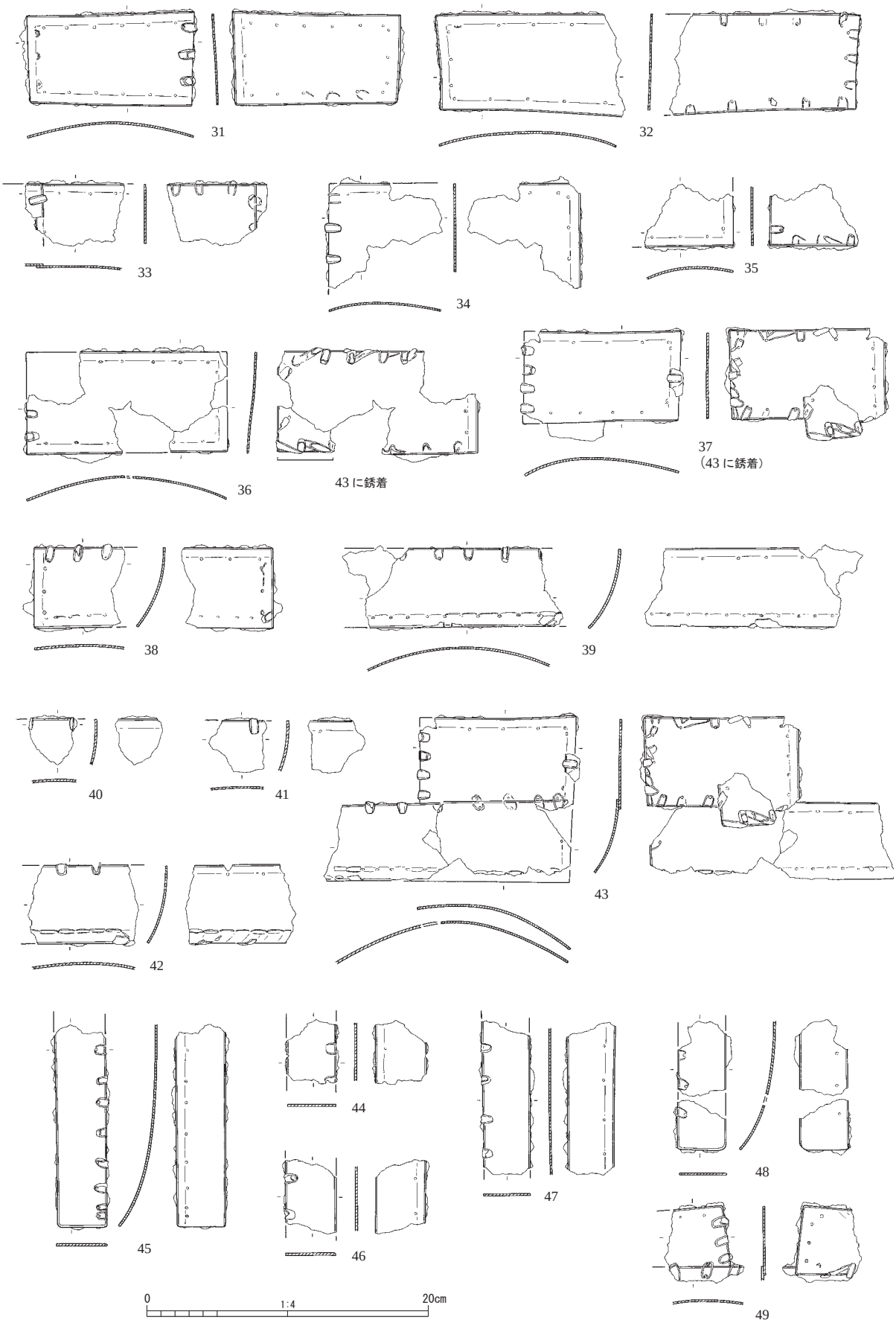


Fig.47　長方板革綴短甲実測図（3）

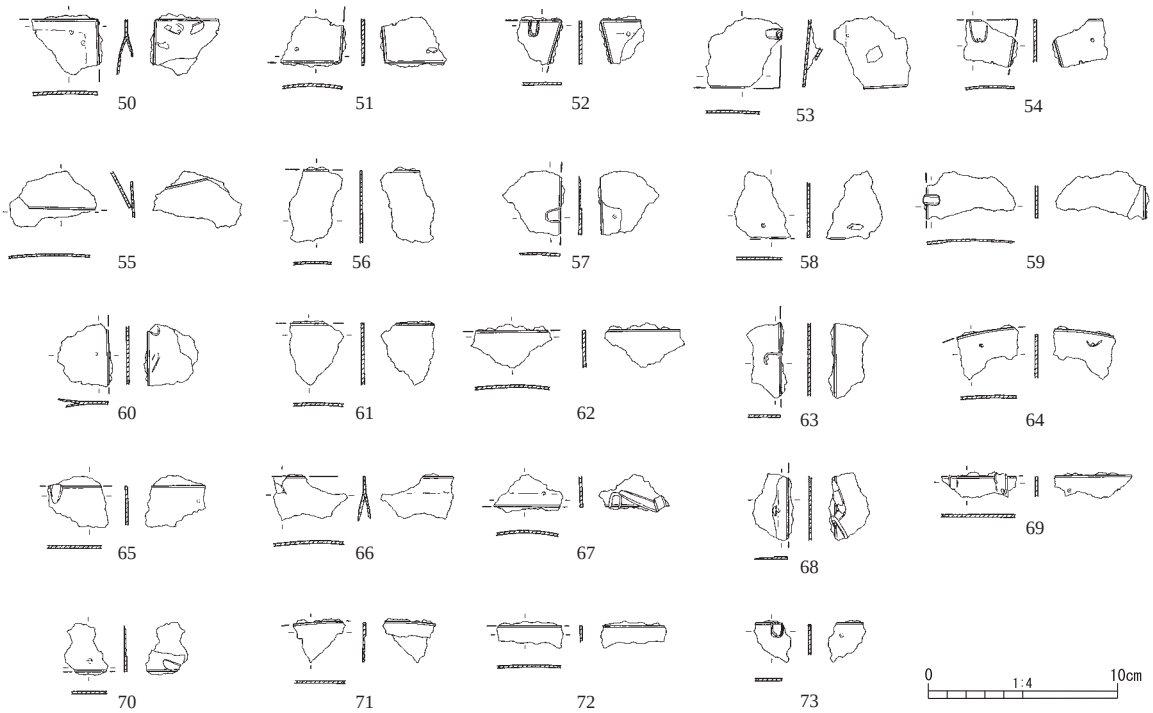


Fig.48　長方板革綴短甲実測図（4）

上段地板　12、13 は後胴の上段地板である。12 は左肩部、13 は中央の部材である。13 の大きさは、左右 13.2㎝、上下 9.3㎝ である。

上段帯金　14 は左前胴の上段帯金である。引合側が月岡資料、脇側が 1975 年出土資料にあたり、両者の接合関係が確認できる部位として重要である。17 は後胴右端の上段帯金である。14 の幅は 3.2㎝、15 ～ 17 の幅は 3.5 ～ 3.7㎝ 程であり、前胴と後胴で帯金幅が異なるとみられる。

中段地板　18 ～ 23 は中段地板である。18 と 19 は左脇部、20 ～ 22 は後胴中央、23 は右前胴に相当する。10 や 30 の地板破片も 23 と同一の部材と考えられる。両脇に相当する 20 と 22 を比べると、地板の形状が若干異なり、本例が必ずしも左右均等の地板配置ではないことがうかがえる。23 と 10、30 をみると、前胴の中段地板は 1 枚で構成されている蓋然性が高い。

下段帯金　24 ～ 30 は帯金の上下幅が 4.0㎝ と、14 ～ 17 と比べて大きいことから、上段帯金とは異なる下段帯金と考えられる。24 や 25 など端部と捉えられる破片が含まれる。

下段地板　31 ～ 37 は下段地板の破片である。31、32 は左前胴、36、37 は右前胴に相当し、それぞれ 2 枚の地板を配置していることが知られる。36 の右下角の破片は、隣り合う 37（現状は裾板 43 と一体になって遺存する）の内面に錆着している。前胴の地板がやや移動して錆着していることから判断すると、この短甲は立位で副葬され、経年変化によって前方に崩れ落ちた可能性が考えられる。31 や 37 にみる引合板寄りの上下幅は 6.5㎝、32 や 36 にみる脇部の上下幅は 7.0㎝ であり、前胴から脇部、後胴に向かって上下幅を増していることが分かる。

裾　板　38 ～ 43 は裾板の破片である。38、39 は左前胴、42、43 は右前胴の破片である。それぞれ接合関係が認められ、最も遺存状態がよい部分といえる。38、43 にみる引合板よりの上下幅は 5.8㎝、39、42 にみる脇部の上下幅も 5.8㎝ である。覆輪の痕跡が確認できるが、遺存状態が悪く、細

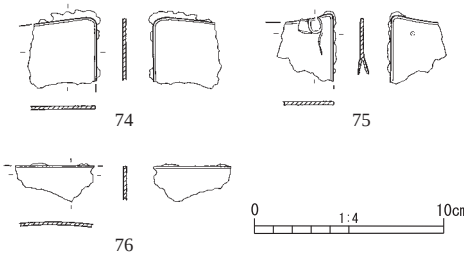


Fig.49　長方板革綴短甲実測図（5）

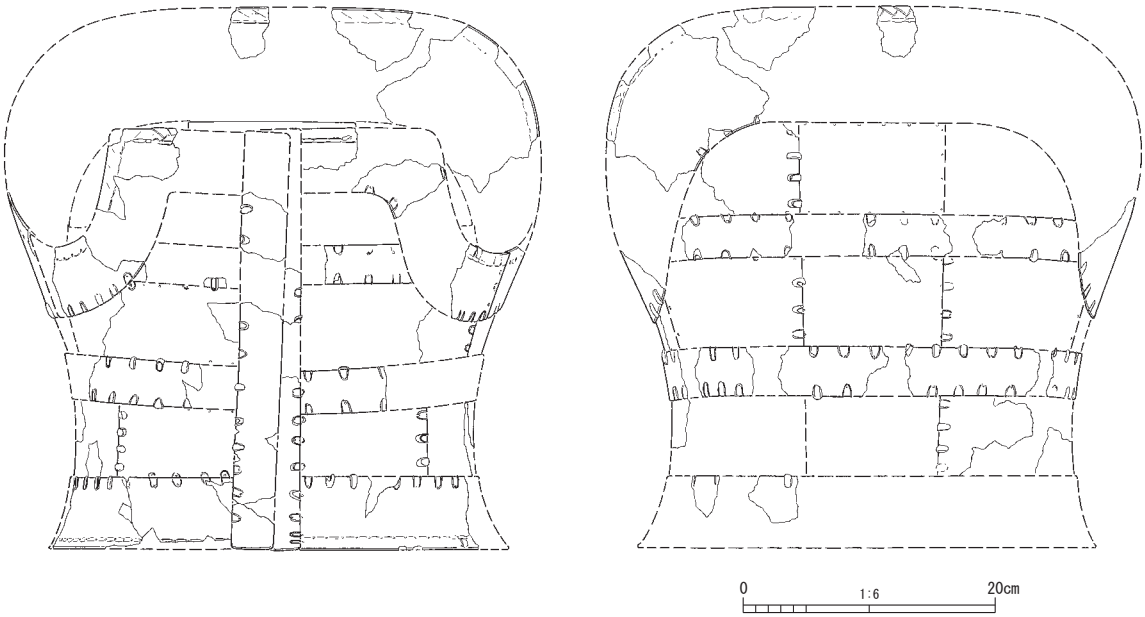


Fig.50　長方板革綴短甲立面合成図

かな技法をうかがうことができない。

引合板　44 ～ 48 は引合板の破片である。45 は左前胴、47、48 は右前胴に相当する。45 の幅は 3.5㎝、48 の幅は 3.4㎝ である。

部位不明の破片　49 は地板と帯金が銹着する破片である。地板の幅が 4.8㎝ と狭いことから脇を構成する部位とみられるが、現状では明確な候補となりうる箇所を示すことができない。脇部の分割が Fig.44 に示すものよりも細かい可能性を示唆する破片である。本例の中段地板枚数は 7 枚と想定したが、49 のような小分割の部材が介在するとすれば、左右の地板構成が非対称で、地板枚数も８枚であった可能性がある。

50 ～ 73 は月岡資料のうち、一辺以上の端辺が確認できる破片である。いずれも、砕片化が顕著であり、明確な部位を示すことが難しい。74 ～ 76 は細江町資料であり、こちらも一辺以上の端辺が確認できる資料を図化した。いずれも部位は不明確である。なお、細江町資料の甲冑片については月岡資料との接合検討を試みた。この結果、左前胴の上段帯金（14）において接合関係が認められたので、月岡資料の短甲片は狐塚古墳出土品であることが確定できている。

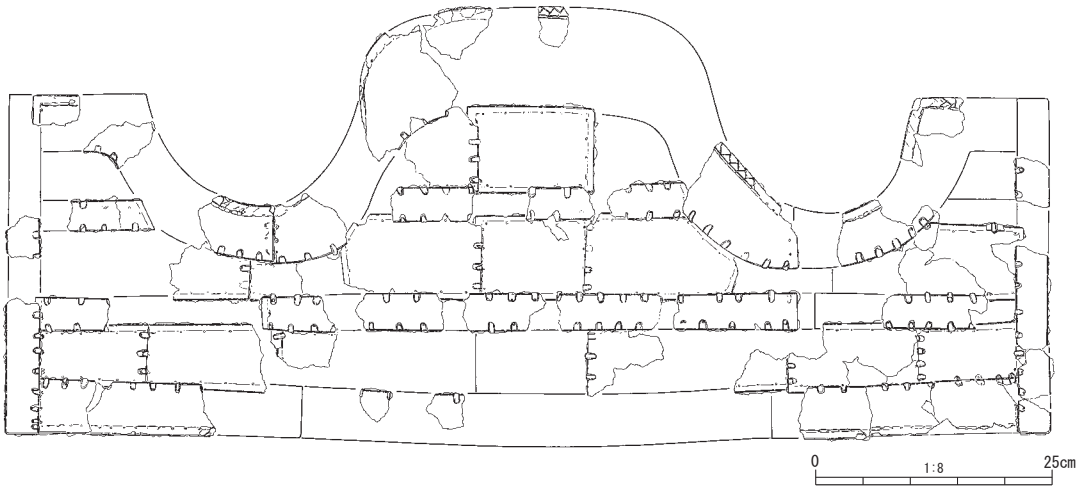


Fig.51　長方板革綴短甲展開図

覆輪技法　覆輪技法は押付板において明瞭にうかがえる。最も遺存状態がよい 7 をみると、表側に革紐が交差するように組み上げられており、内面には単斜方向の革紐が痕跡として残っている。内面の単斜方向は、端面を上にした際に右下がりである。縁取りには細めの革紐が用いられ、表裏ともに隣り合う小孔に交互に通している。

組み上げ工程　本例は内面における革紐の遺存状態が悪く、革紐の走行方向がほとんど判明しない。このため、組み上げ工程を明確に指し示すことが難しいが、36 や 37 の内面に残る革紐の痕跡から、通例にならい、地板どうしを先行して連結した後に各段を連結したものであることが分かる。

小　結　本例は前胴の上段地板を有することに加え、中段地板と下段地板の地板枚数が、それぞれ 7 枚である可能性が高く、編年的な位置づけが可能である。類例は、脇部の分割方法に細差があるが、兵庫県小野王塚古墳例、大分県岬古墳例があげられる。これらの事例は、阪口英毅氏の分類（阪口 1998）によるⅡ a 式に相当し、長方板革綴短甲の変遷の中では中段階に位置づけられる。小野王塚古墳のような鋲留技法導入後に築造された古墳にも副葬例が確認できることから、狐塚古墳の築造時期と本例の編年的位置づけと存続時期は矛盾なく理解できる。

（２）鉄鏃等・刀剣・砥石

鉄鏃等　（Fig.52）　細江町資料のなかに鉄鏃もしくはその可能性がある破片が 3 点分（うち２点は銹着）認められる。77 は鏃身部下端から茎に至る破片で、矢柄の痕跡がみられる。茎に近い部分は刃部ではないことから、装飾的な「山形突起」にあたると考えられる。山形突起をもつ形態的特徴から、77 は鳥舌鏃（鈴木 2003）である可能性が高いと判断できる。

78 は 2 点の破片が銹着している鉄器の破片である。遺存部分が少なく、細かな形状は不明瞭である。2 点とも軸状の部位をもつ短頸鏃の可能性が考えられるが、鑿や鉋などの工具の可能性もある。一方は断面が方形、もう一方は断面が半円形を呈する。

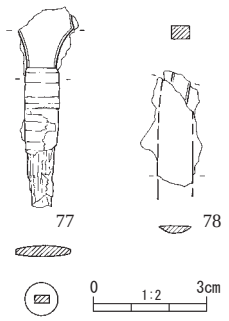


Fig.52　鉄鏃等実測図

77 が鳥舌鏃だとすれば、狐塚古墳の築造時期とも整合的に理解できる。副葬品組成として、狐塚古墳資料は標準的な存在であったことがうかがえる。

鉄　剣　（Fig.53-79 ～ 82）　月岡資料において短甲片の中に紛れていた 1 点（79）と細江町資料の中に 3 点（80 ～ 82）が知られる。79 ～ 81 は刃部、82 は茎にあたる。鉄剣はいずれも細片化しており、詳細な特徴は知りえない。79 は刃部幅が判明するもので、幅 2.7㎝ である。80、81 はいずれも正確な刃部幅を求めることができないが、遺存部分から判断して 79 よりも刃部幅が大きいと判断できる。82 は茎の破片である。幅 2.3㎝ ほどの板状の破片で方形を呈する茎の先端部にあたると考えられる。

鉄　刀　（Fig.53-83）　細江町資料に鉄刀の破片（83）がみられる。残存長は 31㎝ であるが、非常に脆く、本来の表面は全く残っていない。なお、83 とよく似た遺存状態を示す鉄刀が月岡資料中に認められる。これらの資料は、注記が確認できないことから、出土地を明確に示すことができない。しかし、月岡資料の他の刀剣類とは遺存状態が明らかに異なることに留意したい。これらの刀剣類も狐塚古墳出土品の可能性があるといえるだろう。

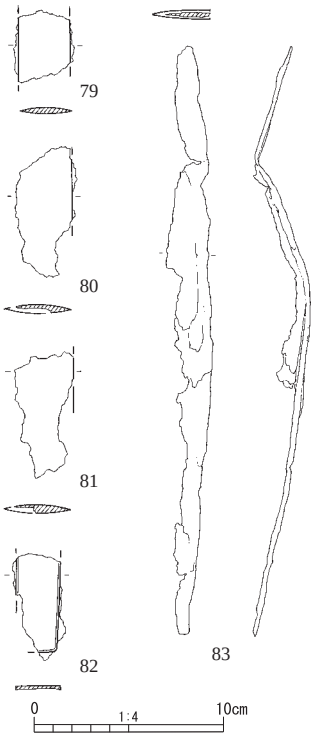


Fig.53　刀剣実測図

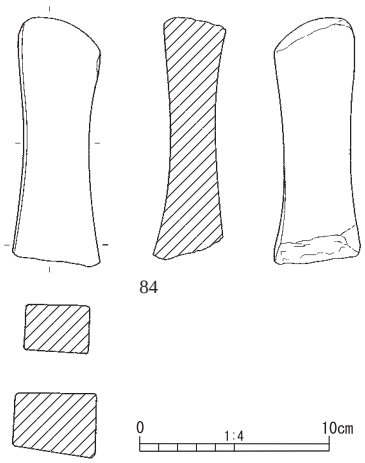


Fig.54　砥石実測図

砥　石（Fig.54）　細江町資料のなかに凝灰岩製の砥石が認められる。全長 6.6㎝、最大幅 2.3㎝、重量 34g であり、同形態の砥石としては小型の部類に属する。断面は方形を呈しており、長辺を構成する 4 面ともよく使い込まれ、緩やかに内側にむかって彎曲している。この面を研磨面と呼んでおく。小口にあたる端部は使用されていないが、ほぼ副葬時の形状を示しているとみられよう。研磨面には研ぎの痕跡としてしばしばみられる細かな条線が確認できない。仕上げなどの工程で用いられた砥石と考えられよう。

4 面に研磨面をもち、彎曲する形態まで使い込まれた砥石は、中期の甲冑出土古墳から頻繁に出土する。狐塚古墳の築造時期に近い類例として、大阪府鞍塚古墳、奈良県五条猫塚古墳、福岡県堤当正寺古墳、静岡県五ヶ山 B2 号墳などがあげられる。堤当正寺古墳例は全長 22.7㎝、五条猫塚古墳例は複数例があり、全長 22.0㎝ ～ 16.5㎝、五ヶ山 B2 号墳例は全長 15.0㎝、鞍塚古墳例は全長 14.1㎝ といずれも狐塚古墳例よりも大きい。小型の砥石は提げ砥として、小孔が穿たれたものが知られる。提げ砥の場合は、本例のような角柱状の形状ではなく、扁平な形状の素材を用いることが多い。

砥石の出土が確認できることから、狐塚古墳には工具が副葬されていた可能性が考えられる。2 点の鉄器が銹着する 78 は鉄鏃の可能性があるが、工具と捉えても矛盾はない。

（３）副葬品の編年的位置

狐塚古墳から出土した副葬品群について、筆者による古墳様式編年（鈴木 2014）との関係を整理しておく。長方板革綴短甲は、前胴の上段に帯金を有すること、中段と下段の地板枚数がそれぞれ７枚（[7、7] の地板配置とする）であることが特徴といえる。地板配置は阪口英毅の分類（阪口 1998）によるⅡ a 式に相当する。長方板革綴短甲の前胴上段に帯金をもつ特徴は、古い時期から認められるものの、出現頻度が増すのは比較的新しい段階になってからである（阪口 1998）。[7、7] の地板配置の特徴とあわせ、長方板革綴短甲の製作段階のなかでは概ね中段階に相当すると考えられるだろう。類似する特徴をもつ長方板革綴短甲の副葬時期は大阪府豊中大塚古墳といった中期前葉（中２期）から、兵庫県小野王塚古墳のように中期中葉新段階（中４期）にかけてであり、比較的長期間におよぶ。

鉄鏃は鳥舌鏃と推定できる資料（77）が知られる。鳥舌鏃の存続時期は中１期から中４期までに中心があり、甲冑の編年的位置とも矛盾はない。明確な位置づけが困難な 78 については、確定的な評価を下すことが難しい。78 は比較的細身のつくりであり、仮に鉄鏃だと考えると、その編年的位置は中３期以降に位置づけるのが妥当であろう。

刀剣については、砕片化が顕著であり、個体の特徴から編年的位置を導き出すことが難しい。ただし、鉄刀および鉄剣の双方が認められることは注目してよい。刀剣の比率にかんしては、中期を通じて剣（槍先を含む）から刀を中心とする組成に変化することが知られている。両者が認められる狐塚古墳の組成は、中期中葉（中３期～中４期）を中心としたものであることを示している。

以上の特徴から総合的に判断して、狐塚古墳における副葬品の編年的位置は、中期前葉（中２期）から中期中葉新段階（中４期）にあると結論づけられる。副葬品における評価に加え、後述するように埴輪の検討をふまえれば、狐塚古墳の築造時期はさらに絞り込むことができる。

第４章　後　論

１　狐塚古墳の埴輪と製作集団

（１）はじめに

2011 年に実施した発掘調査と月岡資料、細江町資料、1975 年出土資料の検討によって、狐塚古墳にかかわる情報が明確になった。この調査成果を受けて、まずは出土品の主体を占める埴輪に注目し、その編年的位置と想定できる埴輪生産体制について検討を加える。

（２）狐塚古墳埴輪群の編年的位置

狐塚古墳の円筒埴輪は大きく、2 次調整にヨコハケを施すⅠ群と、2 次調整にタテハケのみを施すⅡ群に分けられる。両者は調整技法のみならず、口縁や突帯の形状、透孔の特長、器壁の厚さなどの違いも看取でき、それぞれ製作主体が異なると考えられる。

狐塚古墳に樹立された埴輪の時期と特徴をうかがうために、近畿地方中枢部の埴輪との直接的な比較が可能なⅠ群の円筒埴輪と形象埴輪の諸特徴を整理する。

円筒埴輪の特徴　編年的位置づけをうかがう上で着目すべきⅠ群円筒埴輪の諸特徴を示しておく。焼成技法については、表面には黒斑が認められないことから、窖窯焼成で製作されていることが判明する。色調は黄褐色（にぶい橙色、浅黄橙色）を主体としており、須恵器のような硬質で灰色に焼きあがるものは知られていない。透孔はごく僅かに方形のものが含まれるものの、円形が主体である。外面調整はヨコハケを主体とし、Ｂ種ヨコハケ技法（川西 1978）が看取できる個体がある。Ｂ種ヨコハケ技法をさらに詳細に観察すると、調整は突帯の間を複数回重複させるものが主体であり、一度で巡らせるものが僅かにみられる。それぞれ静止痕は直立気味である。Ｂ種ヨコハケ技法の細分では、前者は Bb 種ヨコハケに、後者は Bc 種ヨコハケ（一瀬 1988）に相当する。突帯間隔が判明する資料がないが、破片資料の検討から 12 ～ 13㎝ 程度であったとみられる。基底部高は 16㎝ 程度であり、突帯間隔と比べてやや高い傾向がある。基底部にはヨコハケが用いられず、１次調整のタテナデのままにされる個体が多い。

円筒埴輪の編年的位置　これらの諸特徴を示す円筒埴輪は、川西宏幸による円筒埴輪編年（川西 1978）のⅣ期に

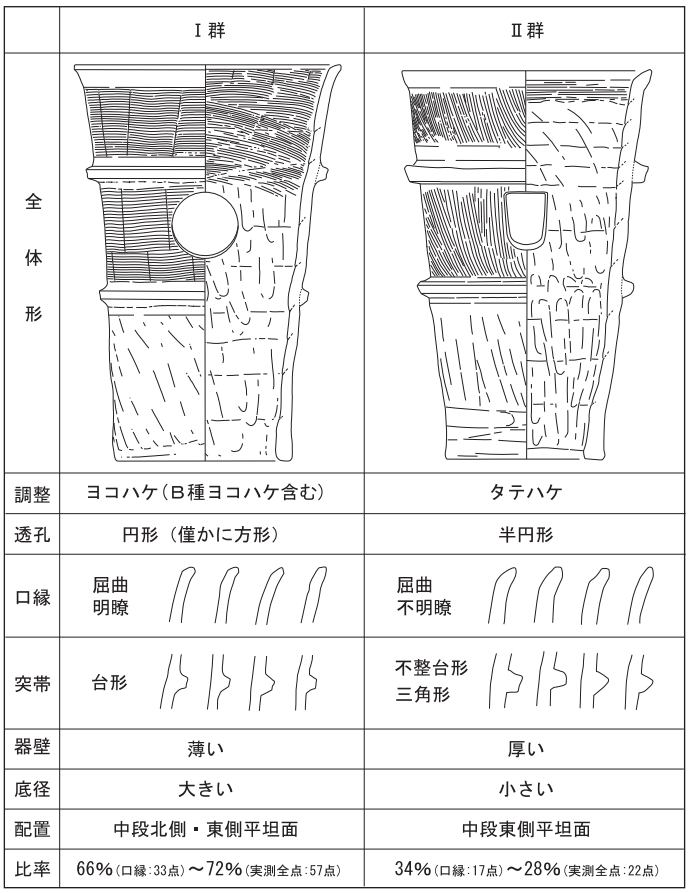


Fig.55　円筒埴輪群別模式図

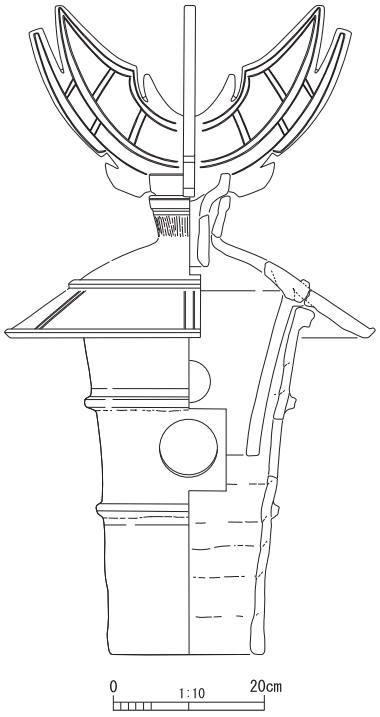


Fig.56　蓋形埴輪復元模式図

相当する。埴輪検討会編年（埴輪検討会 2003a･b）に照らしあわすと、突帯間隔や基底部高などに古相の様相が認められるが、焼成技法とＢ種ヨコハケ技法の特徴から判断して、Ⅳ期１段階に位置づけることができるだろう。近畿の指標的な古墳との並行関係を示せば、大阪府堂山１号墳、大阪府七観古墳、大阪府誉田御廟山古墳（伝応神天皇陵古墳）、大阪府アリ山古墳などの埴輪が、ほぼ同段階にあたると捉えられる。

形象埴輪の特徴　形象埴輪の特徴と編年的位置についても検討しておこう。形象埴輪も黒斑が全く認められないことから、窖窯焼成と判断できる。以下、種別ごとに検討を加えておく。

家形埴輪は、屋根に網代表現がみられるものが含まれ、軸部の壁には開口部が遺存する。板造りにした基底部をもち、開口部には下部に半円形の抉りを加えるものがある。半円形の抉りを加えた開口部をもつ家形埴輪は入口を表現したものとみられ、畿内中枢部の古墳において類例が知られる。東海地方における類似例は少ないが、三重県宝塚古墳などの大型前方後円墳から出土した家形埴輪に同様の表現が認められる。

蓋形埴輪については、立飾りの上端が内側に傾き彎曲する形態が特徴的である。立飾り上端の形状は比較的新しい様相を示すが、立飾り一枚に対する鰭飾りは外側２箇所と内側１箇所という古相の特徴もあわせもつ。立飾り内の模様には、２本の平行線を用いた区画がみられる。立飾りには方形の透孔（検討会編年Ⅳ期２段階に出現）がみられないことも留意すべきである。

蓋形埴輪については、貼付突帯口縁をもつ円筒埴輪（Fig.29）との関係に注目したい。貼付突帯口縁の円筒埴輪は直径 30㎝ 以上のものが多く、普通円筒埴輪と比べ大振りのものが多く占める。また、口縁端部を厚くする形状は、蓋形埴輪の軸受け部の形状と共通し、上部に別部材を組み合わせることを意識した造形の可能性がある。出土位置についても墳丘中段平坦面か上段斜面上から出土するものが多く、本来は墳頂平坦面に樹立されていたものである可能性が大きい。以上の特長から想定すると、貼付突帯口縁をもつ円筒埴輪は蓋形埴輪と組み合う基底の部材である可能性が高いとみられよう（Fig.56）。

甲冑形埴輪は粘土の添付によって綴じ革を表現したもので、埋葬施設から出土した実物と同じ技術段階の革綴短甲を模している。草摺の山形模様は大振りの工具を用いた刺突文で表現されている。同じ工具をもちいた表現は冑の錏にもみられる。刺突文による草摺の模様表現は、近畿地方中枢部における甲冑形埴輪と共通するもので、狐塚古墳の形象埴輪製作者が近畿地方と強いかかわりをもっていたことを示唆している。

この他、靫形、盾形、推定鳥形などの形象埴輪があるが、いずれも同時期の製作と位置づけて問題ない。形象埴輪の編年的位置も、円筒埴輪Ⅰ群における評価と同様、埴輪検討会編年のⅣ期１段階と捉えて矛盾がないといえるだろう。

狐塚古墳の築造時期　以上の検討をとおして導き出した埴輪の編年的位置は、狐塚古墳の築造時期を示すものといえる。埴輪検討会編年Ⅳ期１段階は、須恵器編年（田辺 1981）における TK73 型式期に並行する。この時期は、金工技術史の中では、甲冑における鋲留技法の導入期にあたり、初期の鋲留甲冑や、金銅技法をもちいた製品が生産され始める時期と評価しうる（鈴木 2014）。後述するように、長方板革綴短甲や鉄鏃など部分的に知られる副葬品の編年的位置についても整合的に

理解できるだろう。埴輪と副葬品を総合的に捉える古墳の様式編年においては、和田晴吾による編年（和田 1988）の七期に、前方後円墳集成編年（広瀬 1991）の 6 期に相当し、筆者（鈴木 2014、Fig.59）による中期古墳編年の中 3 期に該当する。暦年代の対応関係は、未だ不確実な要素があるが、おおむね 5 世紀の第 1 四半期を中心とする頃と捉えられる。

（３）埴輪工人の構成

円筒埴輪の群別　狐塚古墳の円筒埴輪は、大きくヨコハケを施すⅠ群とタテハケを施すⅡ群に分けられる。両者における焼成や色調、胎土などの差異は顕著といえないが、形態的特長や製作技法上の違いは明確であり、異なる工人集団によってそれぞれの埴輪群が製作されたものと捉えられる。その諸特徴は Fig.55 のように整理できる。

近畿地方的な製作技法をもち、形態的な規範が遵守されているのはⅠ群の円筒埴輪である。いっぽう、Ⅱ群とした円筒埴輪は、口縁の稜線が曖昧であること、形態の弛緩が顕著な突帯をもつこと、半円形もしくは楕円形の透孔がみられること、2 次調整にタテハケを用いること、器壁が厚く不均一であること、Ⅰ群と比べ底部径が小さいこと、などの諸特徴が認められる。円筒埴輪の製作に不慣れな在地で編成された工人の手によるものと考えられる。Ⅰ群とⅡ群の比率は、現状の資料数で判断する限り、２対１もしくは３対１程度である。墳丘中段平坦面における両者のあり方は、北側埴輪列についてはⅠ群のみ、東側埴輪列についてはⅠ群とⅡ群が混在する、といった違いがある。

製作技法上、個性的な様相が強いⅡ群の円筒埴輪であるが、Ⅰ群の円筒埴輪との関連も多く認められる。具体的には、焼成・色調・胎土がⅠ群と共通すること、全体形が 2 条 3 段構成とみられること、口縁内面にⅠ群を模したような稜線を意識したもの（58、61、63、67 など）がみられること、基底部にハケ調整が施されずナデ調整のままであること、などがあげられよう。これらのことから、Ⅱ群の円筒埴輪は独立した環境下で製作されたものではなく、Ⅰ群の円筒埴輪を模倣して、円筒埴輪製作に不慣れな工人たちが製作したものであるという評価を下すことが可能である。Ⅱ群の円筒埴輪の製作にあたっては、Ⅰ群の埴輪を製作した工人たちの指導を受けていた可能性が高いとみてよいだろう。

埴輪製作工人の実態　狐塚古墳にみられる形象埴輪の精良な製作技法や施文技法をみると、埴輪づくりに精通していた製作者の手によるものと判断できる。形象埴輪には形態や技法の規範から外れた破片がみられないことから判断すると、狐塚古墳に樹立された形象埴輪は、埴輪製作の熟練者のみによってつくられたものと評価できるだろう。蓋形埴輪の基部の可能性がある貼付突帯口縁をもつ円筒埴輪がⅠ群の技法をもつことを介在させると、形象埴輪の製作工人は、大きくⅠ群円筒埴輪を製作した工人集団に含めて捉えてよいことが分かる。狐塚古墳におけるⅠ群の埴輪製作工人は、形象埴輪を専門的に製作しつつ、円筒埴輪についても在地の工人を指導しながら、朝顔形埴輪のほぼすべてと、普通円筒埴輪の４分の３程度を製作していたことがうかがえる。いっぽう、Ⅱ群の埴輪製作工人は形象埴輪や朝顔形埴輪の製作には関与せず、Ⅰ群埴輪製作工人の指導のもと、もっぱら普通円筒埴輪のみを製作していたと捉えられる。

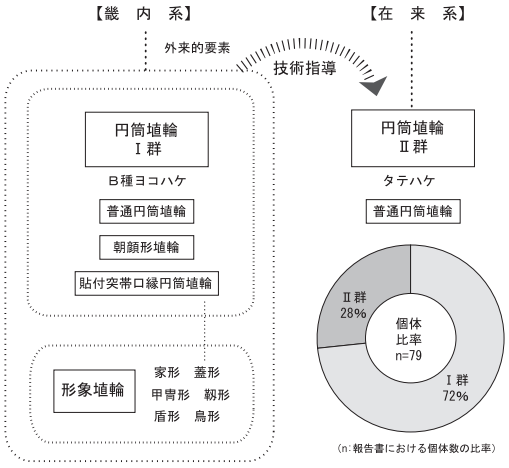


Fig.57　狐塚古墳埴輪製作工人の構成

埴輪の受容　狐塚古墳が築かれた浜名湖北岸地域（都田川流域）には、先行する埴輪樹立古墳がみられ

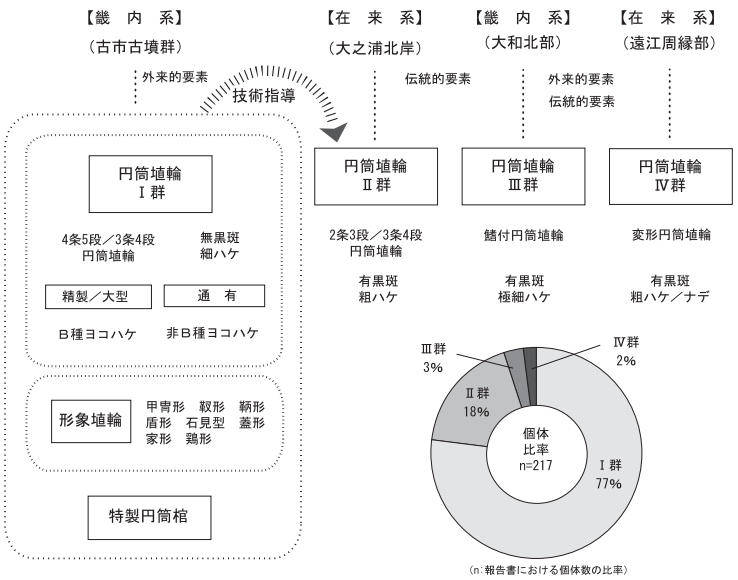


Fig.58　堂山古墳埴輪製作工人の構成

ない。狐塚古墳が築造される以前の当地には、埴輪生産にかかわる技術的な伝統がないといえるだろう。こうした埴輪未受容地において、新たに埴輪を採用するためには、先進地域からの技術提供が必要である。ここにいう先進地については、近畿地方などの遠隔地とともに、松林山古墳が構築された磐田原台地南部地域など、地域内における近隣地もその候補になりうるか検討すべきである。

しかしながら、狐塚古墳の円筒埴輪には、同時代もしくは先行する磐田原台地南部地域の埴輪にはみられない製作技法や形態的特徴が認められる。狐塚古墳の円筒埴輪は、基底部が高く2次調整のハケメがみられないことが特筆される。こうした形態的、技法的特徴は磐田原台地南部地域の埴輪には看取できない。また、Ｂ種ヨコハケが高確率で確認できることも注目してよいだろう。狐塚古墳と同時期に築造された盟主的前方後円墳である堂山古墳においても、Ｂ種ヨコハケの出現率は極めて少ないことを考えると、その違いは大きい。さらに、形象埴輪においても、狐塚古墳出土例にみられる諸特徴には同時期の堂山古墳やその陪冢的性格が強い堂山古墳群の事例と積極的な関連性を認めがたい。

Ⅰ群円筒埴輪の故地　以上のことから判断すると、狐塚古墳Ⅰ群埴輪の直接的な関連地は、遠江における先進地ではなく、より直接的に近畿地方中枢部に求める方が妥当であろう。先述のとおり、狐塚古墳の円筒埴輪は基底部が高く、2次調整のヨコハケを施さず1次調整のナデのままで仕上げられることが、注目すべき特徴である。Ｂ種ヨコハケの出現率が比較的高いことも近畿地方との強い関連を想定させる。また、円筒埴輪のみならず、形象埴輪における技法や形態的な諸特徴も合わせて考慮すべきである。

現状では、こうした特長をもつ狐塚古墳のⅠ群円筒埴輪と形象埴輪の故地は、古市・百舌鳥古墳群の中に求めておきたいが、近畿地方中枢における別の候補地も想定しうる。今後、埴輪群の細差に注目して、Ⅰ群円筒埴輪製作工人の起源地を詳細に探る必要があるだろう。

中期前半の埴輪生産体制　一つの古墳に樹立された埴輪において、指導的な役割を担った畿内的な一群（Ⅰ群）と技術指導をうけて製作されたと考えられる在来的な一群（Ⅱ群）が混在する状況は、中期前半を中心に数多く認められる。出土埴輪の総合的な分析から埴輪製作工人編成の解明に成功した近隣地の事例として堂山古墳（原編1995、鈴木2008）と岐阜県昼飯大塚古墳（中井ほか2003）をあげておく。

堂山古墳の円筒埴輪については、大きく畿内的要素が強いⅠ群と在来的な要素が強いⅡ群に分けられる。両者間で、大きさ、焼成技法、ハケメ原体が異なり、両者の違いは狐塚古墳の事例よりも鮮明である。その埴輪製作工人の構成を概念的に示すと、Ⅰ群円筒埴輪工人の技術指導を受けⅡ群円筒埴輪が製作されているとみられること、Ⅰ群円筒埴輪と形象埴輪の製作者が同一の工人集団と解釈しうることなど、狐塚古墳にみられる埴輪工人集団の構成と近い内容が看取できる（Fig.58）。昼飯大塚古墳の埴輪についても、群別の細差はあるが、近似した製作工人の構成が復元できる。

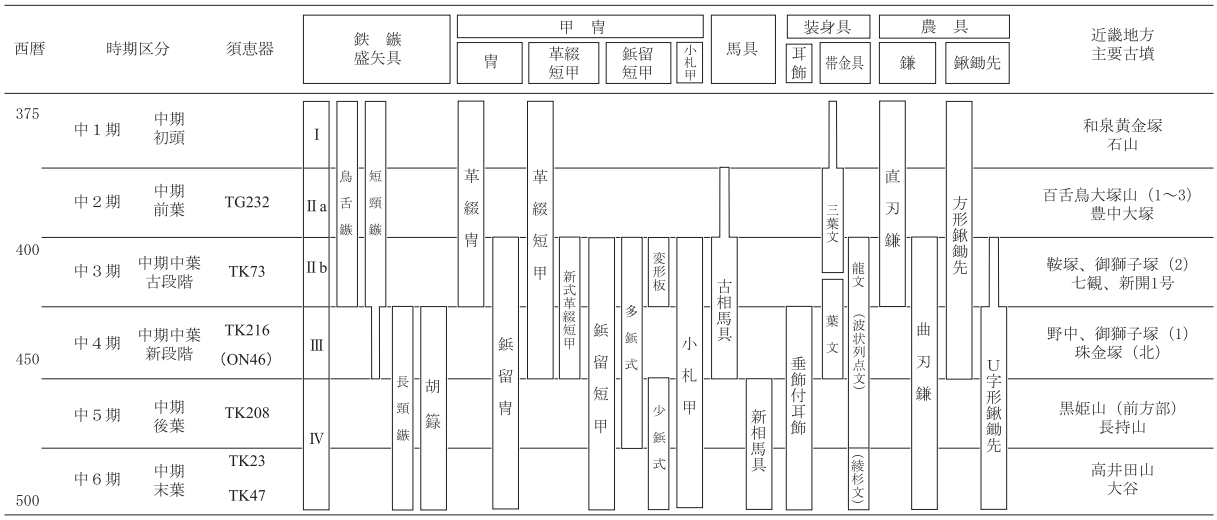


Fig.59　古墳時代中期の段階区分

堂山古墳や昼飯大塚古墳は、全長 100 mをこえる地域の盟主的首長墓であり、必要とされる埴輪の数も狐塚古墳と比べてはるかに多い。むしろ、狐塚古墳のような一辺 22 mの方墳において、盟主的首長墓と類似した埴輪製作の工人集団が編成されていたことに注目するなら、狐塚古墳には階層的に上位の埴輪製作技術体系が導入されていたと評価しうるだろう。

（４）小　結

狐塚古墳から出土した埴輪について、編年的位置づけを検討した。その結果、狐塚古墳のⅠ群円筒埴輪および形象埴輪は、埴輪検討会編年のⅣ期 1 段階に位置づけることができ、副葬品を含めた古墳の築造時期も、同じ段階とみなして矛盾がないことを確認した。この段階は、須恵器編年における TK73 型式期に並行し、古墳様式編年では和田編年による七期、集成編年による 6 期、筆者の中期古墳様式編年（Fig.59）の中 3 期に相当する。地域における首長墓系譜を語る上で、一つの定点を得たといえるだろう。

また、狐塚古墳から出土する埴輪の構成を総合的に分析し、近畿地方中枢部からの直接的な技術伝播と捉えられるⅠ群と、Ⅰ群の影響を受けつつ在来的な様相を色濃く持つⅡ群に分離できることを確認した。Ⅰ群の製作工人は円筒埴輪のほかにも形象埴輪の製作にも従事し、Ⅱ群の製作工人はⅠ群製作工人からの技術指導を得ながら円筒埴輪のみを製作していたと捉えられる。先進的な工人集団に在来的な工人集団が加わる集団構成は、地方における盟主的な前方後円墳に数多く看取できる。狐塚古墳は規模こそ小さいが、階層的に上位の古墳と同列の埴輪生産体制が採用されていたと評価でき、このことは狐塚古墳の被葬者の性格を考える上でも重要な要素として注目しうるだろう。

2　狐塚古墳出土短甲をめぐる問題

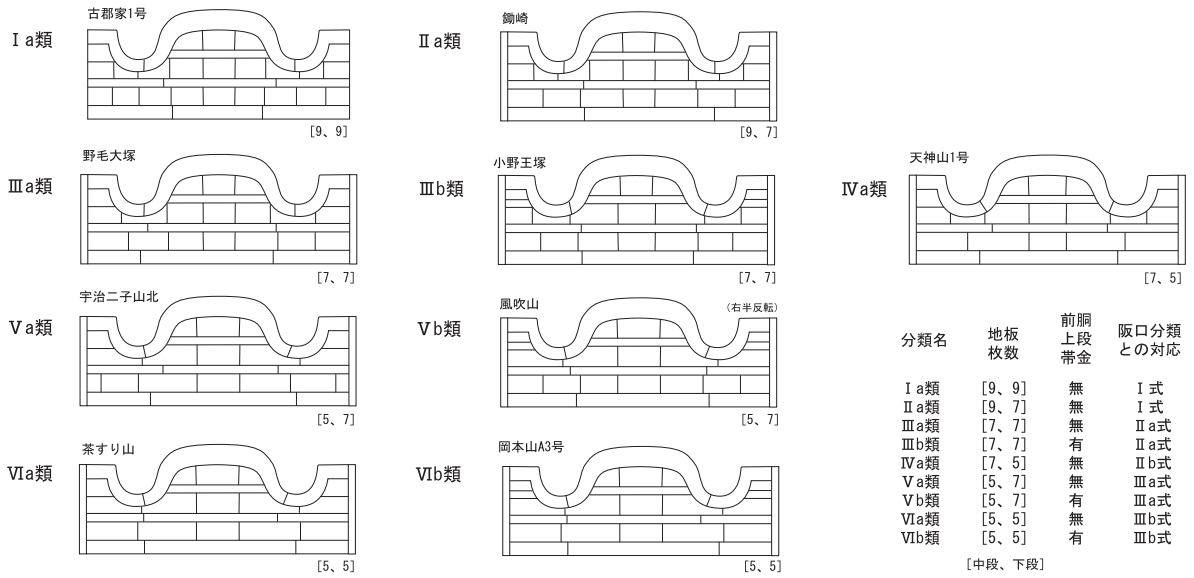
（1）はじめに

狐塚古墳の副葬品として長方板革綴短甲が知られている。この資料は破片の状態で伝わっていたが、接合検討を加えた結果、若干の不確定要素を残すものの、ほぼ全体の構造をうかがうことができた。長方板革綴短甲は、古墳時代中期前半を中心に製作されたもので、中期初頭から中期後葉まで副葬される。その変遷については主に地板の構成の違いから導き出すことができるが、製品ごとの個性もあり、新出資料をもとにした検討の余地がある。ここでは、長方板革綴短甲の地板構成を再整理することを通じて狐塚古墳例の編年的位置づけを行い、この古墳に短甲がもたらされた意義を考究しておく。

（2）地板の類型と変遷

地板の類型　長方板革綴短甲は、大きく地板構成枚数が多いものから少ないものへ推移する過程が明らかにされている（阪口 1998、橋本 1999）。その分類基準は分析視点により若干異なるが、概ね、中段地板の脇部の分割技法、中段地板・下段地板の枚数、および前胴上段帯金の有無などに注目したものとしてよいだろう。狐塚古墳から出土した短甲は、1）中段地板と下段地板の構成枚数がそれぞれ 7 枚（[7、7] と表記する）である可能性が高い、2）前胴上段の帯金をもつ、という特徴をもつ。ここでは、阪口英毅の分類を参考しながら、狐塚古墳出土短甲が示すこの二つの特徴に注目し、長方板革綴短甲の地板配置を次のように分類する。

Ⅰ類　中段地板 9 枚、下段地板 9 枚構成（[9、9]）のもの（阪口Ⅰ式）
Ⅱ類　中段地板 9 枚、下段地板 7 枚構成（[9、7]）のもの（阪口Ⅰ式）
Ⅲ類　中段地板 7 枚、下段地板 7 枚構成（[7、7]）のもの（阪口Ⅱ a 式）
Ⅳ類　中段地板 7 枚、下段地板 5 枚構成（[7、5]）のもの（阪口Ⅱ b 式）
Ⅴ類　中段地板 5 枚、下段地板 7 枚構成（[5、7]）のもの（阪口Ⅲ a 式）
Ⅵ類　中段地板 5 枚、下段地板 5 枚構成（[5、5]）のもの（阪口Ⅲ b 式）



分類名	地板枚数	前胴上段帯金	阪口分類との対応
Ⅰa類	[9、9]	無	Ⅰ式
Ⅱa類	[9、7]	無	Ⅰ式
Ⅲa類	[7、7]	無	Ⅱa式
Ⅲb類	[7、7]	有	Ⅱa式
Ⅳa類	[7、5]	無	Ⅱb式
Ⅴa類	[5、7]	無	Ⅲa式
Ⅴb類	[5、7]	有	Ⅲa式
Ⅵa類	[5、5]	無	Ⅲb式
Ⅵb類	[5、5]	有	Ⅲb式

［中段、下段］

Fig.60　長方板革綴短甲の細分

Tab.5　長方板革綴短甲の地板構成

類型	阪口分類	出土古墳	前胴上段	地板枚数				共伴冑	頸甲	鉄鏃				馬具	垂飾耳飾	鎌		鍬鋤先		須恵器	時期
				上段	中段	下段	合計			鳥舌鏃	短頸鏃	長頸鏃	様式			直刃	曲刃	方形	U字		
1a	Ⅰ	古郡家1号	上	5	9	9	23				○		Ⅰ並行								中1期
(1a)	Ⅰ	盾塚	上	5	(9)	(9)	(23)		○	○	○		Ⅱa			○					中2期
(2a)	Ⅰ	石山	上	5	(9)	7	(21)			○	○		Ⅰ			○		○			中1期
2a	Ⅰ	鋤崎	上	5	9	7	21										●				中1期
3a	Ⅱa	豊中大塚	上	5	7	7	19			○	○		Ⅱa			○		○			中2期
3a	Ⅱa	野毛大塚	上	5	7	7	19	三革衝	○	○	○		Ⅱa							TK73	中2期
3a	Ⅱa	池ノ内5号	上	5	7	(7)	(19)				○		Ⅱ								(中2期)
3a	Ⅱa	雁洞	下	5	8	7	20	小鉄眉	○			●	Ⅲ～Ⅳ								(中4期)
3b	Ⅱa	狐塚	帯金	5	(7)	(7)	(19)			(○)			(Ⅱa)								中3期
3b	Ⅱa	小野王塚	帯金	5	7	7	19				○	●	Ⅲ								中4期
3b	Ⅱa	岬	帯金	5	7	7	19				○		Ⅱb				●		●		中4期
3a	Ⅱb	谷内21号	上	5	8	6	19			○	○		Ⅱa								中2期
4a	Ⅱb	天神山1号	上	5	7	5	17			○	○		Ⅱa			○		○			中2期
4a	Ⅱb	安久路2号	下	5	7	5	17	三革衝													中3期
(3/4)	(Ⅱ)	八幡大塚	—	(5)	(7)	—	—	三革衝・竪矧板	○	○	○		Ⅱa			○		○			中2期
5a	Ⅲa	柴垣円山1号	上	5	5	7	17														(中2期)
5a	Ⅲa	宇治二子山北	上	5	5	7	17	三革衝	○		○		Ⅱb			○	●				中3期
5a	Ⅲa	鶴山	上	5	5	7	17														中5期
(5b)	(Ⅲa)	風吹山	帯金	5	(5)	(7)	(17)	三革衝													中2期
(5b)	(Ⅲa)	蓮山洞8号	帯金	5	(5)	(7)	(17)	竪矧板													(中5期)
6a	(Ⅲb)	龍門寺1号	(下)	5	5	(6)	(16)		○		○		Ⅱa			○					中2期
6a	Ⅲb	茶すり山	上	5	5	5	15	三革衝・竪鉄衝	○	○	○		Ⅱa								中3期
6a	Ⅲb	七観	上	5	6	5	16	三革衝	○	○	○		Ⅱb	○							中3期
6a	Ⅲb	新開1号	上	5	5	5	15	小鉄眉	○		○		Ⅱb	○							中3期
6a	Ⅲb	兵家12号	上	5	5	5	15	小鉄眉	○		○		Ⅱb				●				中3期
6a	Ⅲb	天神山7号	下	5	5	5	15	竪革衝	○			●	Ⅲ		●						中4期
6a	Ⅲb	向山1号	上	5	5	5	15					●	Ⅲ		●					0N46	中4期
6a	Ⅲb	杜谷72号	上	5	5	5	15														不明
6b	Ⅲb	今林6号	帯金	5	5	6	16				○		Ⅱa			○					中2期
6b	Ⅲb	日吉山	帯金	5	5	(5)	(15)						(Ⅱ？)				●				(中3期)
6b	Ⅲb	わき塚1号	帯金	(5)	(5)	(5)	(15)	三革衝	○	○	○		Ⅱa			○	●	○			中3期
6b	Ⅲb	岡本山A3号	帯金	5	5	5	15					●	Ⅲ							TK73～216	中4期
(5/6a)	(Ⅲ)	桜ヶ丘	上	(5)	(5)	—	—	三革衝	○			●	Ⅲ								中4期
(5/6b)	(Ⅲ)	佐野山	○	(5)	(5)	—	—	(衝)			○		Ⅱ								(中3期)

〈凡例〉・属性内の（　）：不確定なことを示す。　・前胴上段　上：上段地板が上重ね　下：上段地板が下重ね　帯金：上段帯金をもつ
・○：古相の属性、●：新相の属性
・共伴冑の略称：［鈴木2014］、阪口分類：［阪口1998］、鉄鏃様式：［鈴木2003］、須恵器：［田辺1981］、時期：［鈴木2014］ほか

これらの分類に前胴上段帯金をもたないものをａ類、もつものをｂ類として、Ⅰａ類、Ⅱａ類、Ⅲｂ類などと呼称する。なお、長方板革綴短甲には、地板枚数が必ずしも左右対称にならない変則的なものが知られている。こうした変則例は、基本となる地板構成をもとに何枚かを細分していることが多く、本来的な設計枚数が推し量れるものが多い。Tab.5 には、地板枚数が異なっていても、本来的な設計枚数が分類可能な資料については、各類型にあてはめて示した。狐塚古墳例は、推定地板構成［7、7］で前胴上段帯金をもつことから、Ⅲｂ類（阪口Ⅱａ式）に分類される。

変　遷　地板枚数が多いものから、少ないものへと推移する変化の方向から考えると、理念的にはⅠ類からⅥ類の順に出現したと捉えることができるが、実際は互いに重複期間をもちうると考えてよい。これらの類型を出土した埋葬施設に共伴する遺物から、どの程度の差異が抽出できるか、検討しておこう。Tab.5 には中期古墳の様式編年の指標となりうる共伴遺物をあげ、各埋葬施設のおおよその構築時期を示した。この整理によると、Ⅰ類およびⅡ類が中１期に中心があり、Ⅲ～Ⅵ類が中２期以降に出現したことがうかがえる。また、Ⅴ類やⅥ類については、中３期以降の古墳からの出土が過半数を超えており、より新しい段階に中心的時期があることが知られる。それぞれの類型の製作段階を古墳の共伴資料から特定することは難しいが、概ね阪口英毅が示すような３段階の変遷をたどっていることが追認できるだろう。とくに、現段階での資料数を比較する限り、Ⅲ類（阪

ロⅡａ式）とⅣ類（阪ロⅡｂ式）、Ⅴ類（阪ロⅢａ式）とⅥ類（Ⅲｂ式）はそれぞれ並行する傾向が認められる。また、Ⅲ類とⅥ類の資料が多く、それぞれ主要な類型であることが知られる。

前胴上段帯金の有無　ａ類とｂ類、すなわち前胴の上段帯金の有無については、どのように整理しうるか検討しておこう。先行する方形板革綴短甲との連続性を重視すれば、長方板革綴短甲における前胴上段帯金は、その成立当初においては不要と捉えられていたとみてよい。ただし、阪ロが指摘するように（阪ロ 1998）、前胴上段における帯金は、中１～２期の築造とみられる岡山県月の輪古墳の出土例に採用されている可能性があり、ｂ類は比較的古い段階で成立していたと捉える余地がある。しかし、単純に分析可能な資料を比較すると、中２期までのｂ類の出土例は限定的であり、鋲留技法導入期である中３期から増加傾向をみせ、中４期以降は約半数を占めるに至ることが知られる。こうした資料数の違いから判断すると、前胴の上段帯金をもつｂ類は、長方板革綴短甲の中でも新しい段階の製品に多い傾向は認めてよいだろう。

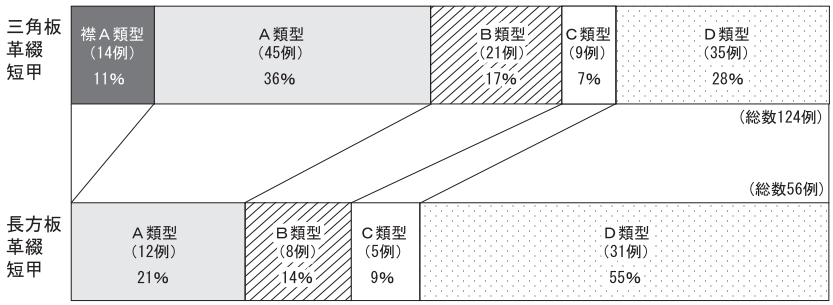
狐塚古墳例の編年的位置　ここまでの整理によって、狐塚古墳例は長方板革綴短甲の変遷を３段階に分けた中で、おおよそ第２段階から第３段階にかけて製作されたものであることを示した。この時期は、古墳様式編年の中２期から中３期に並行する。この編年観は、狐塚古墳の築造時期として捉えた中３期の副葬品としても整合的に理解しうるだろう。なお、前胴上段帯金をもつ特徴は新出の要素であるが、必ずしも製作時期の新古を示す指標にはなしえない。今後、新出資料を交えて前胴上段帯金の採用、非採用の意味を検討する必要があるだろう。

（３）甲冑の組合せ

甲冑の組合せ　狐塚古墳には短甲１領のみが確認されている。甲冑は採集品であるが、短甲以外の破片が全くみられないことから、狐塚古墳には、短甲１領のみが副葬されていた可能性が高い。古墳時代中期の甲冑出土古墳には短甲のほかに冑や頸甲・肩甲が付属することがあり、その組合せの類型化が可能である。ここでは、従来の分類に倣い（鈴木 2004）、次のような組合せの類型化を用い、狐塚古墳にもたらされた武装の特質について触れておく。

Ａ類型　短甲＋冑＋頸甲・肩甲の組合せ
Ｂ類型　短甲＋冑の組合せ
Ｃ類型　短甲＋頸甲・肩甲の組合せ
Ｄ類型　短甲のみ

なお、Ａ類型～Ｄ類型のほかに、冑のみや付属具のみの類型（Ｅ類型）も存在するが、短甲を伴わない変則的なものであることから、ここでは取り上げない。また、長方板革綴短甲と比較するために、ほぼ同時期に製作された三角板革綴短甲についても検討の俎上にあげるが、三角板革綴短甲には襟付短甲や変形板短甲といった特殊な型式が認められる点は留意すべきである。襟付短甲には構造的に肩甲や頸甲が伴わないが、革製衝角付冑などの特殊な冑が組合うことがあり、Ａ類型に劣らない優位な武装として認識しうる。ここでは、襟付短甲が伴う武装をＡ類型の一部に位置づけ、「襟Ａ類型」としておきたい。



［橋本・鈴木2014］より作成、各類型には盗掘などで不明瞭な事例を含む

Fig.61　甲冑組合せ類型の比率

Fig.61 に、三角板革綴短甲と長方板革綴短甲のそれぞれの類型の割合を示した。ここには、盗掘などによっ

Tab.6　遠江における甲冑出土例

古墳名	墳形	規模(m)	埴輪	甲	冑	頸甲	肩甲	付属具	類型
各和金塚	前方後円墳	62	○	三革短	三革衝	○	○		A
五ヶ山B2号	方墳	33×28	○	三革短	三革衝	○	○	草摺？	A
千人塚	円墳	49	○	三革短	三革衝	△	△		(A／B)
安久路2号	円墳	26	無	長革短	三革衝				B
安久路3号	円墳	27	○	長革短			△	小札	(C)
石ノ形	円墳	27	○	横鋲短					D
文殊堂11号	円墳	15	無	三革短					D
林2号	円墳	16	無	三鋲短					D
狐塚	方墳	22	○	長革短					(D)
土器塚	円墳	36	無	長革短					(D)
(伝)幕ヶ谷	不明	不明	不明	革短					―

〈凡例〉・○:存在する　△:存在する可能性がある　( ):不確定な事例であることを示す　・甲冑の略称:［鈴木2014］

て本来の組合せ関係が必ずしも明確でない資料も含んでいるが、おおよその傾向を知る上では問題は少ないだろう。この整理により、優位な武装であるA類型は長方板革綴短甲よりも三角板革綴短甲に多く認められることが分かる。襟A類型を含めると、三角板革綴短甲がかかわる組合せのうち、最優位の武装が占める割合が半数に近くなり、長方板革綴短甲との差異がより明確に示される。

いっぽう、短甲のみで用いられるD類型については、三角板革綴短甲よりも長方板革綴短甲の方がその割合が高い。長方板革綴短甲を用いるD類型の中には、三重県石山古墳や福岡県鋤崎古墳、鳥取県古郡家１号墳など、中期初頭（中１期）の盟主的な前方後円墳が含まれる。長方板革綴短甲の成立当初は、D類型が優位な武装として認識されていたとみられる。方形板革綴短甲を１領副葬する古墳時代前期的武装が踏襲されたものといえるだろう。やがて三角板革綴衝角付冑や附属具の生産が本格化すると、冑と組み合わせる短甲として意匠が共通する三角板革綴短甲が好まれたと評価しうる。

このように、長方板革綴短甲にD類型が高確率でみられることについては、三角板革綴短甲とは異なり、方形板革綴短甲との系譜の連続性が意識されていた可能性がある。ただし、長方板革綴短甲にも冑や付属具が伴うA類型が少なからず認められるので、必ずしもこうした認識が古墳時代中期の中で貫徹されているとはいいがたい。ここでは、A類型とD類型の比率差から、大まかな傾向として、長方板革綴短甲は三角板革綴短甲よりも低位の武装として認識されていた可能性を指摘するにとどめておきたい。

狐塚古墳に副葬されていた甲冑武装を長方板革綴短甲１領と捉えるなら、短甲のみを副葬するD類型として最も一般的なあり方をみせているといえるだろう。また、遠江の近隣地には他にも甲冑出土古墳が集中するが（Tab.6）、A類型は前方後円墳をはじめ、狐塚古墳よりも規模の大きな古墳に認められる。墳形や墳丘規模の比較からは、狐塚古墳の武装は整合的に理解しうる階層序列の中に位置づけることができるだろう。

（４）小　結

狐塚古墳の事例を通じて、長方板革綴短甲の類型を再検討し、その編年的位置づけについて評価を試みた。狐塚古墳の短甲は、長方板革綴短甲の製作段階を３段階に分けたうちの第２段階から第３段階にかけての時期に位置づけることができ、中３期と想定した古墳の築造時期とも矛盾しない。また、狐塚古墳には長方板革綴短甲１領のみが確認されているが、一辺22ｍの方墳の副葬品として相応な内容と評価した。ただし、短甲１領のみとはいえ、鉄製甲冑が副葬されていた意義は大きい。遠江で出土が知られる甲冑は中期の前半に位置する革綴製品が多いが、狐塚古墳の事例からは重層的な武装体制の一翼を担う被葬者の性格をうかがうことができるだろう。

3　狐塚古墳築造の歴史的意義

（1）はじめに

検出遺構と出土品の分析によって、狐塚古墳にかかわる情報が明確になった。ここでは、これらの情報をもとに、小地域の中における首長墓系譜を整理し、近隣地域をふくめた階層構造について触れておきたい。まずは、都田川流域（浜名湖北岸域）という内湖の隣接地に方墳が構築されることに着目し、その立地環境、墳形、副葬品などが類似する事例との比較を通じて、古墳の被葬者像に迫るとともに、狐塚古墳が築造された歴史的意義について検討を加える。

（2）都田川流域における狐塚古墳の位置

首長系譜における位置づけ　狐塚古墳が築かれた都田川流域（浜名湖北岸域）は、盆地が連なる特徴をもち、地形的にも完結性が高い。奈良時代には引佐郡として総括される地域であり、集落遺跡の動態と首長墓系譜の推移から地域編成の諸過程をあとづけることができる。

都田川流域内の小地域は、その地勢の様相から、①井伊谷盆地、②浜名湖沿岸域、③都田川下流域、④都田川中流域、の四つの小地域に分けることができる。この地域区分は引佐郡にみられる４つの郷（渭伊、伊福、刑部、京田）の範囲とも一致する。流域内を隔てる地形的特徴と、古代の行政区分が重なる点でも、小区分の有意性が明確な地域といえる（Fig.4・5）。

遠江における首長墓系譜を Fig.62 に示す。この地域の最有力の首長系譜は、前期から中期後葉の

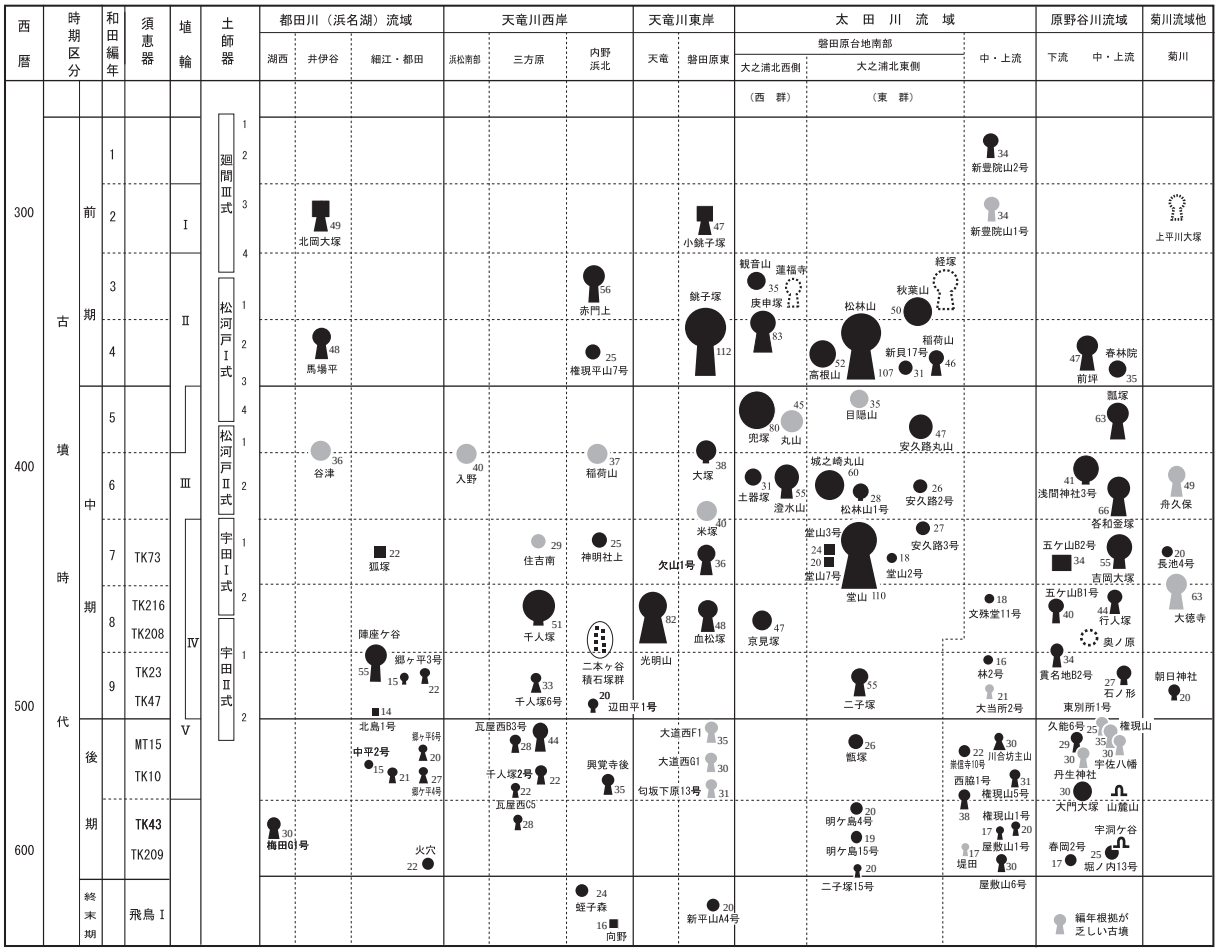


Fig.62　遠江における首長墓の変遷

間において、北岡大塚古墳（前方後方墳、49 m）、馬場平古墳（前方後円墳、48 m）、陣座ヶ谷古墳（前方後円墳、55 m）といった変遷が知られる。これらの古墳は、いずれも全長 50 m級の大きさである。都田川流域では中期後葉以降、前方後円墳の規模が縮小化するとともに築造数が増加し、全長 20 m前後の古墳（陣内平 1 号墳、郷ヶ平 3･4･6 号墳など）がみられるようになる。地域内の造墓地を整理すると、前期には井伊谷盆地に中心があり、中期後葉には都田川下流域に移動し、ほどなくして、都田川中流域にも拡散するという様相がうかがえる。集落遺跡の動態についても、前期の集落である北神宮寺遺跡が井伊谷盆地にあり、中期中葉以降には、川久保遺跡や岡の平遺跡、須部遺跡など都田川中・下流域に移る傾向があり、首長墓の移動は勢力基盤の移り変わりを反映したものと捉えることができる。

狐塚古墳は都田川流域の中でも首長墓の築造が低調な浜名湖沿岸地域に構築されている。古墳の築造時期も全長 50 m級の古墳の築造地が井伊谷盆地から都田川下流域に移動する直前にあたる。また、狐塚古墳は、都田川流域において初めて埴輪を採用した古墳である。その後の前方後円墳にはすべて埴輪が樹立されていることをふまえると、一辺 22 mという規模の方墳とはいえ、地域内の首長墓系譜の中に位置づけうることが首肯できよう。狐塚古墳が、前方後円（方）墳を機軸とした小地域内の勢力変遷の間を補完するような地域と時期に位置づけられる点は、この古墳の特徴を際立たせるものと評価しうる。

古墳の築造位置の違いが地域における求心地域の推移を示していると捉えると、狐塚古墳の被葬者が活躍し古墳を築造した時期において、浜名湖沿岸地域に都田川流域の中心勢力がおかれたと考えられる。この小地域は古代には伊福郷と呼ばれているが、浜名湖沿岸の可耕地が少ない地域にあたり、大規模な集落遺跡は知られていない。また、都田川流域の 4 地域の中で唯一、前方後円墳が構築されない地域でもある。このことは、狐塚古墳の被葬者が、生産力の優位性や、集落の隆盛などとは異なる勢力基盤をもっていた可能性を示唆する。

浜名湖北岸域の特質　その内実を考えるにあたっては、狐塚古墳の立地環境に注目すべきであろう。古墳の近隣には近世東海道の脇往還である本坂通（通称、姫街道）がもうけられている。本坂通は、古代には二見道と呼ばれ、三河国府と遠江国府を繋ぐ浜名湖北岸経路の重要な交通路であった。奈良時代に遠江国府がおかれた中泉から直線的に浜名湖北岸を目指すと、天竜川を越えた後、三方原台地を南東から北西方向に横断する。近世の街道は関所がおかれた気賀を経由するために台地の北西隅で一端、北寄りに屈曲するが、この屈曲を経ず直線的に浜名湖沿岸に至る経路を想定すると、狐塚古墳の脇に至る。狐塚古墳の西側には浜名湖の入り江が及んでいることを考えれば、浜名湖北岸の交通路と浜名湖を経由する海上交通網が交わる港湾施設を臨む位置に古墳が築かれた可能性が高いといえるだろう。

肥沃な平野部を意識しない立地環境をふまえれば、狐塚古墳の立地は海路と陸路の結節点を掌握することに主眼があったと判断しうるだろう。狐塚古墳には、近畿地方中枢部からの技術供与がうかがえる先進的な埴輪が導入されていることや、倭王権や地域の盟主的勢力との軍事的関係を示す長方板革綴短甲が副葬されていることから判断すると、海上交通網を重視した背景には王権側の要請が大きく影響を与えていたと捉えられる。

（3）遠江における首長墓系譜との関係

方墳の比較　ここまでの検討を通じ、狐塚古墳は首長墓系列に位置づけうることを確認したが、その墳形が方墳であることは、何らかの特別な背景をもっていた可能性を示唆している。ここで改めて、狐塚古墳が方墳であることの意味を検討しておきたい。Tab.7 に遠江における方墳（終末期を除く）を規模の順に整理した。葺石、段築、埴輪といった要素を備え、大型前方後円墳と同様の外観

Tab.7　遠江における方墳

古墳名	所在地	規模(m)	埴輪	段築	葺石	周溝	副葬品・土器等	築造時期
五ヶ山B2号	袋井市	32×28	○	２段築成	○	なし	甲冑、刀剣、鉄鏃、農工具	TK73
堂山3号	磐田市	24	○	２段築成	○	○		TK73
狐塚	浜松市	22	○	２段築成	○	部分的	短甲、刀剣、鉄鏃	TK73
堂山4号	磐田市	22	不明	不明	不明	(○)		
堂山7号	磐田市	約20	○	不明	○	○		TK73
大手内A6号	磐田市	19	×	×	×	○	土師器	前期後半
梵天13号	磐田市	19	×	×	×	○		TK23～47
明ヶ島5号	磐田市	18	×	２段築成	○	○	鏡、刀剣、鏃、農工具等	TK208
大手内B2号	磐田市	15	×	不明	×	○	土師器	中期後葉か
八幡神社南	磐田市	14	×	２段築成	○	○	剣、玉、鉄鏃、須恵器	TK216
北島1号	浜松市	14	○	不明	○	○		中期末～後期初
神明社上7号	浜松市	14	×	不明	○	○		不明確、中期か
下滝1-KF01	浜松市	13	×	×	○	○	須恵器	TK47～MT15
北島2号	浜松市	12	×	不明	○	○		中期末～後期初
下滝1-KF04	浜松市	11	×	×	○	○		中期末か
下滝5-KF14	浜松市	11×9	×	×	○	○		中期末か
瓦屋西C1号	浜松市	10	×	×	×	○	須恵器	MT15
大手内B10号	磐田市	8	×	×	×	○	須恵器	TK208
大手内B9号	磐田市	7	×	×	×	○	土師器	中期後葉か

を呈する一辺 20 ～ 30 m級の方墳が、古墳時代中期を中心にして比較的広域に分布していることが分かる。

遠江における最大の方墳は袋井市にある五ヶ山 B2 号墳である。丘陵上の制約が大きい土地を最大限いかして墳丘を構築しており、その規模は 32 × 28 mである。これに次ぐ規模の方墳は、堂山古墳の陪冢（西川 1961）として位置づけうる堂山 3 号墳（一辺 24 m）であり、一辺 22 mの狐塚古墳がその次に続く。こうした方墳の属性をみると墳丘規模一辺 20 mほどを境界として、より小さい規模の古墳には埴輪をもたないものが多くなり、同じく一辺 14 mほどの規模を境界として段築をもたないものが、さらに一辺 10 mほどの規模を境界にして葺石をもたないものが増加する。遠江における古墳時代中期の方墳は、墳丘規模と埴輪、段築、葺石といった諸要素の有無が比較的良好に対応しており、古墳の外観にかかわる諸要素に階層性があらわれていると評価できるだろう。以下、埴輪を持たないものが圧倒的に多い一辺 20 m級未満の方墳を小型方墳、葺石・段築・埴輪を備える一辺 30 ～ 20 m規模の方墳を中型方墳、五ヶ山 B2 号墳の規模をこえる一辺 40 m級以上の方墳を大型方墳と呼んでおきたい。

同時期の方墳　中型方墳の築造時期が中 3 期に集中することは、注目してよいだろう。狐塚古墳をはじめ、埴輪を備える方墳そのものが極めて少ないことを考慮すると、遠江における中型方墳はそれぞれ個別に築造されたのではなく、互いに何らかの関係をもって構築されたと想定する方が自然であろう。とくに五ヶ山 B2 号墳と狐塚古墳は後述するように、立地環境や、外表施設、副葬品などに共通性が多く認められる。地域内に類似した性格の古墳被葬者を配置する体制がしかれていた可能性が考えられるだろう。こうした地域秩序の中心は、築造時期が共通し、3 基の中型方墳を陪冢として従える堂山古墳（Fig.63）の築造主体であると考えられる。

堂山古墳は全長 110 mの前方後円墳であり、遠江の中でも最大級の古墳である。葺石や豊富な形象埴輪を含む埴輪を備え、前方部、後円部ともに三段に築成されるなど、明らかに階層的な優位性が認められる。堂山古墳の後円部の埋葬施設は古い時期に破壊されており、その詳細を知ることができないが、帯金具の出土が伝えられるほか、舶載の内行花文鏡や神人龍虎画像鏡など 3 面の鏡が知られている。古墳時代中期の帯金具はその多くが甲冑に伴うこと、また、帯金具を備える甲冑は変形板短甲や古い段階の小札甲といった武装のなかでも階層的に上位に位置づけうる特殊例であることをふまえると、堂山古墳の中心埋葬施設にも上位階層の武装である特殊な甲冑が副葬されてい

た可能性がある。また、堂山古墳の前方部には鉄製武器を豊富に副葬する埴輪棺が知られており、畿内の大型古墳群で知られるような鉄製武器を大量に副葬する被葬者集団が想定しうる。堂山古墳に従属する陪冢の方墳群については、残念ながら埋葬施設の情報が得られていないが、樹立された埴輪は堂山古墳と酷似しており、古墳の築造位置とあわせ、主墳との密接な関係が想定できるだろう。

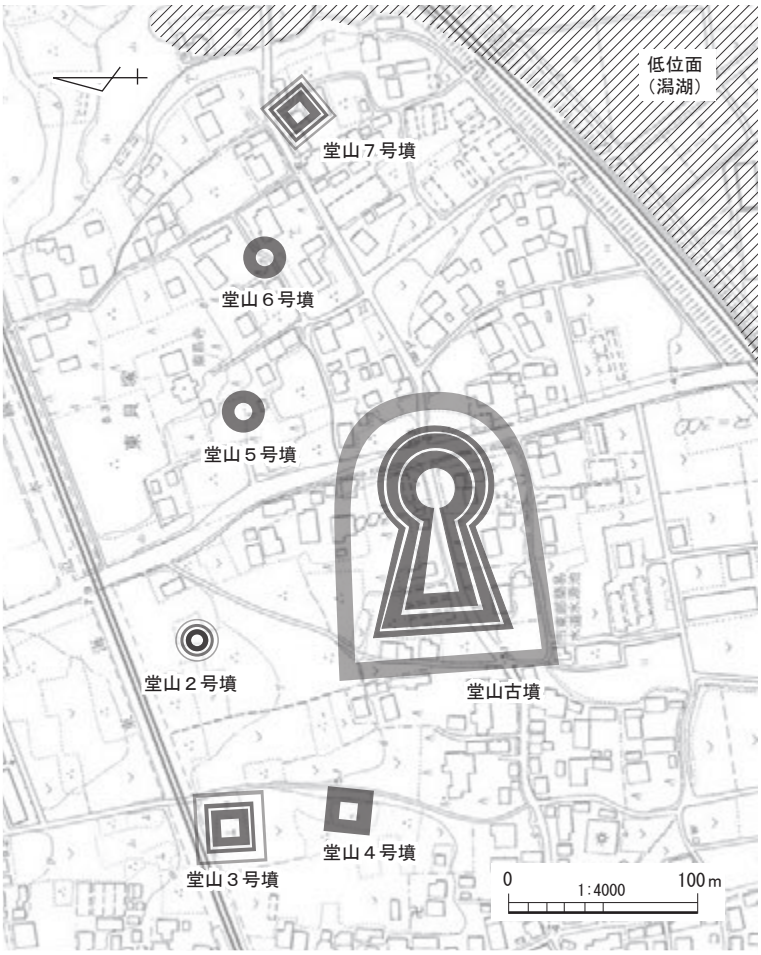


Fig.63　堂山古墳群の詳細

いっぽう、五ヶ山 B2 号墳は小笠山丘陵の末端に築かれており、墳頂部の埋葬施設からは、肩甲や頸甲を備えたＡ類型の甲冑をはじめ、革盾、刀剣や鉾、鉄鏃などの武器・武具類が大量に副葬されている（Fig.65）。鉄鏃や農工具には堂山古墳前方部埴輪棺と共通する形態がみられ、副葬品における関連性が指摘できる。この古墳は小地域において初めて埴輪を採用しているが、その特徴は堂山古墳のⅠ群埴輪と酷似している。五ヶ山 B2 号墳の埴輪は堂山古墳の近隣地から搬入された可能性も想定しうるだろう。五ヶ山 B2 号墳は堂山古墳との密接な関係がうかがえ、武器武具に特化した副葬品組成から、その被葬者は堂山古墳の被葬者を軍事的な方面から補佐した人物と想定しうる（鈴木 1999）。

狐塚古墳についても、同時期に構築された方墳であることに加え、葺石・段築・埴輪といった諸要素が整っていること、先行する首長墓がみられない小地域に単独で立地すること、小地域内で初めて埴輪を採用していること、潟湖を臨む丘陵上に立地すること、短甲を保有することなど、五ヶ山 B2 号墳との共通性が数多く指摘できる。埴輪の様相こそ独自性が認められるが、その被葬者は、軍事的な地位を背景に小地域を統括する役割を担っていたと想定することができる。

遠江においては、律令郡域に相当する小地域を代表する前方後円（方）墳が概ね 50 m級であることをふまえると、堂山古墳の隔絶性、優位性は明確である。堂山古墳被葬者の生前の影響力は、磐田原台地とその周辺に留まらず、遠江の広域に及んでいた可能性が高いだろう。堂山古墳から直線距離にして 20㎞の位置にある浜名湖北岸地域もその影響範囲内にあったと捉えられ、方墳を築くような従属的な人物を近隣地に配置する、王権中枢に類似した地域秩序の体制を整えていたとみることも許されよう。

（４）潟湖をのぞむ方墳

方墳の特徴　古墳時代中期における大型方墳は、古市古墳群を代表例に、佐紀古墳群や百舌鳥古墳群の陪冢にみられる。いっぽう、地方に目を移すと、単独立地の大型方墳も認められる。これら

大型方墳は、各地域において普遍的に分布するのではなく、丹波や出雲、伊勢など、築造される地域に偏りがある。遠江においても、陪冢的な方墳と首長墓としての方墳の双方が認められ、畿内地域や大型方墳が認められる地域と共通する。遠江は、方墳の規模こそ小さいものの、倭王権の中枢と近い、重層的な階層構成が体現されている地域といえるだろう。

方墳と潟湖　ここで、今一度、堂山古墳とその陪冢群、五ヶ山 B2 号墳、狐塚古墳の立地環境に注目しておきたい。盟主的な前方後円墳である堂山古墳は、大之浦と呼ばれる潟湖を臨む位置に築

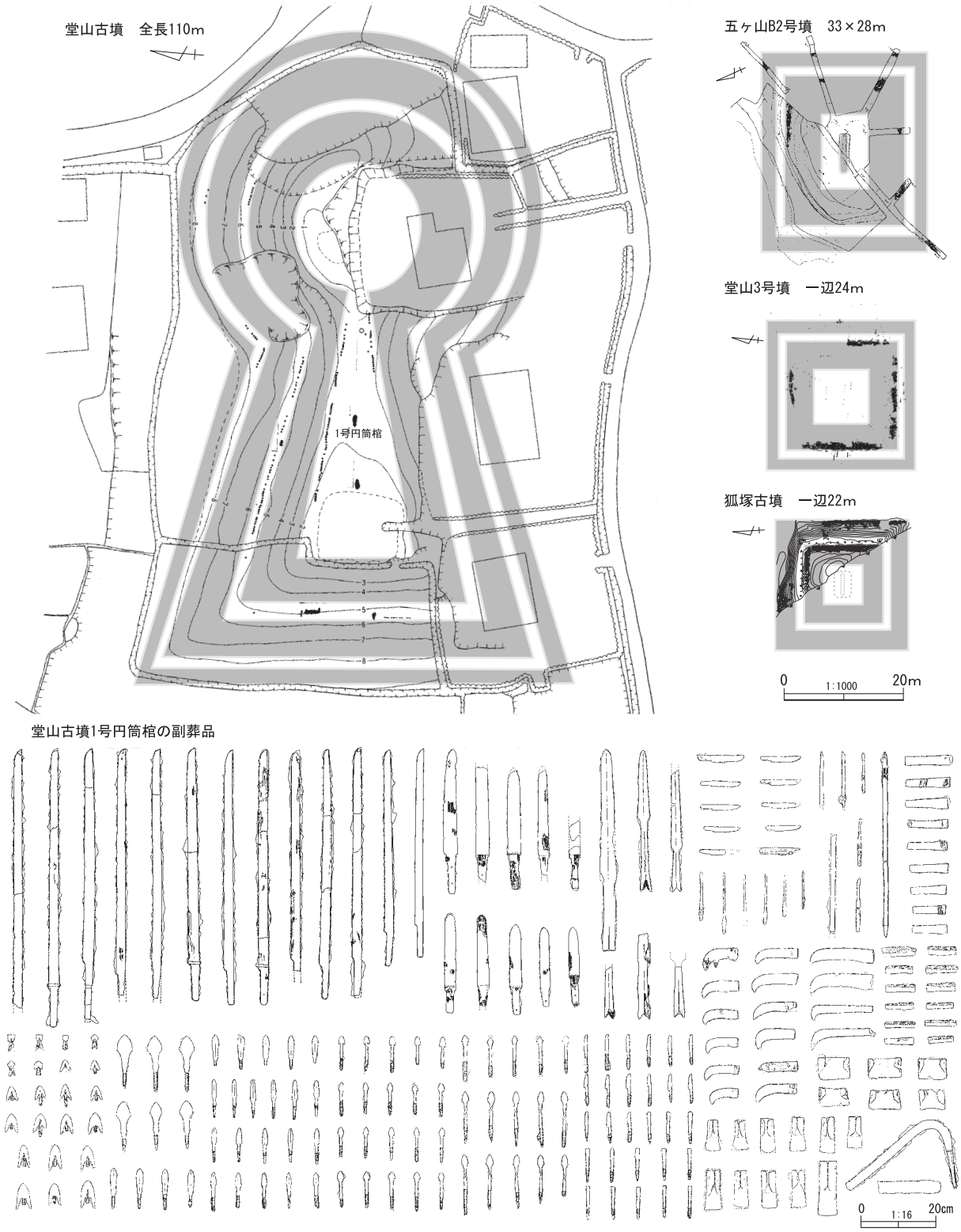


Fig.64　堂山古墳と中型方墳

造されている。五ヶ山 B2 号墳は、大之浦の西側に立地する原野谷川水系の潟湖「浅羽潟」を眼下に望む丘陵上に立地している。浅羽潟は、大之浦とも匹敵する面積をもち、安定した内湖として水上交通の利便性が高かったとみられる。五ヶ山 B2 号墳の構築を契機として、浅羽潟を望む小笠山丘陵西域の古墳の築造や集落の造営が活発化し、５世紀後半には首長居館である古新田遺跡が形成される。狐塚古墳が構築された都田川流域も遠州灘から河川を伝って内湖である浜名湖を経由した海上交通が至便な地域であり、狐塚古墳が構築された丘陵は、陸上交通路である浜名湖北岸道と海上交通路が交わる地点にあたる。

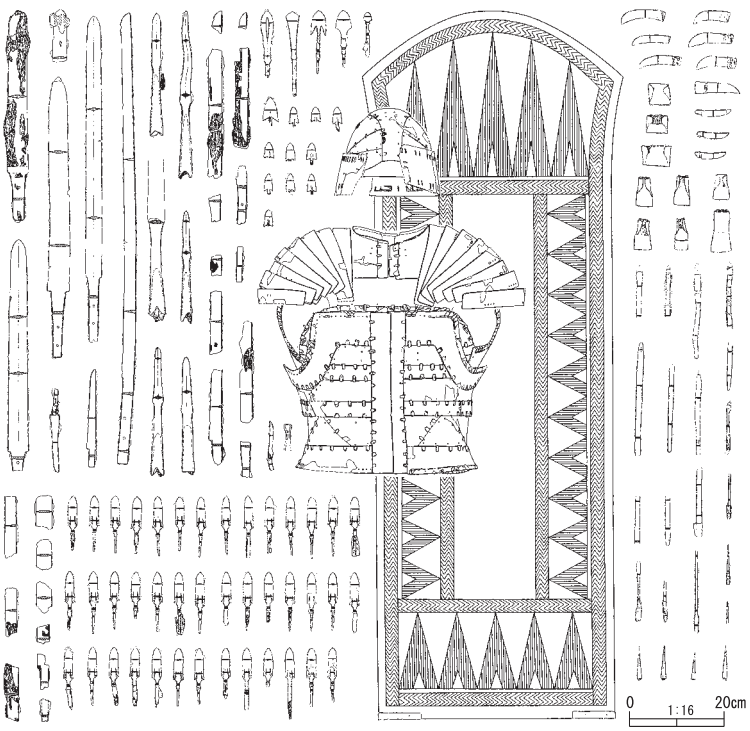


Fig.65　五ヶ山 B2 号墳の副葬品

堂山古墳群と遠江の中型方墳は、大之浦、浅羽潟、浜名湖といった三つの潟湖を臨む位置に立地しており、海上交通の要衝に位置しているといえるだろう。百舌鳥古墳群の立地に象徴されているように、古墳時代中期には海上からの景観を意識した位置に構築される古墳が顕著に認められる。5世紀の朝鮮半島南部においても海浜部に近い位置に立地する倭系古墳が多くみられることをふまえると、海上交通網の整備や把握が当時の倭王権にとって重要課題であったことがうかがえる。遠江においても潟湖を繋ぐ首長間の交流網の形成が意識されたとみられ、軍事的な性格も付与された地域秩序が形成されたものと捉えられるだろう。海上交通網を活用した情報の交流は、倭王権の統制のもと、朝鮮半島や中国大陸にむかって開かれていたといえる。古墳時代中期は古代における大交流時代であり、狐塚古墳の被葬者も広域交流網の末端に連なっていたと評価しうるだろう。

（５）小　結

狐塚古墳の諸要素を整理する過程で、同時代の方墳に注目し、副葬品組成や立地環境の共通性に注目した。狐塚古墳の被葬者像については、地域の首長としての性格に加え、堂山古墳の築造主体を軍事面で補佐し、浜名湖を通じた海上交通網と浜名湖北岸の陸上交通網を掌握した人物が想定できるだろう。また、軍事的な序列の面では、短甲のみを副葬する武装の組成から、もう一つの中型方墳である五ヶ山 B2 号墳の被葬者よりも下位におけると評価しうる。

また、当墳に採用された先進的な埴輪の特長と生産体制からは、倭王権との結びつきを強めた地域首長の力量もうかがうことができるだろう。古墳時代中期の方墳には、大型前方後円墳に付随するような従属性を認めることができるが、狐塚古墳のような単独立地の事例については、地域における主体性も認めるべきである。

遠江では、盟主的な大型前方後円墳の周囲に陪冢をめぐらし、近隣の海上交通の要衝に方墳を配置する特徴的な古墳の築造状況が認められる。方墳にかかわる古墳の立地からは、大之浦を中心に浅羽潟、浜名湖という三つの潟湖を臨む地域の連携体制が重視されていた可能性が指摘できた。海

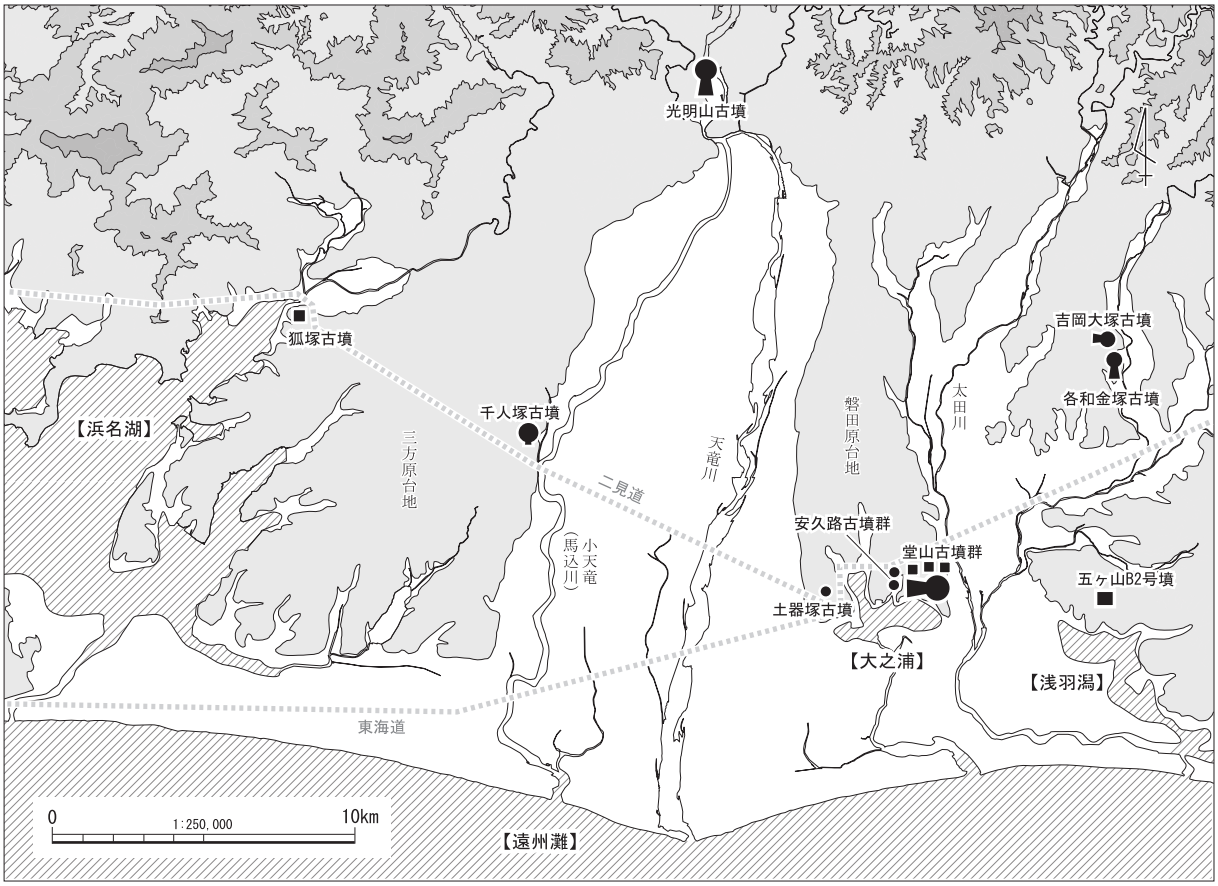


Fig.66　潟湖をめぐる古墳の立地

上交通網の開発と掌握は古墳時代中期の倭王権の重要課題であり、遠江における方墳のあり方は、倭王権の施策を地方において体現するものとして評価しうるだろう。各地の古墳時代中期の方墳には、武器武具を豊富に副葬するものが知られており、こうした地域連携を促す紐帯に軍事的な性格が内包されていた可能性が高いと考えられる。

ここまでの検討によって、浜名湖北岸地域における中型方墳の内容が明確になり、大型前方後円墳と中型方墳の関係の分析を通じて、大之浦を中心に浅羽潟、浜名湖という潟湖をめぐる連携体制が想定できるようになった。潟湖を通じた地域社会の動態については、今後、古墳の築造状況にとどまらず、集落遺跡の動向などを含めた総合的な検討が求められる。

遠江は多くの潟湖を抱えた地であることの意味を、狐塚古墳の調査成果をふまえて改めて問い直す必要がある。潟湖を繋ぐ内湖交流網が発達した地という認識は、かつてこの地域が「遠つ淡海」の国とよばれたことにも関連すると捉えられる。「遠つ淡海」とは、必ずしも一つの内湖に限定する必要はなく、連なる潟湖の総体を指す可能性を考慮すべきであろう。

第5章　総　括

本書で報告した狐塚古墳の調査成果や考察を通じて、5世紀前葉における方墳の特質を明らかにした。地域における埴輪生産導入の意義や、鉄製甲冑を保有する意味、交通網の掌握と大型前方後円墳との関係など、触れた内容は多岐にわたるが、さいごに調査内容と後論で明らかにした事がらを要約し、総括としたい。

古墳の立地　狐塚古墳は静岡県浜松市北区細江町の浜名湖を望む丘陵地に立地する。古墳の西側には浜名湖の入り江がおよんでいることを考えれば、浜名湖北岸の交通路と浜名湖を経由する海上交通網が交わる結節地を臨む位置を意識して古墳が築かれた可能性が高い。

古墳の規模と構造　2011年に実施した発掘調査の結果、狐塚古墳は一辺22ｍの二段築成の方墳で、葺石と埴輪をそなえることが判明した。上段と下段の斜面の間には幅1.8ｍほどの平坦面が巡っており、ここに立ち並べていた円筒埴輪列を検出した。円筒埴輪は築造当初の位置をとどめるものが14点分認められ、埴輪の樹立状況が明確になった。

また、墳丘断面の観察から、下段墳丘は地山を削り出して成形し、上段墳丘は盛土によって形づくられていることも判明した。周溝は北側に巡っていたことが確実であるが、後世の破壊が顕著で、その詳細は明確でない。現況の地形が古墳築造当初の形態を反映しているとみてよければ、周溝の幅は9ｍほどであったと考えられる。

埴輪の特徴　狐塚古墳からは円筒埴輪と形象埴輪が出土した。円筒埴輪は墳丘の中段平坦面と墳頂平坦面に、形象埴輪は墳頂平坦面に並べられていたと捉えられる。確認できる形象埴輪の種類は、家形、蓋形、甲冑形、靫形、盾形であり、鳥形埴輪が含まれる可能性がある。円筒埴輪は2条突帯3段構成に復元できるもので、大きく、2次調整にヨコハケを施すⅠ群と、2次調整にタテハケのみを施すⅡ群に分けられる。両者は調整技法のみならず、口縁や突帯の形状、透孔の特長、器壁の厚さなどの違いも看取でき、それぞれ製作主体が異なると考えられる。

Ⅰ群は近畿地方中枢部の埴輪との共通性が高く、直接的な技術伝播によってもたらされたものとみられる。いっぽう、Ⅱ群はⅠ群を模倣しつつ在来的な様相を色濃くもつ。Ⅰ群の製作工人は円筒埴輪のほかにも形象埴輪の製作にも従事し、Ⅱ群の製作工人はⅠ群製作工人からの技術指導を得ながら円筒埴輪のみを製作していたと捉えられる。先進的な工人集団に在来的な工人集団が加わる集団構成は、地方における盟主的な前方後円墳に数多く看取できる。狐塚古墳は規模こそ小さいが、階層的に上位の古墳と同列の埴輪生産体制が採用されていたと評価できる。

副葬品の概要　副葬品には短甲、鉄刀、鉄剣、鉄鏃、砥石がある。これらはいずれも採集品であるが、短甲については全体の構造がうかがえる。短甲の形式は長方板革綴短甲であり、中段地板、下段地板ともに推定部材数7枚であり、前胴上段に帯金をもつ。こうした特徴をもつ製品の編年的位置は、長方板革綴短甲の製作段階を3段階に分けた場合の第2段階から第3段階に相当する。

甲冑は採集品であるが、短甲の破片しか確認できない。本来、狐塚古墳には、短甲1領のみが副葬されていた可能性が高い。遠江における同時期の階層的に上位の古墳には、短甲のほか冑や附属具を備える甲冑の組合せが確認できることから、墳丘形態や規模に相応した武装秩序があったことがうかがえる。

古墳の築造時期　狐塚古墳のⅠ群円筒埴輪および形象埴輪は、埴輪検討会編年のⅣ期1段階に位置づけることができ、副葬品を含めた古墳の築造時期も、同じ段階とみなして矛盾がないことを確認した。この時期は、古墳時代中期中葉にあたり、円筒埴輪における窖窯焼成導入期、甲冑における鋲留技法導入期にあたる。また、須恵器編年におけるTK73型式期に並行し、古墳様式編年では

和田編年による七期、集成編年による6期に相当する。暦年代では、おおよそ、5世紀の第1四半期を中心とする頃に相当させることができる。

古墳の被葬者像　狐塚古墳の諸要素を整理する過程で、同時代の方墳に注目し、副葬品組成や立地環境の共通性に注目した。とくに、袋井市五ヶ山B2号墳は、葺石・段築・埴輪といった諸要素が整っていること、先行する首長墓がみられない小地域に単独で立地すること、小地域内で初めて埴輪を採用していること、潟湖を臨む丘陵上に立地すること、短甲を保有することなど、狐塚古墳との共通性が数多く指摘できる。また、同時期に築かれた大型前方後円墳である磐田市堂山古墳も同時期に構築されていることに加え、周囲に方墳を陪冢として巡らしていることにおいて関連が見出せる。堂山古墳、五ヶ山B2号墳、狐塚古墳は、それぞれ大之浦、浅羽潟、浜名湖という遠州灘に繋がる潟湖に面して構築されており、大型前方後円墳を中心とした潟湖を通じた連携体制が想定可能である。

以上のことから、狐塚古墳の被葬者については、地域の首長としての性格に加え、堂山古墳の築造主体を軍事面で補佐し、浜名湖を通じた海上交通網と浜名湖北岸の陸上交通網を掌握した人物を想定しうる。

［参考文献］

安藤　寛　2012「(9) 東貝塚遺跡（堂山7号墳)」『静岡県磐田市　市内遺跡確認調査報告書』磐田市教育委員会　pp.39-41
一瀬和夫　1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概要・Ⅴ』大阪府教育委員会、pp.65-99
川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古学会　pp.1-70
北野耕平（編）　1976『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告第2冊　大阪大学文学部国史研究室
栗原雅也　1995『北島遺跡発掘調査報告書』細江町教育委員会
阪口英毅　1998「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲―変遷とその特質―」『史林』第81巻第5号　史学研究会　pp.1-39
静岡県　1992『静岡県史』資料編3　考古三
鈴木一有　1999「五ヶ山B2号墳の被葬者像」『五ヶ山B2号墳』浅羽町教育委員会　pp.100-106
鈴木一有　2003「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集　帝京大学山梨文化財研究所　pp.49-70
鈴木一有　2004「下開発茶臼山9号墳出土甲冑の検討」『下開発茶臼山古墳群Ⅱ』辰口町教育委員会　pp.119-126
鈴木一有　2008「遠江における埴輪受容の特質」『古代文化』第60巻第1号　pp.77-86
鈴木一有　2012「三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義」『郷ヶ平古墳群』（財）浜松市文化振興財団
鈴木一有　2014「七観古墳出土遺物からみた鋲留技法導入期の実相」『七観古墳の研究』京都大学大学院文学研究科　pp.353-380
鈴木一有（編）　1999『五ヶ山B2号墳』浅羽町教育委員会
鈴木一有（編）　2012『郷ヶ平古墳群』（財）浜松市文化振興財団
平良泰久　1987「方墳二態」『京都府埋蔵文化財論集』第1集　pp.91-103
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
田中勝弘　1980「方墳の性格」『古代文化』第32巻第8号　pp.27-55
中井正幸ほか　2003『史跡　昼飯大塚古墳』大垣市教育委員会
西川　宏　1961「陪塚論序説」『考古学研究』第8巻第2号　pp.10-23
橋本達也　1999「野毛大塚古墳出土甲冑の意義」『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会　pp.285-295
橋本達也・鈴木一有　2014『古墳時代甲冑集成』大阪大学大学院文学研究科
埴輪検討会　2003a『埴輪論叢』第4号
埴輪検討会　2003b『埴輪論叢』第5号
原秀三郎（編）　1995『遠江堂山古墳』磐田市教育委員会
広瀬和雄　1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版社　pp.24-26
細江町　1986『細江町史』資料編六
室内美香（編）　2009『堂山3号墳発掘調査報告書』磐田市教育委員会
和田晴吾　1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号　考古学研究会　pp.44-55

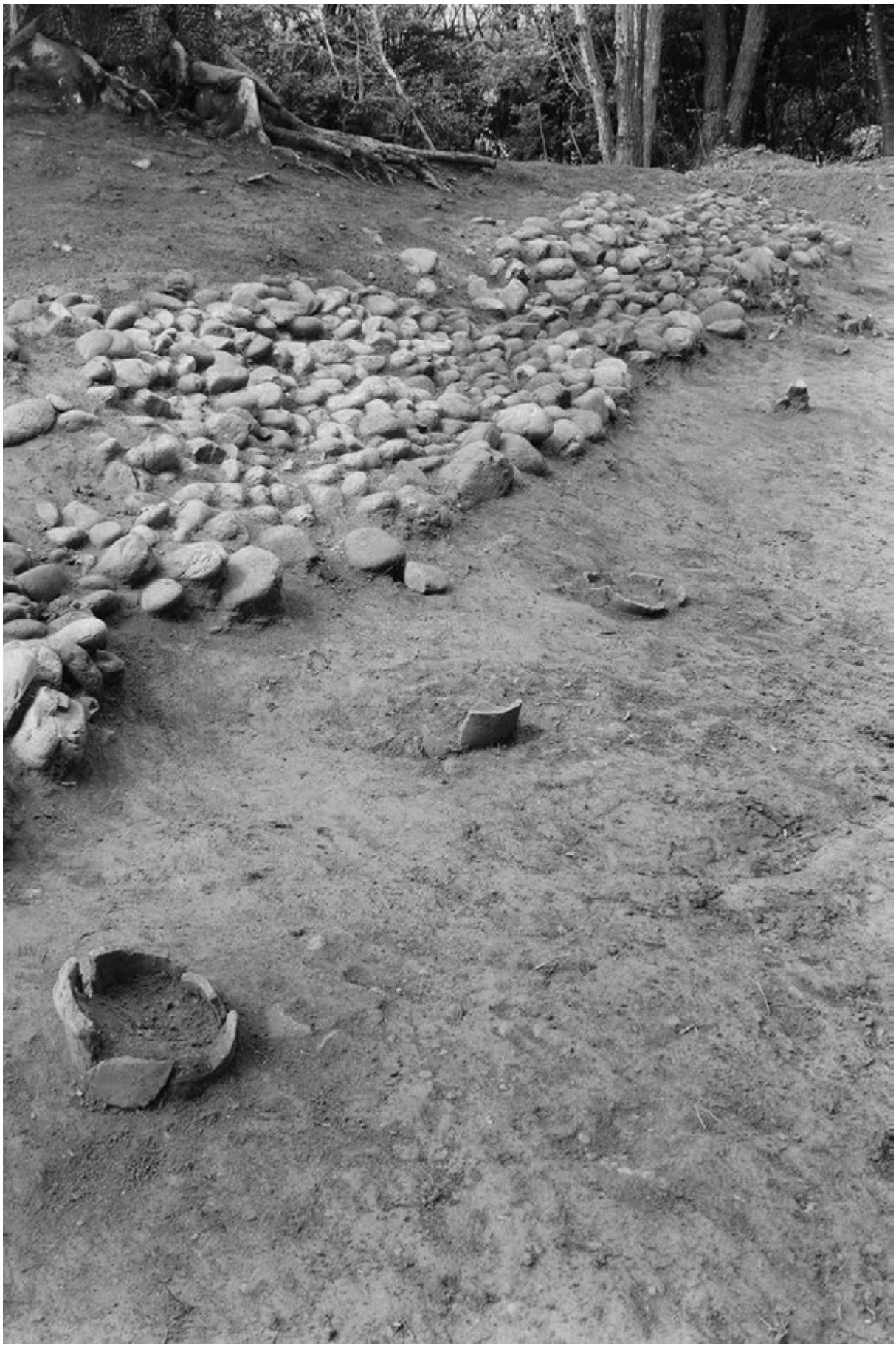
［図出典］

Fig.64：［原編 1995］、［鈴木編 1999］、［室内編 2009］、Fig.65：［鈴木編 1999］より一部改変のうえ引用

図　版
PLATE

狐塚古墳 全景（北東から）

PL.2



円筒埴輪出土状況（南東から）

1　狐塚古墳 遠景（西から）

2　狐塚古墳 遠景（北から）

1　調査前墳丘残存状況（北西から）

2　調査前墳丘残存状況（北東から）

1　1トレンチ調査状況（東から）

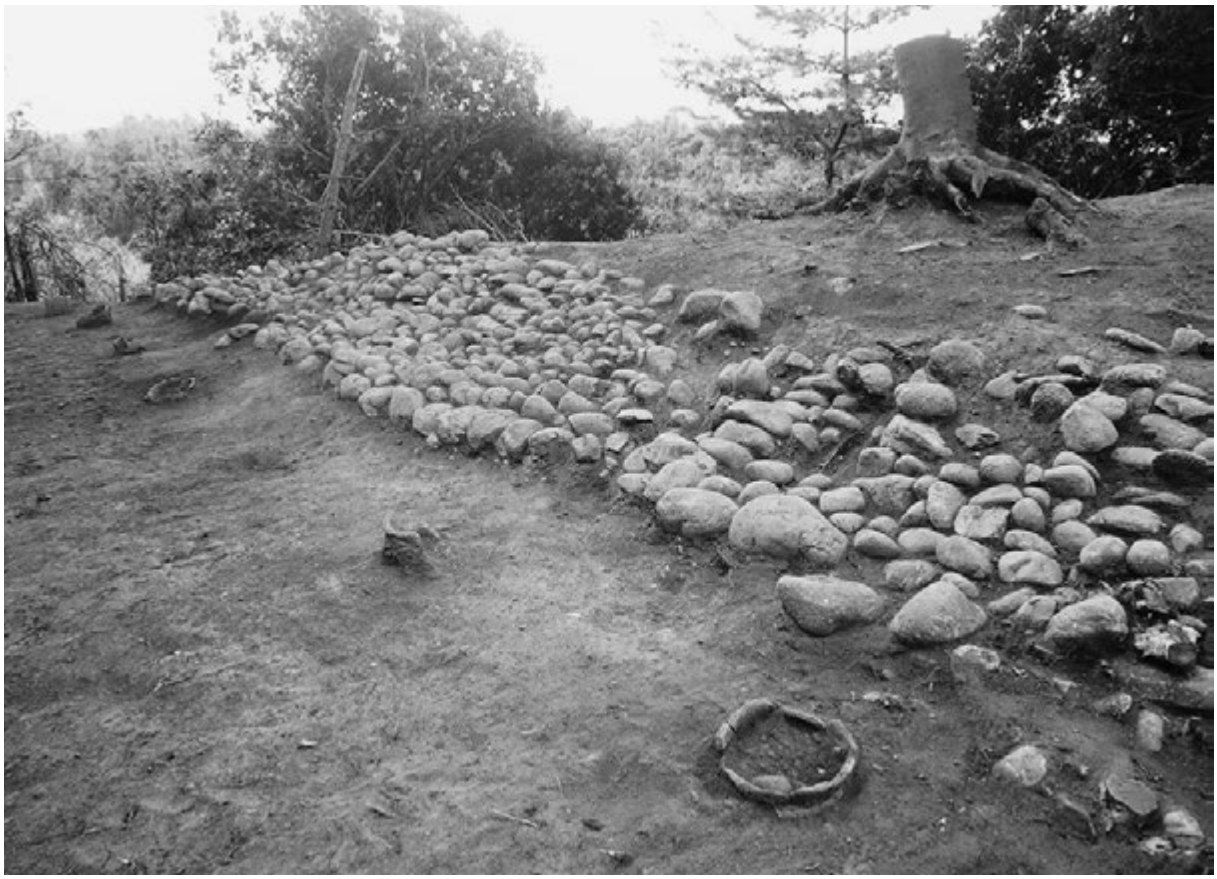
2　2トレンチ調査状況（東から）

3　3トレンチ調査状況（北東から）

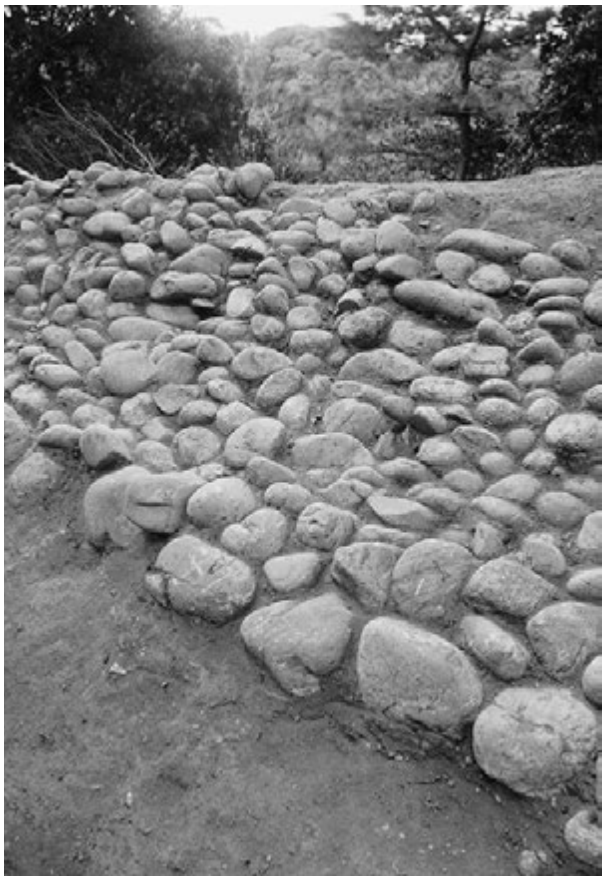
4　4トレンチ調査状況（東から）

1　完掘状況（北東から）

2　東側墳丘残存状況（東から）



1　東側上段葺石検出状況（北東から）



2　葺石詳細（H5 付近、北東から）

3　葺石詳細（H8 付近、北東から）

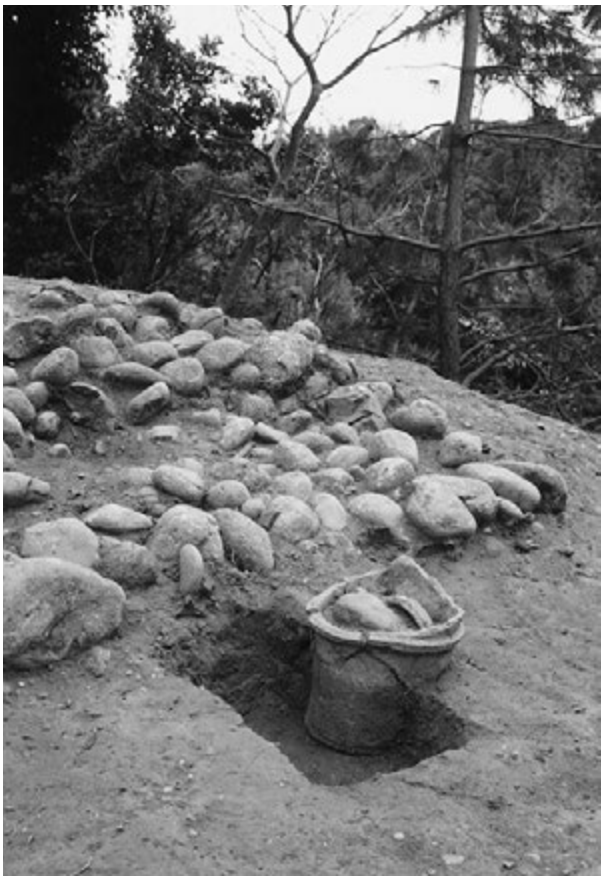
1　北側上段葺石検出状況（東から）

2　葺石詳細（H16 付近、北東から）

3　葺石詳細（H18 付近、北西から）

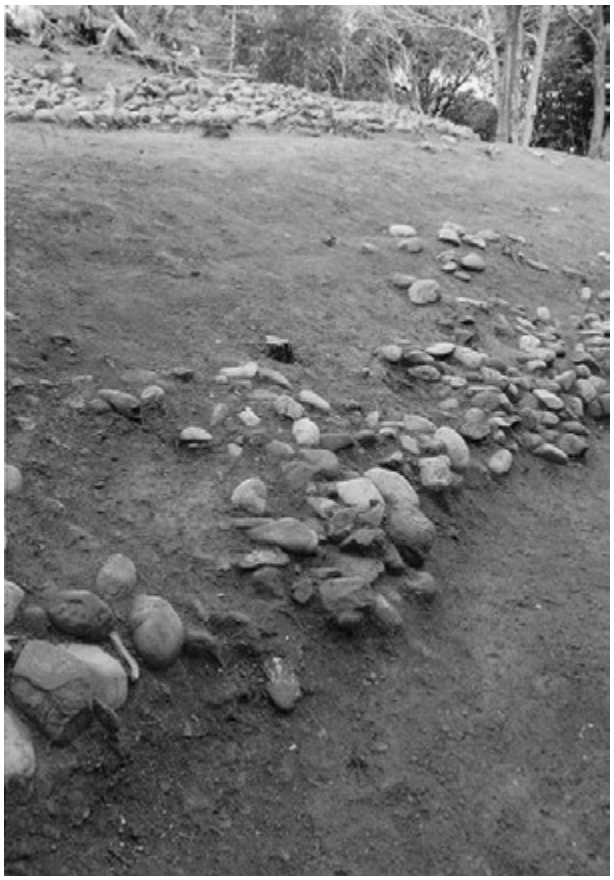
1　北側埴輪列検出状況（北東から）

2　埴輪検出状況（H16、北東から）



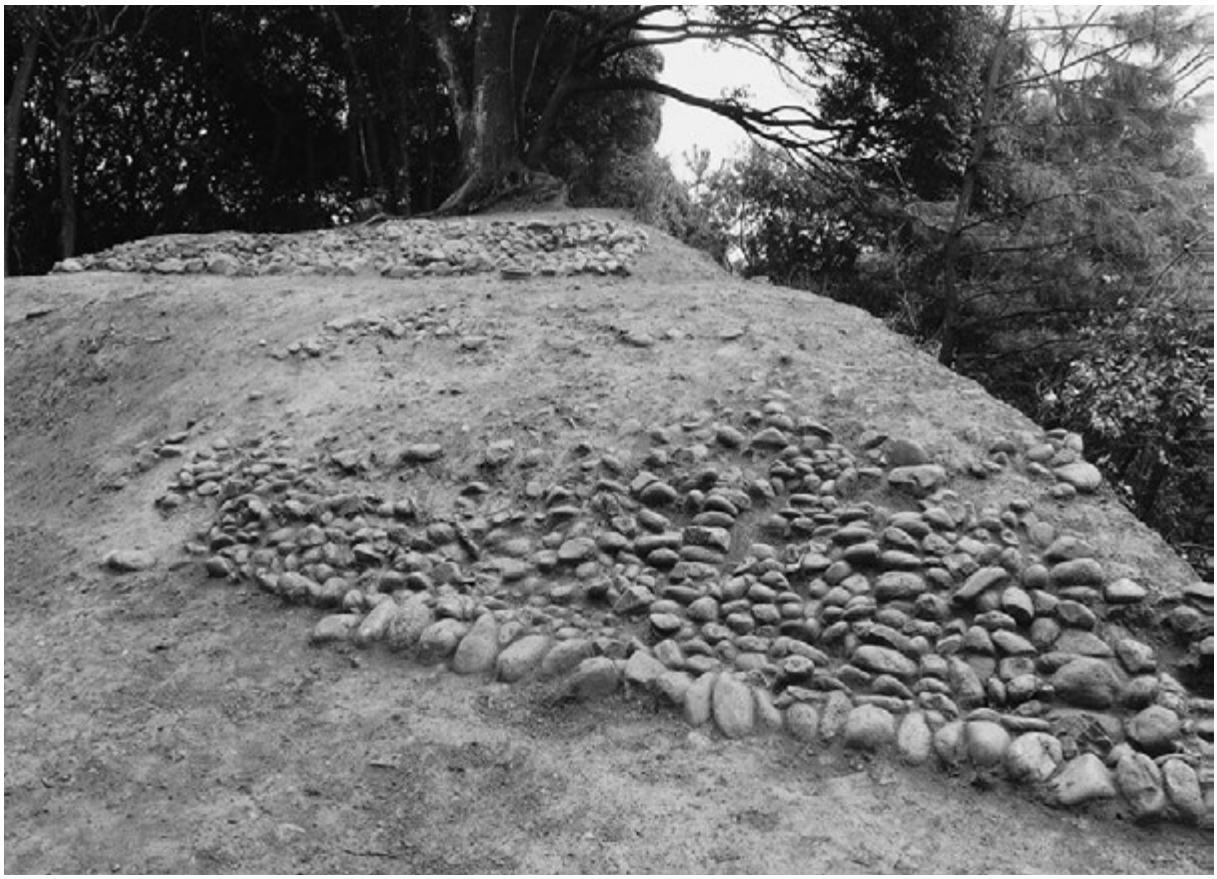
3　埴輪検出状況（H18、北東から）

1　東側下段葺石検出状況（北東から）



2　東側下段葺石詳細（南東から）

3　東側下段葺石詳細（北東から）



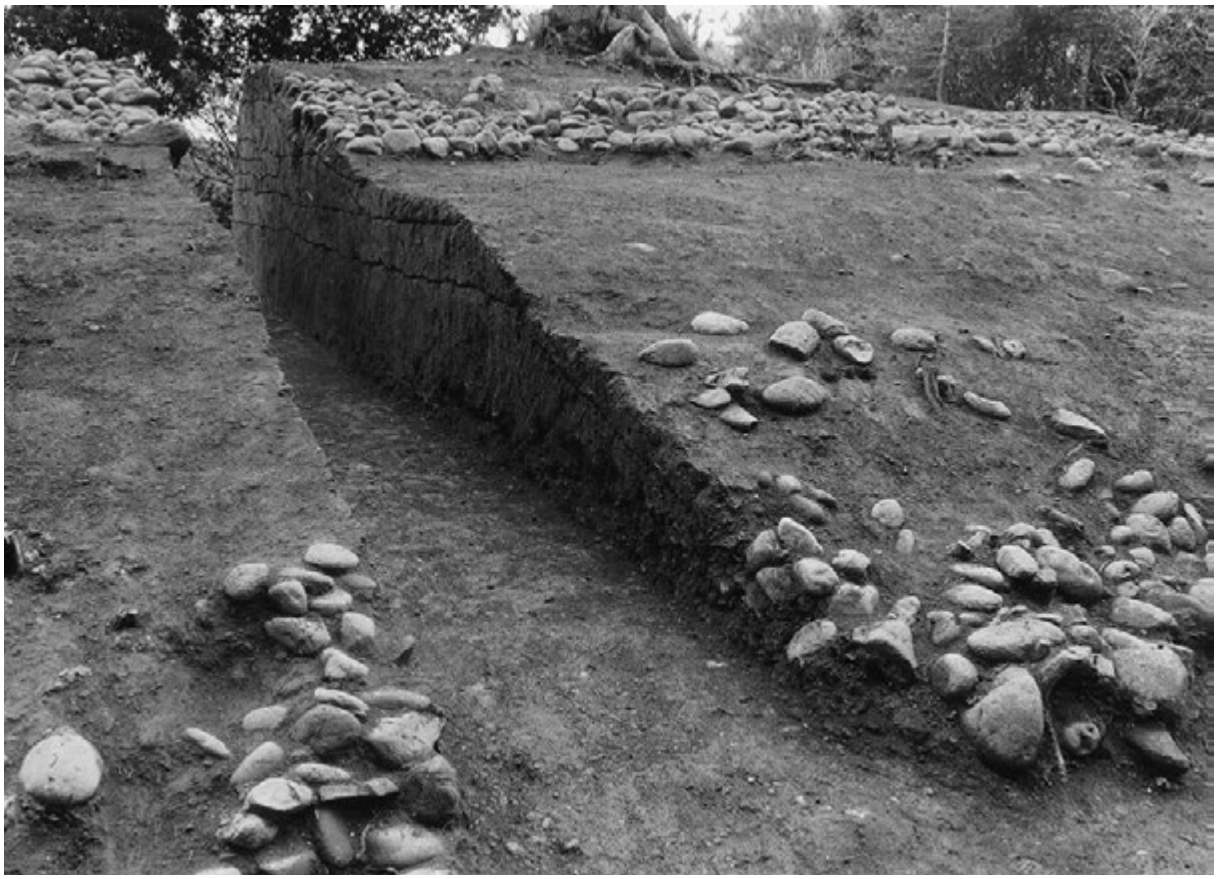
1　北側下段葺石検出状況（北から）

2　北側下段葺石詳細（東から）

3　北側下段葺石詳細（北西から）

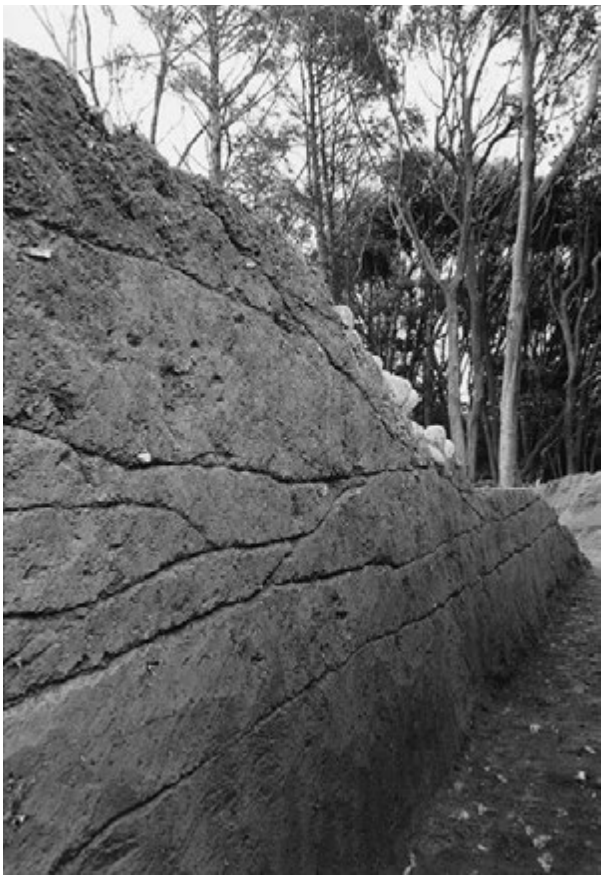
1　墳丘断ち割り状況（北東から）

2　北側上段葺石断ち割り状況（西から）

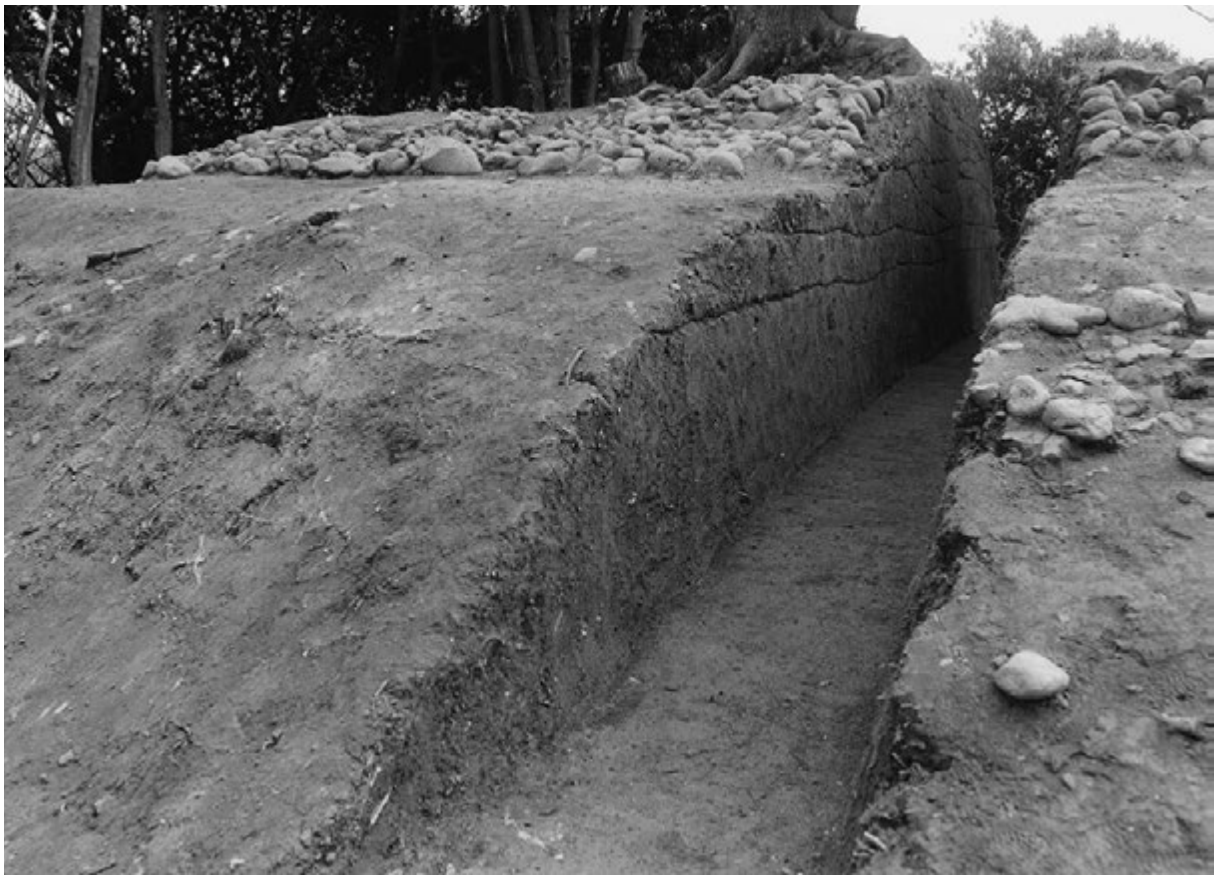


1　東西トレンチ墳丘断ち割り詳細（東から）

2　東西トレンチ上段葺石断ち割り状況（東から）

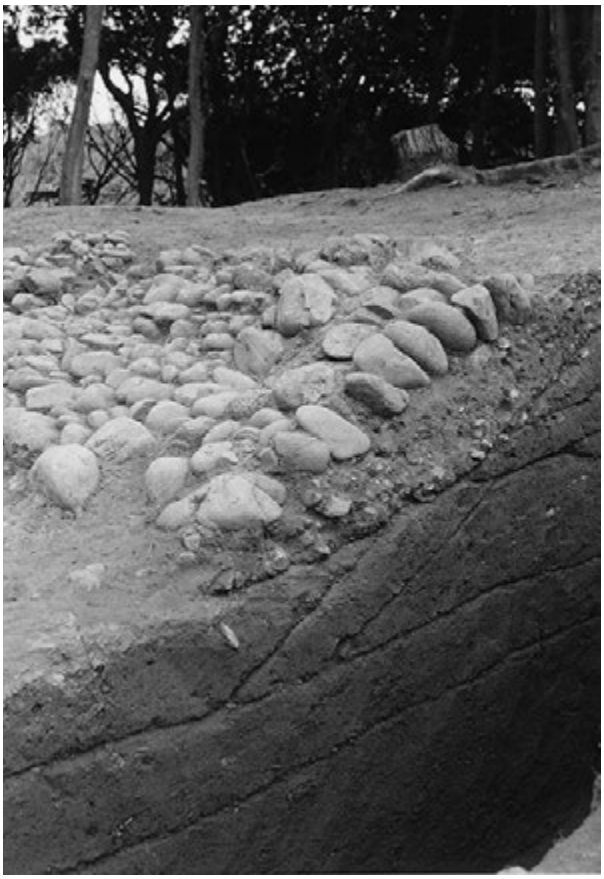


3　東西トレンチ墳丘盛土の状態（西から）



1　南北トレンチ墳丘断ち割り詳細（北から）

2　南北トレンチ墳丘盛土の状態（南から）



3　南北トレンチ上段葺石断ち割り状況（北西から）

1　1975 年墳丘残存状況（西から）

2　1975 年遺物採集風景（西から）

1　1975 年墳丘残存状況（北西から）

2　1975 年崩落葺石残存状況（北西から）

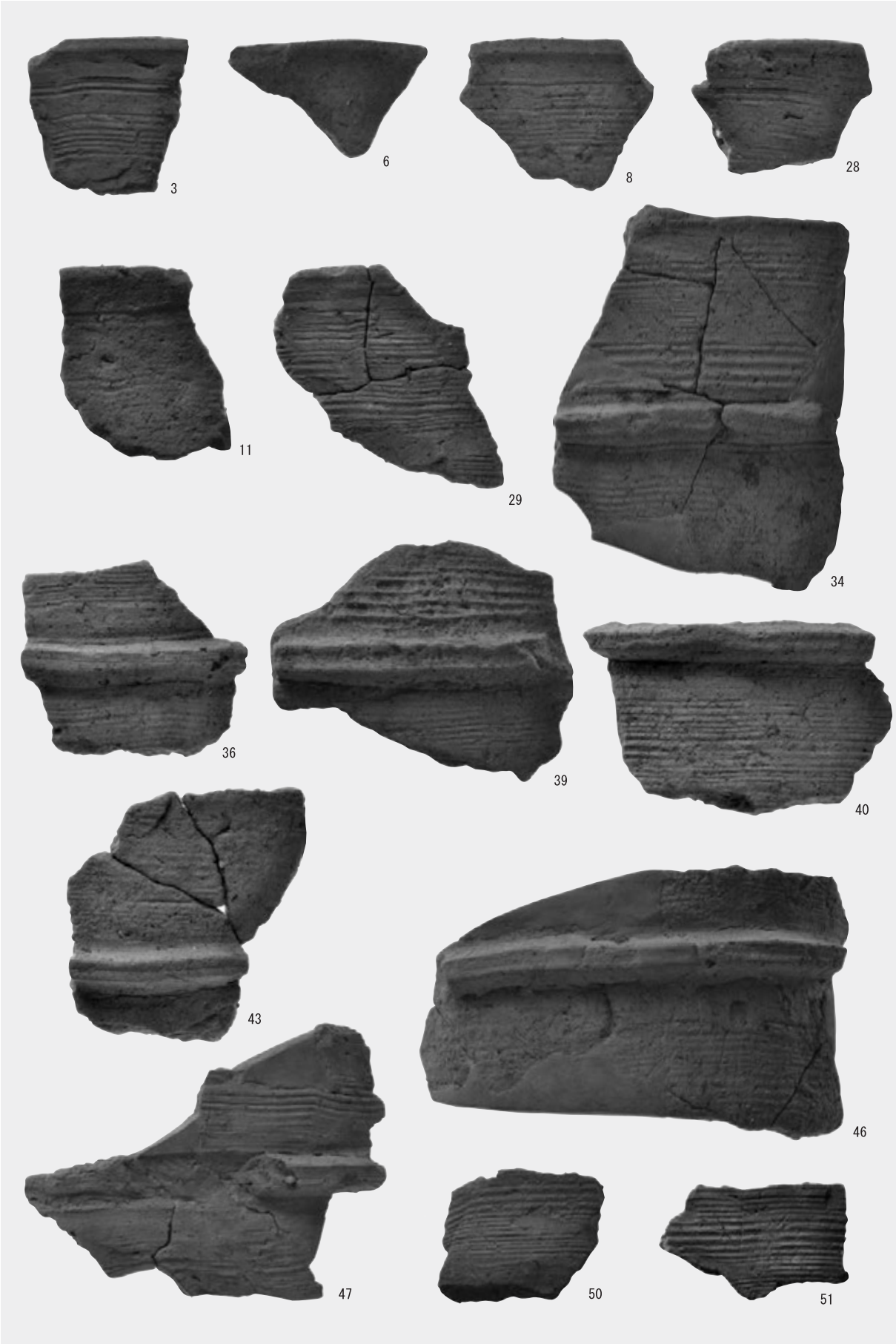
主要埴輪

1　主要円筒埴輪

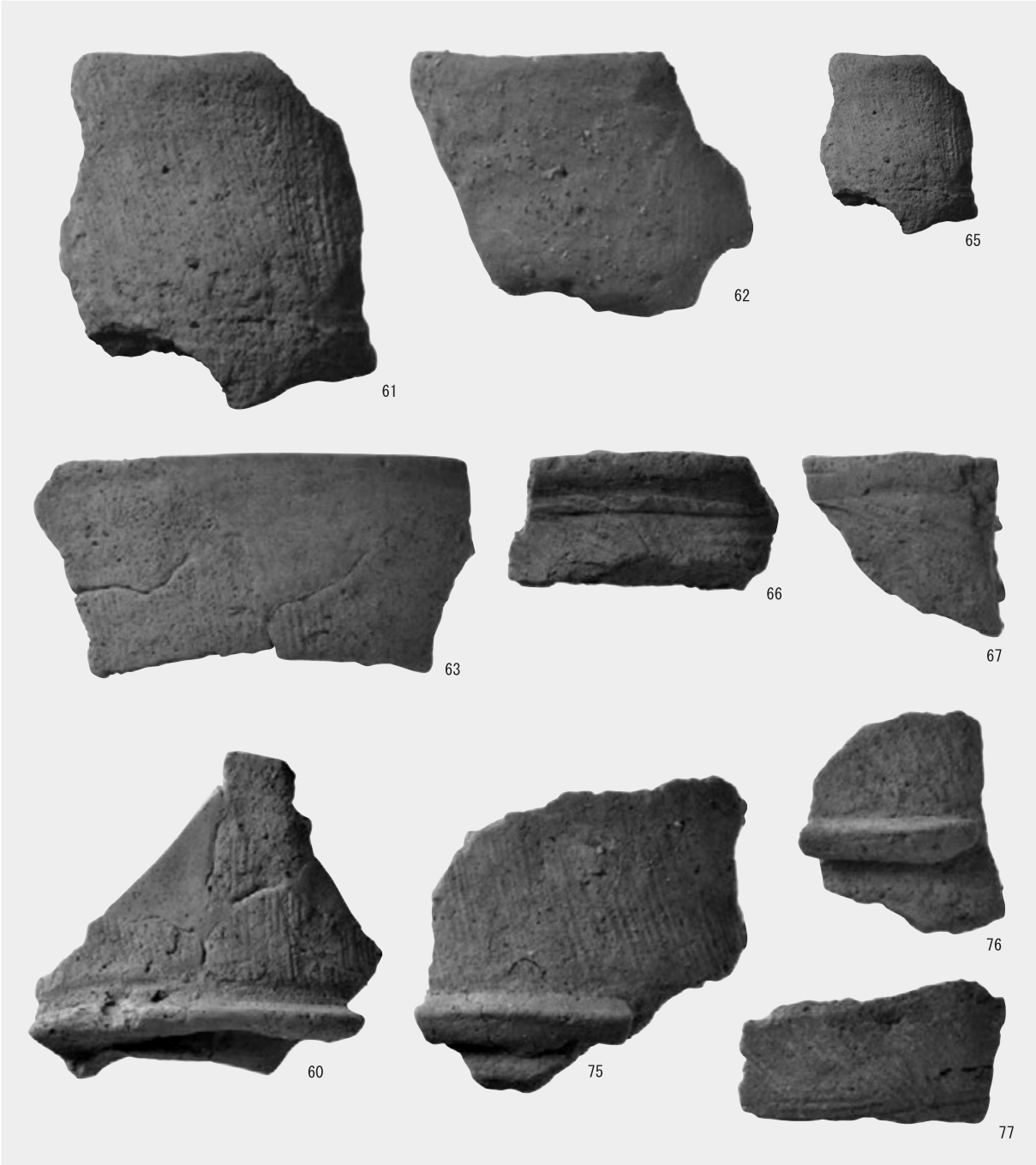
2　円筒埴輪 Ⅰ群（H18）

3　円筒埴輪 Ⅱ群（H20）

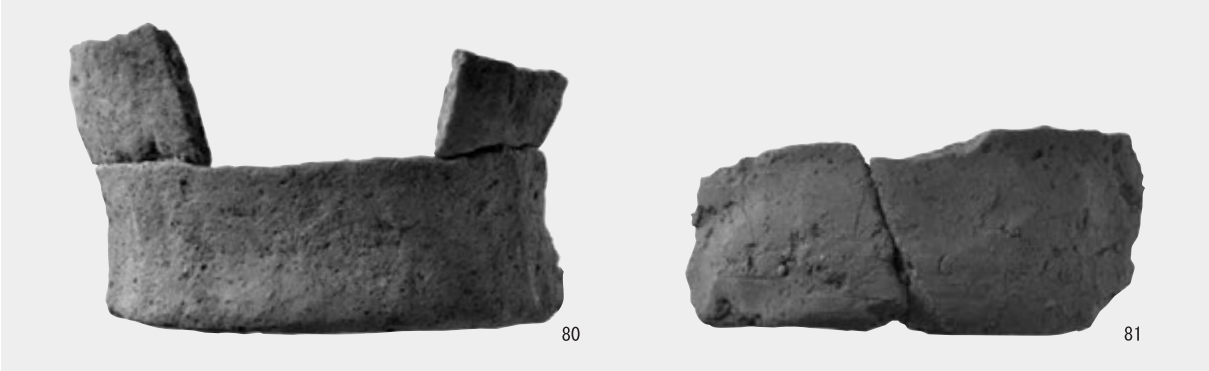
中段平坦面樹立埴輪（54 ～ 57：Ⅰ群、78・79・82・83：Ⅱ群）



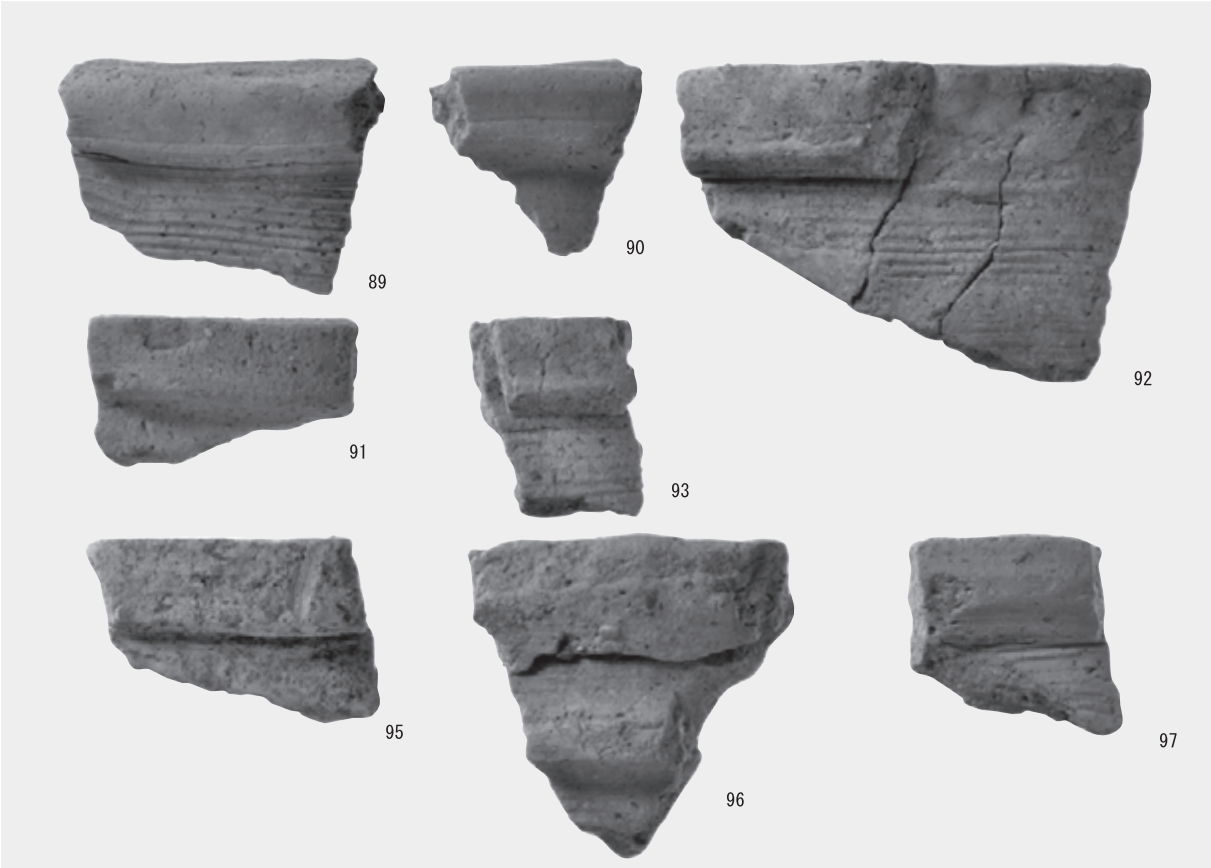
円筒埴輪 Ⅰ群



1　円筒埴輪 Ⅱ群

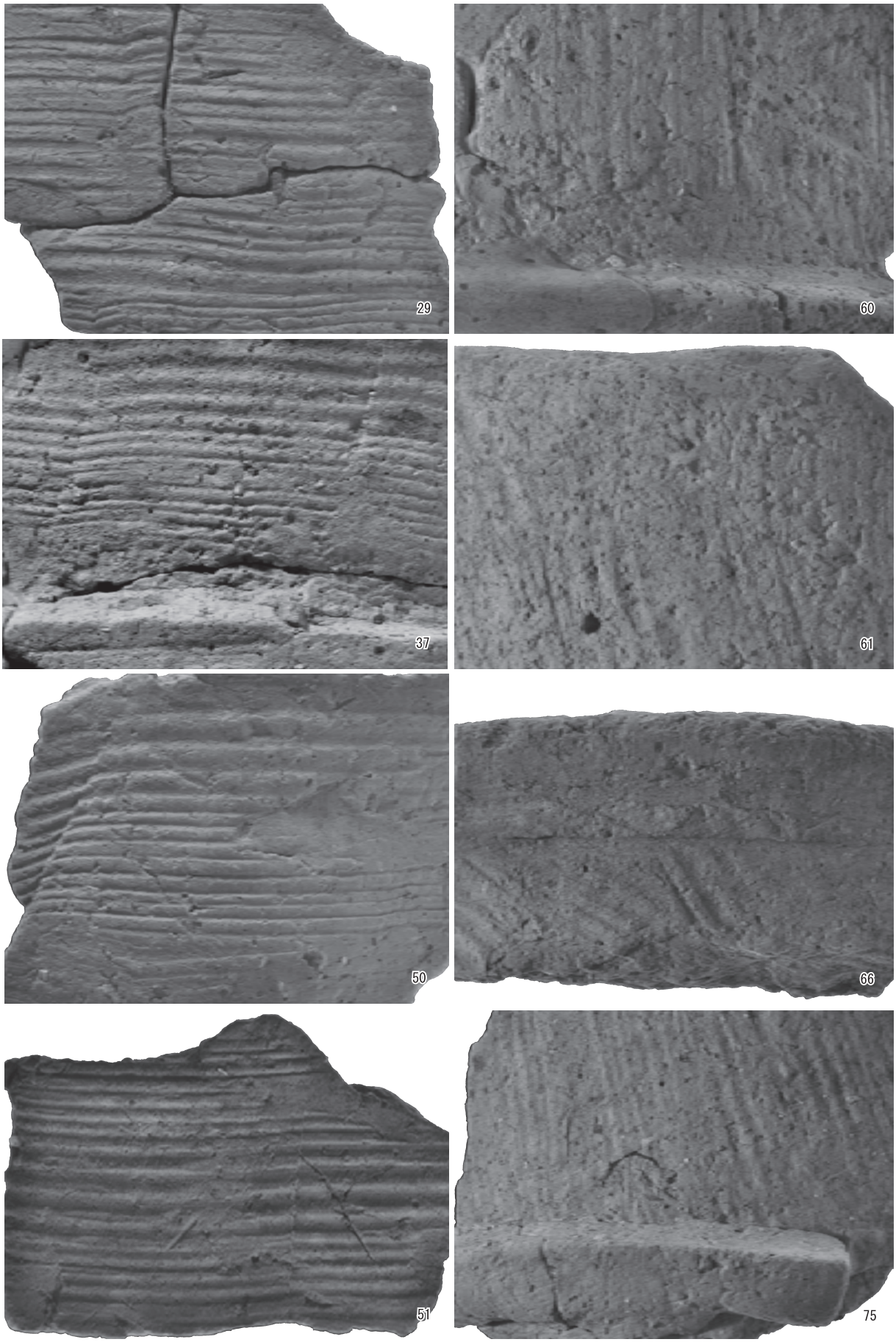


2　円筒埴輪底部



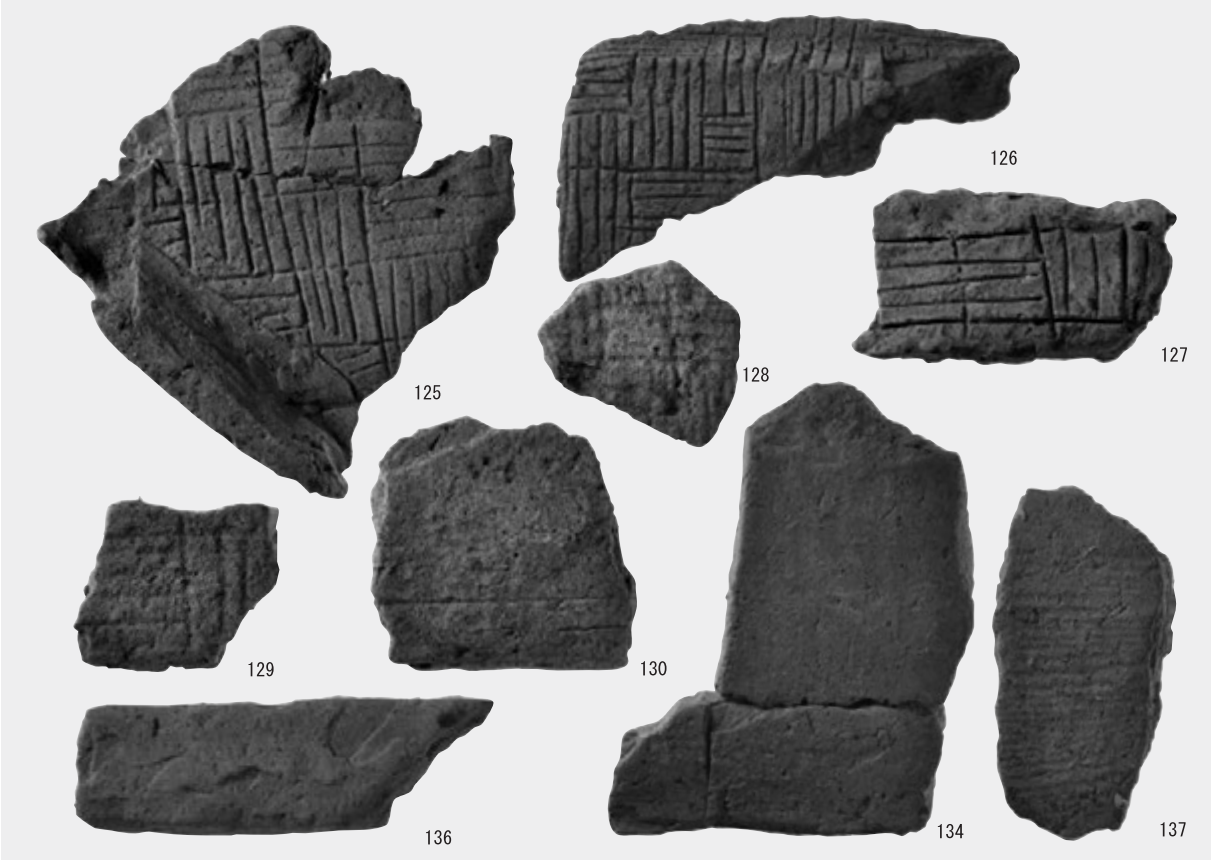
1　円筒埴輪（貼付突帯口縁）

2　朝顔形埴輪

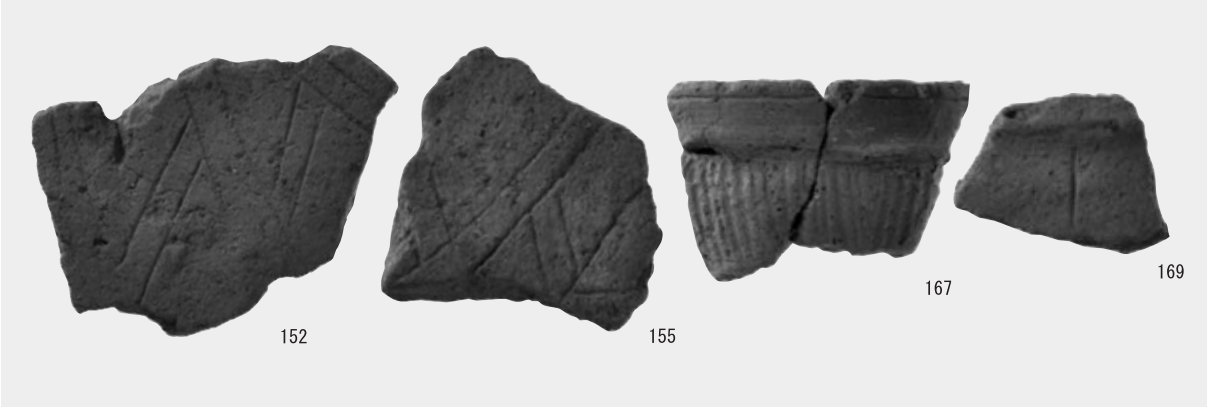


円筒埴輪詳細（29・37・50・51：Ⅰ群、60・61・66・75：Ⅱ群）

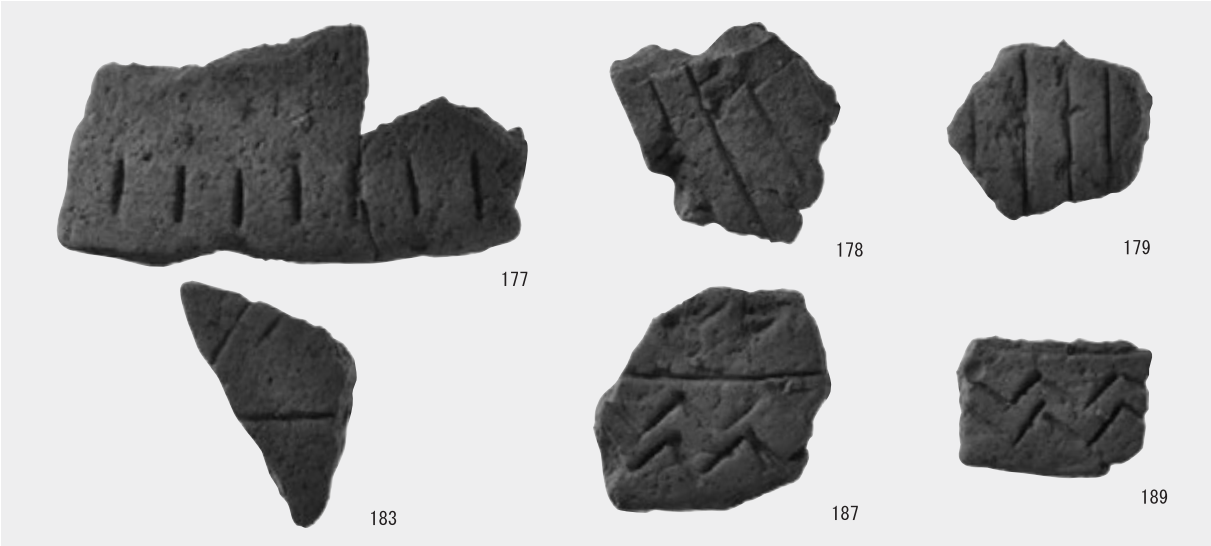
1　形象埴輪集合



2　家形埴輪

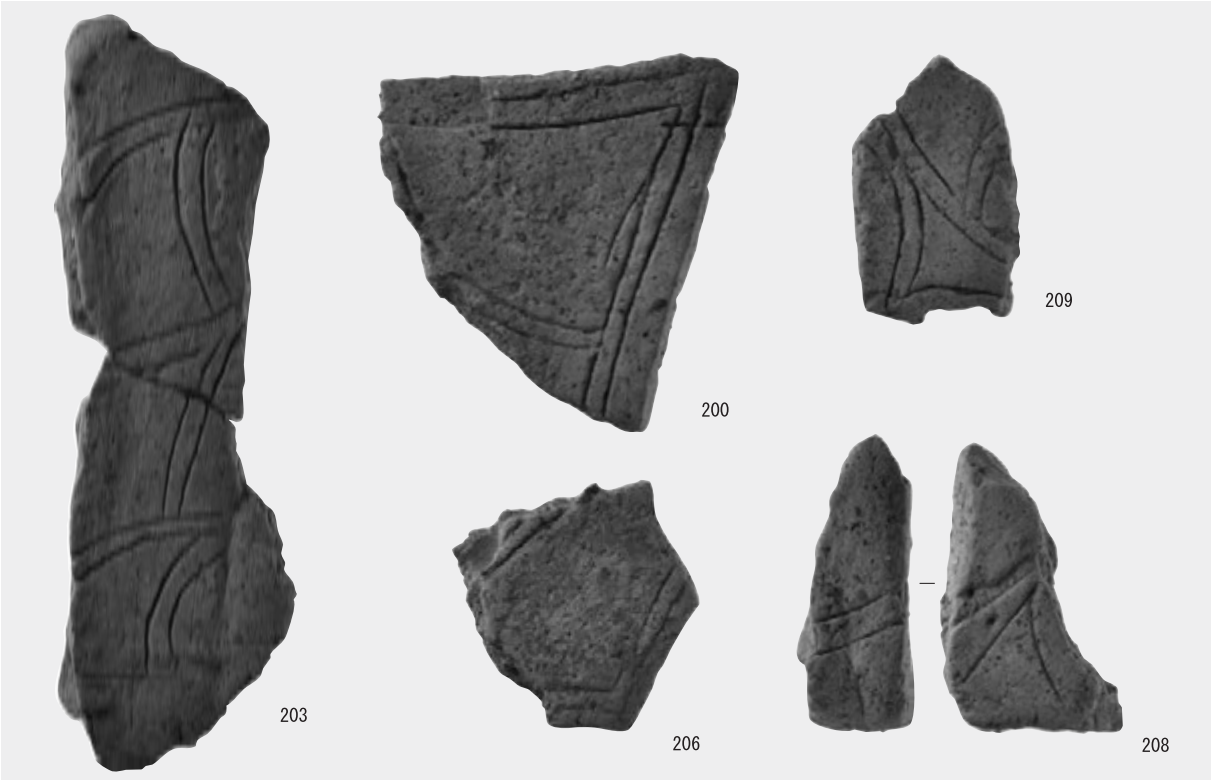


蓋形埴輪



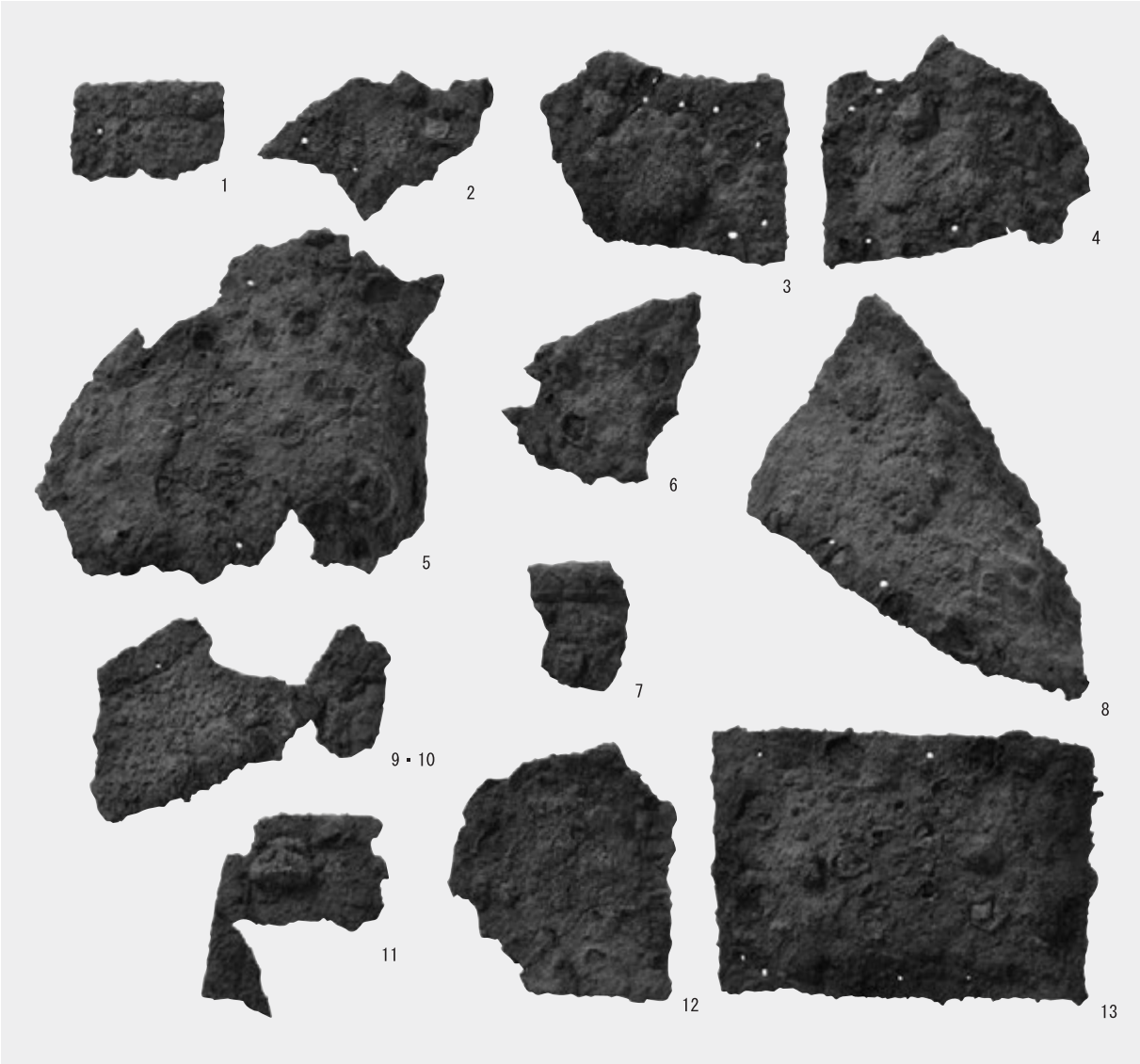
1　甲冑形埴輪

2　盾形埴輪

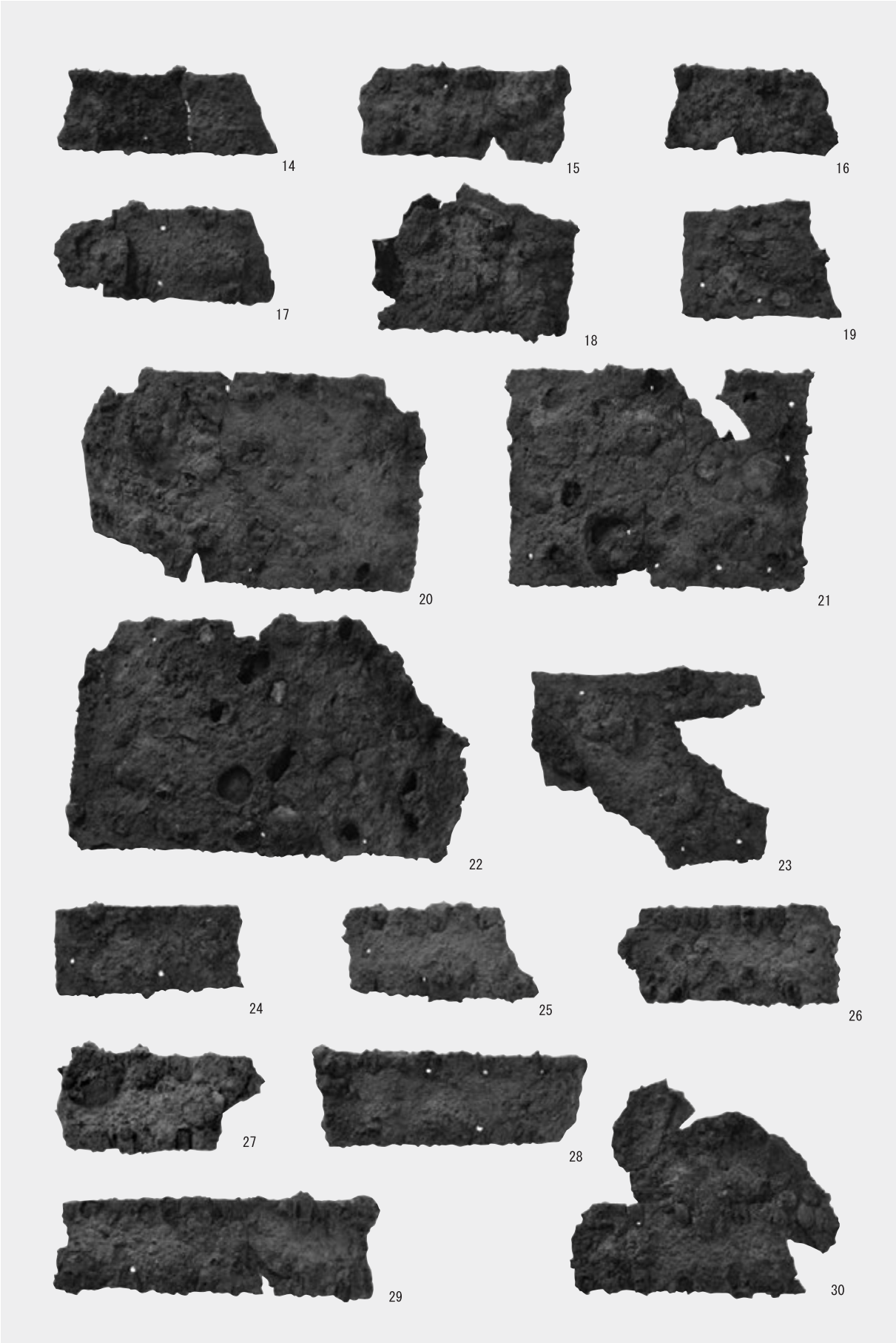


3　靫形埴輪

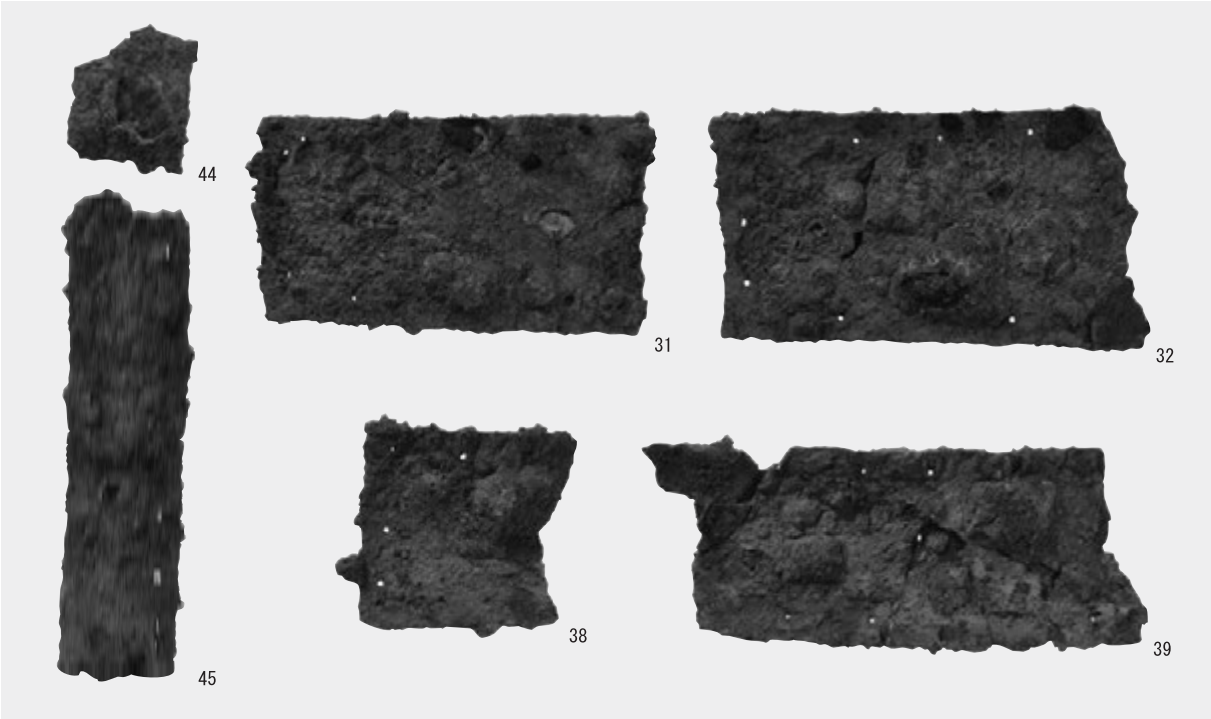
1　長方板革綴短甲展開状況



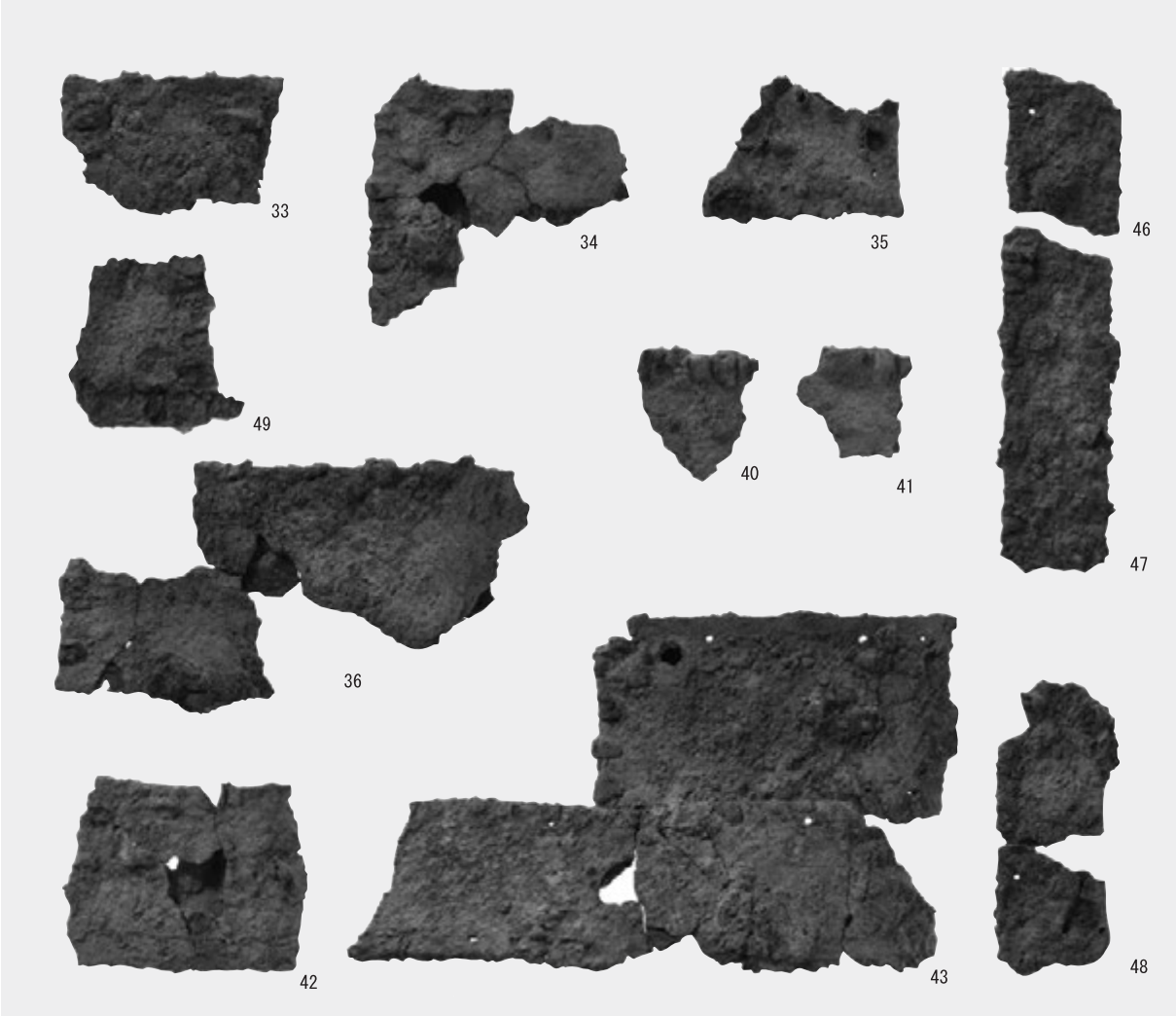
2　長方板革綴短甲 左前胴・後胴：堅上第１段・第２段



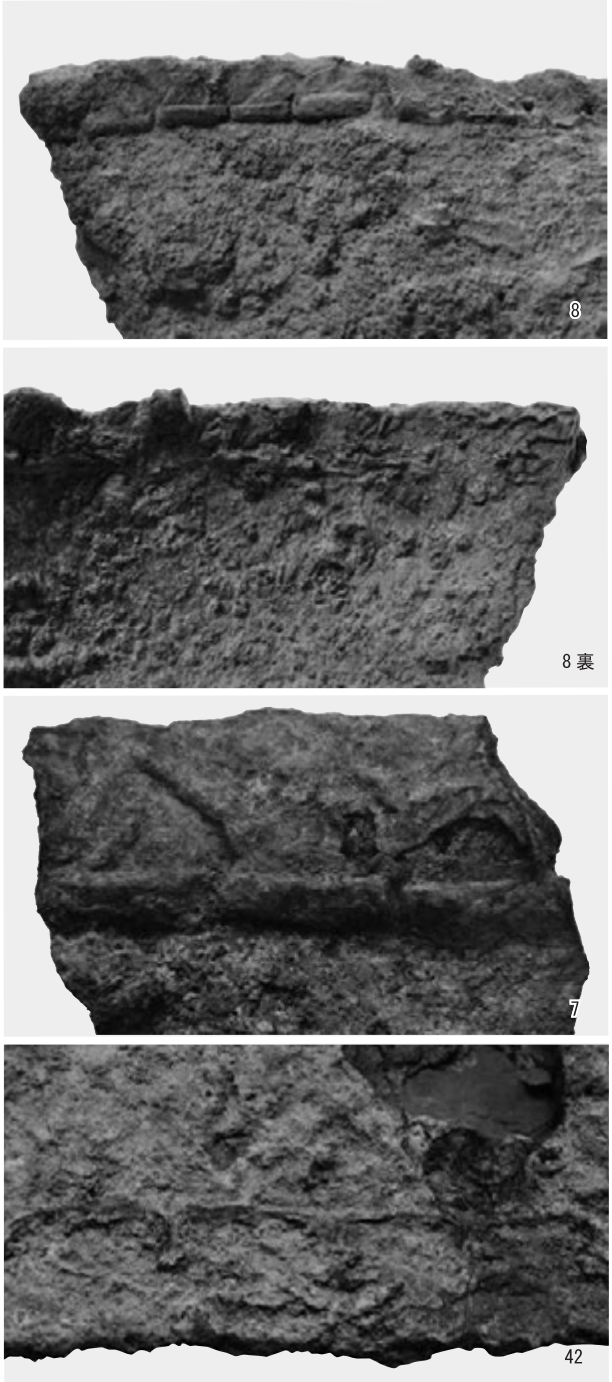
長方板革綴短甲 竪上第３段、長側第１段・第２段



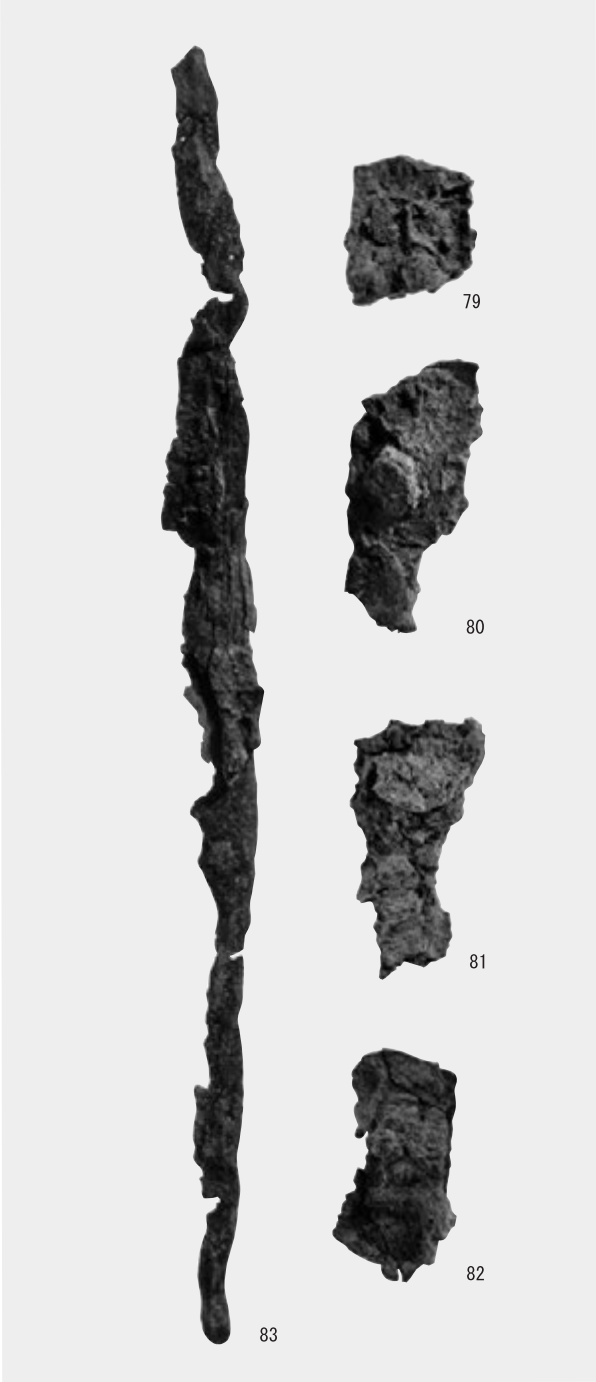
1　長方板革綴短甲 左胴：引合板・長側第３段・第４段



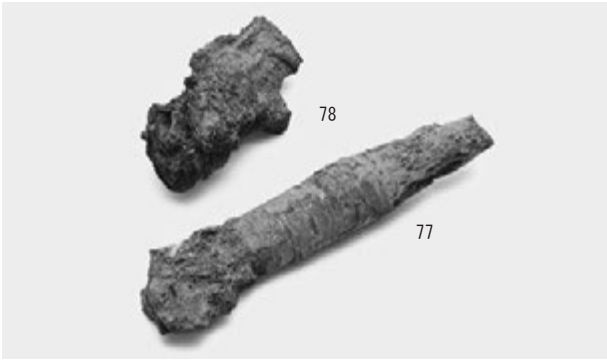
2　長方板革綴短甲 後胴・右前胴：長側第３段・第４段・引合板



1　長方板革綴短甲細部



2　刀剣類



3　鉄 鏃

4　砥 石

報　告　書　抄　録

書名（ふりがな）	狐塚古墳（きつねづかこふん）
編著者名	鈴木一有（編集）、和田達也
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929　浜松市中区中央 1-2-1　イーステージ浜松オフィス棟 浜松市文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652　浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466　FAX（053）457-2563
発行機関	浜松市教育委員会
発行年月日	2015 年 3 月 20 日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
狐塚古墳（きつねづかこふん）	静岡県 浜松市北区 細江町	22202	5-03-78	34 度 47 分 53 秒	137 度 39 分 21 秒	2011年 1月19日 ～ 2011年 3月30日	260 ㎡	土取工事に 先立つ事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
狐塚古墳	古墳	古墳時代 中　期	古　墳 方墳、一辺 22 m 葺石・埴輪あり	埴輪・短甲など	古墳時代中期中葉に築造された一辺 22 m、二段築成の方墳。葺石と埴輪を備える。以前の採集品に埋葬施設から出土した短甲がある。

北緯、東経は世界測地系の数値である

狐塚古墳

2015 年 3 月 20 日

発　行　　浜松市教育委員会
浜松市文化財課
（教育委員会の補助執行機関）
〒 430-8652　浜松市中区元城町 103-2
印　刷　　松本印刷 株式会社

Kitsunezuka Tumulus

Excavation Report

A Report of Archaeological Investigations on 5th Century Tumulus in Western Shizuoka, Japan

March, 2015

Hamamatsu Municipal Board of Education